澀波二合嚩底莎嚩二合訶

飲食供養印明第八

明を誦して曰く　曩麽悉底哩三合也陀嚩蘖哆喃薩嚩怛他蘖哆喃唵阿囉婆阿囉婆迦囉迦囉嚩哩嚩哩嚩哩嚩鄰嚩鄰那陀毘摩訶嚩哩莎嚩二合訶

燈供養印明第九

明を誦して曰く　曩麽悉底哩三合也陀嚩蘖哆喃薩嚩怛他蘖哆喃阿藍帝爾嚩二合藍帝伜波必也の反儒底始弃莎嚩訶

普莊嚴供養明印第十

明を誦して曰く　曩麽薩婆母馱菩地薩埵嚩喃薩婆佗烏特二合伽帝塞破羅四捨伽伽那劒莎縛訶

此の明を持する力の故に能く如意寶を生じて、一切の諸佛菩薩の衆會に供養したてまつる、此の讃歎を誦する福德力に由るが故に、此の供養をして普ねく一切の諸佛菩薩の衆會に遍せしむ、讃歎の明に曰く　曩麽薩婆母馱菩地薩埵嚩二合喃一薩婆怛路二合僧句素弭哆二鼻枳惹二合囉始吠三那謨素都帝薩嚩二合訶四

復た無動明王の根本の明を誦すること三遍すれば、能く聖者をして歡喜して願を與へしめ、速かに菩提を圓滿することを得るが故に。次に即ち先業を懺悔せよ、一切の罪障願くは皆な消滅す。復た此の願を作すべし、我れ今所有る一切の善業を法界の衆生に廻施して、我が此の願をして速かに無上菩提を成就することを得せしめ、一切種智を具せんことを、復た此の加持の明を誦すること八遍せよ、明に曰く　曩麽(一)薩埵嚩喃那暮素都帝摩訶嚩日羅二合薩婆薩埵嚩(二)四路迦羅底瑟佗薩嚩(三)怛羅嚩吠達羅摩摩拏地瑟佗耶莎嚩二合訶

上の如く供養し本尊を加持し已て、前の灌頂の印を結んで自ら灌頂せよ。

無動金剛處空部母印第十一

此の處空門(四)明印を結び用ひて身を護し及び本尊を護す、故に部母と名く、亦た處空眼と名く。

進力俱に蓮華掌に入る　即ち虛空部母眼と名く

二羽分開して珠を捻印にせよ。

印を以て身を護し(五)本尊を護し　曰く　曩麽悉底哩二合也陀嚩二合拏蘖帝弊薩嚩怛佗蘖帝

亦た聖者虛空眼と名く　明に曰く

(一) 薩埵縛喃一本に薩縛液馱冒地薩埵喃に作る。

(二) 四路一本に嚩に作る。

(三) 怛羅等の五字、一本に怛囉二合薩囉吠二合に作る。

(四) 明印一本に眼印に作る。

(五) 本衍字なるかを疑ふ。

(一)嚕　一本に嗡に作る　(二)底　若くは毘の字か。
(三)法界生印　法生の印、内縛して二地二火二空立て合す、三股杵の如し。

弊唵哦哦那路者徐哦哦那三摩薩嚩都(一)嚕蘖哆(二)底沙囉三婆吠入嚩二合囉那謨阿謨伽喃莎嚩二合訶

無動金剛(三)法界生印明第十二

戒方進力内に相ひ叉へ　六度竪て合せ頭相ひ拄へ
腕を開いて左右の臂を加持し　印を擧げて漸く頂上に至らして開く
眞言の悉地此に隨つて生ずるを以て　是の故に名けて法生の印となす。
印を結び加持し明を誦して曰く　曩麽薩嚩母馱冒地薩怛嚩喃阿薩羅嚩他薩羅縛多囉路計涉嚩二合訶

法生印とは一切如來の不動の菩提心より生じ、大悲本願より生じ、佛口より生じ、法化より生ず、故に法生の印と名く。

次に前の虛空部母の眼の明を誦すること七遍、即ち觀せよ、一切の諸佛菩薩目前に在すが如く、手に數珠を執り如法に念誦せよ、是の如く廣く佛事を作し已て、當さに本尊根本三昧耶の印を結ぶべし、先づ金剛百字の眞言を誦して、加持して傾動せざらしめんための故なり。

(一)捻數珠印　佛部念誦の印。
(二)根本三昧耶獨股の印。
(三)婆摩　一本に婆頗に作る、(四)荷婆々々　一本及び高本になし。
(五)百字の明　七十五字あり。

(一)捻數珠明印第十三

其の印は前の部母の印に準じて二羽分開す、即ち是れ此の印なり、明を誦して曰く
曩麽嚩日羅二合日契弊薩嚩怛佗引蘖帝毗喩二合婆伽特縛弊舉遮の反怛地也二合佗嚩唎健馱哩戰荼唎摩蹬儗濱俄哩怛佗引伽多吠曳二合使怛摩底吽入縛二合哩多帝逝伊能迦羅焰句嚕莎嚩二合訶

無動金剛(三)根本三昧耶印明第十四　亦た根本身印と名く　六度和合して内に相ひ叉へ　直く進力を舒べ頭相ひ拄へ

智度屈して方便の背を捻せよ　禪、戒の背を捻することも亦た是の如し
當さに金剛百字の明を誦して　自身を加持して堅固に住すべし
復た本明を誦して悉地を成す。　眞言に曰く　唵阿三摩阿三摩三曼哆都那哆怛嚩泌底舍那徐訶羅訶羅(四)娑摩二合囉拏娑麽二合囉拏尾蘖哆母馱達摩帝薩羅薩羅三摩嚩邏荷羅荷羅荷娑荷娑怛羅耶怛羅耶伽那伽那摩訶嚩囉囉迦沙二合徐入縛二合攞那入嚩二合攞那娑伽嚩莎縛二合訶。

(五)百字の明を誦して加持し復た觀せよ、一切諸佛菩薩行者の前に在して、前の如きの種種の供養を攝受して廣大に成就す、所謂る現世所求の一切悉地するを最勝悉地と名

け、亦た金剛薩埵悉地と名く。復た是の願を作さく、願くは此の功德を以て普ねく一切に及ぼし、我れ等と衆生と皆共に佛道を成せん。毎日三時に念誦し時別に最少は一百八遍せよ、已下は成せず、念誦了て虛空眼の眞言及び印を以て本尊を(一)如持し、歡喜して願を與へしめ、亦た堅固にして散せざらしめよ、(二)後ち根本印明を誦して曰く、其の手印は前の根本三昧耶に準ずる是れなり、二手の中指已下を以て並に內に向へ相ひ叉へて便ち鉤に爲り、二頭指側め相ひ拄へて、二大指各の無名指の甲を捻して、即ち成ず、根本明を誦すること三遍せよ。

(一)如は加の字か。
(二)後に作る。一本に復

國譯底哩三昧耶不動尊聖者念誦祕密法卷中 終

國譯底哩三昧耶不動尊聖者念誦密法卷下

大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

無動金剛寶山印第一　是れを寶山の身密印と名く
金剛堅固にして內に相ひ叉へよ
種種の供養並に護身　本明を以て加持し頂上に散せよ。
無動金剛頂印第二　頂上に置安せよ頭印と名く
禪度掌に入れ把(にぎ)て拳に爲(つく)り　靜坐して心を安んじて觀照を作せ。
想へ此の全身聖者の前にありと
無動金剛髻印第三
戒方檀慧內に相ひ叉へ　忍願(一)堅合せ進力を附けよ
禪智二度背け相ひ著け　屈して戒方の相ひ叉へたる內に入れ
二無名與もに面を相ひ著けて　印を擧げて左の髻の中に置安せよ

一本に無動金剛寶山印の前に不動金剛祕密要法品第六とあり。

(一)堅　堅の字か。

是れを無動金剛髻と名く。

無動金剛眼印第四

前きの髻印に準じて手を翻へし、倒にして垂れ額の前に至せ、即ち無動金剛眼と名く。

無動金剛口印第五

檀慧二度内に相ひ叉へて　戒方雙べて内に叉へたる上を押せ

忍願堅て合せて進力を附けよ　禪を以て戒の背を捻し智を以て方を捻せ

是れを聖者金剛の口と名く。

無動金剛第六

戒方檀慧内に相ひ叉へて　忍願堅て合せて進力を屈し

禪智並べて忍願の文を捻して　是れを無動金剛心と名く。

無動金剛師子奮迅印第七

前の無動金剛甲に準ず　唯し進力を改めて頭(一)相ひ拄へ

起立て頻に伸して虎の儛の勢にして　壇を遶つて行道して魔を辟除せよ

師子頻伸大奮迅なり　是れを五股金剛の印と名く。

(一)相ひ拄へ一本に開き立てに作る。
(二)伸一本に申に、虎を似に作る。

無動金剛火印第八

禪を以て三度の背を捻して拳に爲り　進度獨り舒べて定の掌を指す

五度を散し開いて猛焰の如くせよ　是れを無動金剛の火と名く。

無動金剛法螺印第九

二羽各の無動の劒の如くにして　掌の内に鉤鎖して狀環の猶くせよ

忍願堅て合せて頭相ひ拄へ　進は忍の背と重ね相ひ著けよ

力度を願の背にすることも亦た是の如くせよ　是れを無動の法螺の印と名く。

無動金剛索印第十

禪三度の背を捻して拳に爲り　進は度は直く舒べて觀の羽もて握れ

力度屈して背を捻して環の如くせよ　是れを無動金剛の索と名く。

明に曰く　曩麼(ナウマクサンマンダ)三曼哆(バザラ)嚩日囉(ダンアン)二合敵(ハシ)訶引波舍伴闍(シャホンジャナウムハッタ)那吽泮吒半音

無動金剛の劒の印明は　能く一切の事業を成就す。

明に曰く　唵(ナンア)阿(シャラ)者羅(キャダ)迦(キャ)拏引勃馱(ボダ)制(セイタ)吒迦(キャ)(一)吽(ムム)吽(キャケイキャケイ)佉(ノウ)醯(ケイ)佉(ノウ)醯伊(ビ)能(ノウ)(二)魚(ギョ)哩二合醯摩(ケイマ)嚩賀(カリビシャ)唎尾(ヒ)沙(シャ)索(サ)鉢(ハッタ)多(タ)二合惡(アクキリ)紇哩二合訶(カクウム)吽引(ハッタ)泮(ハッタ)吒(アリヤ)阿(ア)哩耶二合者(シャラ)羅阿引(ヤシャキンジラ)蘖車(ヤシ)緊至羅夜(ヤ)思伊引(ノウキャリ)能迦(ラヤ)哩羅耶二合(ロヤ)句(ク)嚕耶(ヤ)

(一)吽吽の下、一本に阿の字あり。
(二)魚一本に迦に作る。

麼莎縛二合訶

持明行者常に食する時ごとに、一分の殘食を出して本尊の像に供養すれば、歡喜擁護して所求皆な得、終に空しく過さず。復た無動金剛根本の明を誦せよ。

無動金剛解界明印第十一

持明行者念誦し了て、即ち前の所結の火界及び墻界を解き已て、灌頂の印二小指を竪てゝ頭相ひ拄へよ是れなり、當さに燈焰如來の解界の明を誦すべし、以て印を左に轉じて即ち解界を成ず、前の火院界是れなり。燈焰の如來の解界の眞言に曰く　曩麼悉底哩也二合陀嚩拏哦哆唵吒紇哩二合

密語を誦し已て重ねて香花を以て如法に供養し三業を懺悔せよ、即ち部母の印を結んで護身して方さに起去すべし、大乘方廣理趣を轉誦して、諸の善事隨つて修行せよ、持明行明食せんと、欲はん時ごとに、事業金剛の眞言を以て自身中の種子を加持して鑁字を加へ、復た十力の明を誦すること八遍して乃ち之を食せよ。明に曰く

曩摩三曼哆鑁。

十力明に曰く　曩謨嚩薩母駄冐地薩怛嚩二合唵唵麼闌捺泥帝引孺托嘌寧莎嚩二合訶。

是の如く先づ本尊を成就すること訖んぬ、所餘の觸食には成辨諸事の心明を以てせよ、食すべき所の者を供養せんには、當さに不空威怒悋加聖者不動尊の明を用ふべし、誦すること一遍すれば、受者歡喜して當さに行者に隨て之を護念すべし、毎日是の如く供養して斷絶することを得ざれ、常に本尊の護念を得て諸魔害をなす能はず、食を施し已て常の如く禮懺し、法に依て念誦せよ、中夜分に於て消息せんと欲はん時は、即ち先の莊嚴の印を結べ。

無動金剛光莊嚴印明第十二

慧の手掌を翻して彎めて心上にせよ　定の掌還て心上に來て合す

本明を加持して頂上に安して　便ち二手を開いて身に順つて摩せよ

能く障難を除いて成就を得ん　護身するを以ての故に莊嚴と名く。

光莊嚴の明に曰く　曩摩悉底哩也四合陀嚩二合拏伽哆唵薩嚩怛佗蘖哆唵摩訶三昧耶伽底伽帝三曼帝三摩蘖羅嚩二合摩佗薩羅婆多羅二路合計達摩駄埵底多僧伽帝莎嚩二合訶。

前の法を作し已て、過去燃燈佛の禮拜の法の如くすべし、金剛合掌して長く二の臂を舒べ、頂上に於て東に向ひ面をして地に著けしめ、長く二足を展べ心を以て地に著け

よ、是の如く禮拜する時、一切諸佛菩薩を觀念せよ、唯だ願くは我等を攝受して最上の成就を作したまふ、哀愍の故に。是の如く三たび廻らし已て後ち意に隨て消息せよ、心に明相を念じ速かに成就の相を作せ。

無動金剛事業求願第七

爾の時釋迦牟尼佛、執金剛菩薩に告げて言く、我れ今汝がために無量神通力無動金剛の法を說かん、能く一切の事業を利益し成就す、若し修行者食菜し長齋し、或は菓子等を以て誦滿すること一萬遍し已て、月の八日或は十五日に於て一日一夜大いに供養を作せ、像の前に於て苦練木を取り蘇に和して燒け、一たび呪し一たび燒いて一千八遍を滿せよ、此の法を作し已て然して後に、所作一切の事法皆な成就することを得ん。行者語を出して縛せしむれば即ち縛す、及び事を問ふ等、能く樹木を摧析し飛鳥を墮落し、能く一切の泉池をして枯渴せしめ、亦た能く人をして鬪諍に勝つことを獲せしむ、此を得已て亦た能く風を團めて一團とせよ。

又たの法。月蝕の夜に於て取り未だ地に著かざる牛糞を曼荼羅に塗り、種種の香花を壇上に散して大般若經を置き、前に(一)純色の犢子の牸牛の蘇一兩を取て熟銅の椀の中に置き、佉陀羅木を取て齒木にせよ、並に蘇を攪せて明を誦して遍數を限らず、種種に成就せしむ。

又た山峰の頂上にして食を喫せず、誦滿すること十萬遍すれば、即ち一切の伏藏を見ることを得ん。又た乳を用つて火法を作し、誦すること一千八遍し、火に沃れて燒けば能く疫病を除き、若し一切の人と共に論議せば、即ち彼の人口噤んで論ぜざることを得ん。

又たの法。句瀘艸を取て蘇乳蜜に和して、加持して火中に沃れて、燒いて誦すること十萬遍すれば、能く大疫病を除かん。

又た蓮花を取て蘇酪蜜に和して明を誦し、火中に沃れて燒いて明を誦すること十萬遍すれば、(一)蓮花吉祥天行者に願を與へん。

又たの法　近き海に臨み河の口に於て水に入て胸に至て、明を誦すること三十萬遍すれば尾沙聊を得。

又た明を誦し華を以て火中に擲げ燒けば、華の色に隨て衣を得。穀米を燒けば穀米を得。又た尾邏縛木を取て明を誦し、燒くこと十萬遍すれば即ち囉闍を得。

又た必哩養隅木を取て明を誦し燒けば、能く一切人をして愛念せしむ、柏木を明して燒

(一) 純色同色なり。母子も

(一) 蓮華吉祥天不動の化身か。

けば即ち無量の僕從を得、大麥を明して燒けば大長者となることを得。

次に畫像の法を說かん、無動尊を畫け、身に赤土色の霜衣を着し、左に(一)辮髻を垂れ眼は斜に視る。手に劍索を執り寶蓮華に座し、肩を嚬め瞋面にして三世を怖る狀に作るべし、是の如く畫き已て流水河海岸の上に於て如法に像を安じ、行者の自身に亦た赤色の衣を著し、心に染著なくして寂靜乞食して活をなし、像の前に於て誦すること五十萬遍し、畢已て即ち夜中に於て薝蔔木を以て火燒すること一明一燃、火中に擲げ一萬遍を滿つれば即ち無動聖者を見る、現前に自身如來の使者となることを得、三摩地を得て共に菩薩と同位なり。

又たの法。尸陀林中の帛を取て無動金剛の像を畫け、自身の血を以て淡く色を作して像を安置し、面を西に向けて著き、行者は面を東に向へて坐して念誦せよ、毎(二)時三時に澡浴して(三)濕たる衣を著し像の面前に對して明を誦すること十萬遍して、即ち一切の鬼神に食を施せ。又た黑月八日の夜に於て(四)摩奴沙を取て其の上に坐し、明を誦すること一萬遍し已れば、彼の摩奴沙身を動す、行者必ず怕ることを得ざれ、彼の口より大開敷蓮華を現出せば即ち把へ取るべし、能く行者の身をして十五六の童子の如くならしめ、髻連環の如くして天地に遊歷し、大明王を得しむ。

又た像の前に於て毎日二時に念誦して、力に隨つて供養して沈水香を燒け、是の如くして六月を滿足すれば、自ら見に尾沙耶の主を得ん。

又たの法。旗幡を取て明を誦すること一千遍、軍陣の前に執らば能く他の陣を破す。

又たの法。他の軍を禁じて動くことを得ざらしめんと欲はゞ、旗幡の上に於て無動尊を畫け、身黃肉色に作り四面なり、上下に牙を出さん、四臂にして怖畏瞋怒の狀に作れ、身に遍して火焰あり、他の兵を呑む勢に作れ、持法の人旗を以て彼の人に示すべし。又た想へ聖者羂索を以て彼の兵衆を縛すと、彼れ即ち能く動くことなし。

(一)四面無動金剛明に曰く　曩麼三曼哆嚩日囉二合赦始摩二合舍囊悉體二合迦播羅楞訖哩二合哆戶怛㗚賀姹你㗚㗚引路囉駄縛二合能瑟吒邏二合迦囉囉娜捨曩步惹誐跋哩吠瑟徵擔捨唎邏底榮捺囉曩野曩迦賀護姹訖哆二合吒賀三者咄唵佉尾訖哩二合怛嚕引跋莽賀避沙拏也怛你也二合佗唵尾訖哩哆尾迦吒尾迦邏摩賀囉唎二合哆尾瑟佗捨怛羅契駐尼去の反齒瑟姹賀囉案怛囉幕羅駄羅者咄姹母佉入囉二合邏那比路駄嚩二合計者吽囉日囉二合嚩日囉二合葉羅二合泮吽吒莎嚩二合訶若し他をして相ひ鬪はしめんと欲はゞ、烏鴿鵄梟の羽を取り、明して燒けば即ち鬪諍を得

(一)辮髻　本に辮髮に作る。

(二)時　日の字か。

(三)濕衣　浴衣なり。

(四)摩奴沙　人なり、一卷本に魔奴沙尸に作るは即ち死人のこと。

(一)四面無動金剛　今の四面の不動は胎大日の四面なり。

ん。若し設都を燒いて卒らしめんと欲はば、稻糠を取て燒け、之を燒く時に當つて想へ、聖者索を以て彼の捨都嚕を縛し、將て南方に向ひ困苦して血を吐かしむと。彼れ等が族類皆な存することを得ず。又たの法。設都嚕をして卒らしめんと欲はば、土と鹽と蠟とを取て苦練の葉に相ひ和して擣いて泥となし、捻して彼の形狀を作し、地上に置いて斫斷せば即ち卒す。若し稻穀を明して燒ば、彼の捨都嚕をして即ち貧窮ならしむ。若し大人をして愛樂せしめんと欲はゞ、鹽を以て彼の形狀を作り、段段に之を斫り、誦滿すること七日すれば彼れ即ち愛樂す。又た俱蘇摩花を取て明して燒くこと十萬遍すれば夜夜來ることを得、三事の中に於て所求皆な得ん。

又た曼荼羅花を明して彼の人の名を稱すれば、即ち(一)横亂せしむ。鹽を明して燒けば即ち天女來て所使意に隨ふことを得。安息香を明して燒けば、羅闍歡喜することを得。又た畫像の法。先づ釋迦牟尼佛像を畫け、(二)文殊師利童子の像を畫き、執金剛菩薩を畫き、微笑の面を作し手に金剛杵を執て、執金剛の下に於て無動聖者を畫き種種莊嚴せよ、即ち彼の前に於て明を誦すること(三)五十萬遍、然して後に一切事を作すに皆な意に稱ふことを得。若し他の兵を降さしめんと欲はゞ、即ち無動聖者の眼印を結び瞋怒聲を作し吽字を稱し、心を以て魍魎彼を捉へしむと想へ、乃ち降す、尸陀林灰を取て加持すること七遍して彼の人に與ふれば、即ち愛樂を得。

又たの法。牛黄を取て加持すること七遍して、自身の額上に點すれば、能く衆人をして見る者を愛樂せしむ、毗那夜迦損害すること能はず、熾焰成就するが故に。

又たの法。(一)己身の上に於て明の梵字を布すれば、彼の羅刹衆百由旬の外に退散す。

又た蚰に毒せられて半年を經ても差えざるに之を明すと即ち差ゆ。

又た壁の上に於て劒の契の畫け、又た(二)句律迦大蛇を畫いて劒の上に纏はしめ、其の劒の周圍に火焰あり、即ち加持すること千遍して以て病著に示すに、病者即ち語を下す、加持すること一百八遍すれば病者常に聖者の擁護を蒙る、毎日殘食を加持して淨處に置いて聖者に供養すれば、常に願の如くなることを得。

行者瞋怒して心印を結び吽字を稱すれば、一切の惡雲退散す。又た棘針を取て(三)羅覩迦の油に和して明して燒けば、能く大雨を止め、能く行者をして大界を結することを成せしむ、亦た千種の事業を成就す。

又た無動尊金剛畫像の法を說かん。身に赤土色の衣を著せしむ、左に(四)辮髻を垂れ斜

(一)横　若しは狂の字か。

(二)一本に此に傍の字あり。

(三)五十萬　一本に十五萬遍に作る。

(一)己身の上に云云　布字觀は至極大切にして支分に法身の字を布すれば直に自身即佛す、略出經に、佛は明呪を以て體とすと、宜なる哉其の布字の明呪に隨て白身即大日、即彌陀、即文殊、即不動なり。

(二)句律迦大蛇　此には、鉤龍、又は作黑と翻す、谷響集十に詳しく諸經釋を引いて後、此に譯して黑龍、黑龍鉤龍といふ、是れ不動威怒王の三昧耶形云云とあり、就て見るべし。

(三)羅覩迦　芥子なり。

(四)辮髻　一本に辮髮に作る。

に視て童子の狀にせよ、手に金剛杵及び寶捧を執て、眼徹赤にして石上に坐し、瞋怒にして遍身に火焔あり、像の前に於て愛樂の一切の印契を結び、皆は成就を得、前法に依て所樂にして空に騰り形を隱し、及び所愛の法を作すに、意に隨て成就す、縱ひ畫像なくとも獨り閑靜に處し、或は寺中にあり或は山窟の中にして、維闍を離れたる處にせよ、所求の者一切皆な成就を得。

瘧病を患ふ者を加持すれば即ち自縛して下語す。鏡を加持すれば亦た像現ずることを得、事を問へば皆な說く、

童子或は童女を取て道場の中に置き、神を召し入れて壇中に下らしむ、一切の事を問ふに皆な得。

次に繫迦羅の法を成就せんと欲はゞ、月の一日の日中の時に於て、種種の香華を著し供養すること歇まず、明を誦すること一百八遍、壇中に一切の諸佛菩薩を念せよ、每日念誦して一月日を滿し、如法に供養し已て苦練木の柴を用つて火を燒き、遏迦木の上に蘇を塗り、白芥子を加持して火を燒くこと、黃昏より火を燒いて夜半に至り、乃至日の出づるまでせよ。繫迦羅即ち來て行者に語て言く、我をして何事を作さしむと、行者攝受し已て後、常に行者の使ふ所に隨て必ず、隨順することを得、乃至天上に往いて天女を取らしむれば、即ち將て來る所須の飲食●齒木●水等、皆な給侍を得。

國譯底哩三昧耶無動尊聖者念誦祕密法卷下 終

國譯聖無動尊(一)一字出生八大童子祕要法品

大興善寺翻經院　述す

金剛手の言く、一切衆生意想不同なり、或は順或は逆なり、是の故に如來(二)慈と怒との身を現じて、隨て利益を作したまふと。解して云く、諸佛の大悲は衆生を愍むが故に、即ち順せる者に於ては順を以て勸めたまふ。若し逆ふ者に於ては逆を以て制したまふなり。(三)一佛忿怒三昧に住したまふ時に、十方諸佛同じく共に忿怒瞋三昧に入りたまふ、豈に毘盧遮那無相の中に於て明王を示現したまふ時、諸佛菩薩更に忿怒身を現せざらんや。是の故に四方の如來教令の身を現じて衆魔を降伏す、然りと雖も猶ほ親しく隨逐せず、所以に本誓同じからず、或は降三世菩薩は天魔及び三世の貪瞋癡を降伏し、或は軍荼利菩薩は常隨魔を調伏す、謂はく毘那夜迦及び人魔、或は焰魔特迦は龍魔及び諸の怨敵を降伏し、或は金剛夜叉は鬼魔及び無智の者を調伏す。是の如くの種種具さに說くべからず、不動明王は恒に行者に隨ひ、若しは天、若しは毘那夜迦、

(一)一字出生　梵字より八大童子を出生する義。初の八字は歸命する八大童子、梵字は歸すべき不動尊なり、而も此の兩者俱に一字出生なり。

(二)慈と怒　身云云性善性惡は唯是れ性惡。性惡則ち普現色身の依て現ずる理なり。

(三)一佛云云　大日忿怒三昧に住し不動となる。

若しは龍、若しは鬼、所作の障礙一時に消滅す。然るに諸佛菩薩若し同じく一三昧に住せば、不動の弘誓の使に隨ふ者あるべし。爰に三藏不空あり、能く明道に達す、即ち、祕藏の要文を披見するに、不動明王の一字心密語あり、即ち八字を以て一字を嚴る、其の八字とは即ち歸命の句なり、唵字を本尊となす若し爾らば寧ろ上の八字に其の形なからんや、所以いかんとならば、那莫等の八字は、一一に皆な唵の一字を歸敬す、是の故に其の八字より歸敬使者を出生して、唵の本尊を圍繞す、所以に八大童子あり。一に慧光菩薩（金剛を通光といふ、即ち慧を以て光の如く一切を照し廻ずが故に）二には慧喜菩薩（金剛を慧喜といふ　即ち慧を廻して喜とす）三には阿耨達菩薩、四には指德菩薩、五には烏俱婆誐、六には清淨比丘、七には矜羯羅、八には制吒迦。是等の使者は（一）四智四波羅蜜、親しく大日の敎令に隨ふがための故に、此の形を顯現して聖無動尊を圍繞するなり、各別の眞言の中に其の義を顯示す。解して云く、東方の金剛部は即ち菩提心門なり、日光を以て喩とせり。所以に使者を出生す、慧光と名く。南方の寶部は即ち福德門なり、所以に使者を出生す、慧喜と名く、福智の二嚴を以て喜とするが故に。西方の蓮華部は即ち智慧門なり、所以に使者を出現す、阿耨達と名く、此に無熱といふ、蓮華の池水より生じて清淨無垢なることを表す

（一）四智四波羅蜜、本尊の曼荼羅は胎藏部にて眷屬は金剛界なるあり、彌勒・尊勝曼荼羅共に然り、而も兩部は本來不二なること知るべし。

るが故に北方の羯磨部は即ち精進門なり、所以に使者を出生す、指德と名くるなり。今此の部は前の三部の德を指す、即ち精進に依て能く果を得るが故に、所以に指德と名く（已上四智）金剛波羅蜜は即ち菩提心の行なり、所以に使者を出現す、烏俱婆誐と名く此に超越住世といふなり。寶波羅蜜は福德の心行なり、所以に使者を出生す、清淨比丘と名く、比丘能く法寶を守護することを表すが故に。法波羅蜜は慈悲の心行、所以に使者を出現す、矜羯羅と名く、此に隨順といふ。業波羅蜜は即ち方便の心行なり、所以に使者を出生す、制多迦と名く、此には息災といふなり、菩薩方便を以て瞋形を現じたまふが故なり、八童子の所依の說已に竟んぬ。若し行者、現當の悉地を得んと欲はゞ、行法の中彼各々のゝ名を稱して救護を請乞ひ、及び印を結び呪を誦せよ、即ち一切世間の殊勝の悉地を成ぜん。

（一）慧光童子菩薩の眞言に曰く（即ち金剛合掌して忍願合して針の如くせよ。）

唵囉曰囉二合摩帝入縛合攤二菩地質多三鑁歸命本尊

慧喜菩薩の眞言に曰く（金合忍願、寶形の如くせよ、）

唵囉怛曩二合摩帝娑度二摩訶摩抳三莫歸命本尊阿耨達菩薩の眞言に曰く（金合忍願蓮葉の如くせよ）

（一）慧光童子菩薩の眞言は金合を印とし金界の四佛三昧耶の印は外縛を印母とするの異なり、中指の針・寶・蓮等は全く同なり。

唵鉢納麼二合一薩嚩娜引賀鉢囉二合捨弭曩二摩訶達摩三三歸命本尊

指德童子菩薩の眞言に曰く金合忍・願・掌中に入れ面相ひ合せよ、

唵羯羅摩二合摩訶吠哩耶大無畏なり鉢哩布囉迦滿願滿歸命本尊

烏俱婆誐童子の眞言に曰く金剛合掌

唵嚩曰囉二合一薩埵婆二烏俱婆誐三摩訶燥企耶二合四多歸命本尊

清淨比丘使者の眞言に曰く梵爽の印

唵摩尼一尾輸馱達摩俱嚕二囉乞叉達摩二嚩歸命本尊

矜羯囉童子の眞言に曰く蓮華合掌

唵達嚕麼一矜羯囉二底瑟吒三曰囉二合命歸本尊

(一)制多迦童子の眞言に曰く外縛五股の印

唵羯嚕麼一制吒迦二吽吽三發吒四南歸命本尊

次に本尊の眞言に曰！經中の印に通用す。

唵一阿左囉贊拏三唅所歸本尊

次に像法を說かん。

(一)制多迦、翻名は上の如し、形像には五髻あり、髻は智を表す、今外縛五股を用ふるは五智の德を表す。

行者一の淸淨の靜處を點し取て、人をよび非人に見せしむること勿れ、即ち行者工人と共に淸淨にして新淨の衣を著し、白氈或は淨版或は淨衣を取り、本尊と八大童子とを畫かしめよ。本尊は經中の像に通用す。

慧光の形は少しき忿怒にして天冠を著し、身は白黃色にして右の手には五智の杵を持し、左の手は蓮の上に月輪を置いて、袈裟瓔珞種種に莊嚴せり。次に慧喜菩薩は形慈面に似たり、微笑の相を現じて色紅蓮の如し、左手摩尼を持し右手に三股鉤を持す。阿耨達菩薩の形は梵王の如し、色は眞金の如し、頂に金翅鳥を戴き、左の手には蓮華を執り、右の手には獨股杵を持して龍王に乘ず。

指德菩薩の形は夜叉の如し、色は虛空の如くにして三目あり、甲冑を著す、左の手には輪を持し右の手には三叉の鉾なり。烏俱婆誐は五股冠を戴いて暴惡の相を現ず、身金色の如し、右の手には縛曰囉を執り、左の手には拳印を作る。

淸淨比丘は首髮を剃除して法の袈裟を著して、左の肩に於て結び垂れたり、左の手に梵夾を執り、右の手は心に當て五股杵を持す、右の肩は現に露はれたり、腰に於て赤裳を纏ふ、其の面貌若きに非ず老いたるにあらず、目は靑蓮の如し、其の口の上の牙

は下に於て顯れ出でたり。次に矜羯羅の形は十五歳の童の如し、蓮華冠を著す、身白肉色にして二手合掌して、其の二大指と頭指との間に、横に一股杵を挿めり、天衣袈裟微妙に嚴飾せり。

次に制吒迦も亦た童子の如し、色紅蓮の如くして頭に五髻を結ぶ。一は頂上の中に結び、一は額上に結び、二は頭の左右に結び、一は頂後に結べり五方五智を表す。左の手には嚩日囉、右の手には金剛棒を執る、瞋心惡性の者なり、故に袈裟を著せず、天衣を以て其の頸肩に纏へり、畫像の法說くこゝ已に竟んぬ。

次に供養法を說かん。　行者供養を陳べんと欲はゞ、先づ須らく菩提心を發すべし、云何んが菩提心とならば、謂く衆生を救ふの心を發す、衆生の苦惱を思惟して拔濟せんといふ心を起すなり。是の如く心を發す時、不動明王及び八大童子、不請の師となつて自心より出で、行者を護持したまふ。まさに供養すべし、山林寂靜の處に住して、香を燒き花を散じ眞言を持念す、是の如く行ずる時、使者身を現して意に隨て奉仕せん、先づ須らく四方の如來を禮して、大誓願を發すべし。

即ち東方を禮して是の念言をなさく、衆生無邊なるを度せんと誓願すと、是れ大圓鏡智の願なり、即ち菩提心門なり、菩提心は即ち衆生を度する心なり、故に願を發して禮をなせば、乃至成佛までに常に金剛薩埵の加持を得て、菩提心をして圓滿せしむ。

次に南方を禮し是の念言をなさく、福智無邊なるを集めんと誓願すと、是れ平等性智の因なり、即ち福智門なり、福智二種の資糧を以て衆生を利益するが故に。若し此の願を發し此の禮を作せば、乃至成佛まで地地の中に常に虛空藏菩薩、灌頂を授與することを得て、福智圓滿せん。次に西方を禮して是の念言を作さく、法門無邊にして學せんと誓願すと、是の願は妙觀察智の因なり、即ち智慧門を大法王となす。故に是の願をなして禮すれば、乃至成佛まで當さに觀自在菩薩の加持を得て智慧圓滿すべし。

次に北方を禮して是の念言を作すべし、如來無邊なるに仕へ上(たてまつ)らんと誓願す、是れ成所作智の因なり、即ち作業門なり、諸佛の前に於て諸の事業をなすが故に。若し是の禮をなして禮すれば、乃至成佛までに當さに金剛業菩薩の加持を得て、一切の佛世界に於て、廣大の供養の業を成就すべし。

次に毘盧遮那如來を禮して是の言を作すべし、無上菩提を證せんと誓願すと、是れ法界體性智の因なり、大日普賢の位を證して法界に周遍して、更に衆生を利するが故に、此の願を發す時、十方の諸佛同時に證明して讃じて善いかなとたまふ。是の故に一切菩

薩聖衆皆共に守護したまふ、久しからずして當さに彼の無上道を得べし、總願は既に說きつ、餘の諸の別願は意に隨て陳ぶべし、乃至此の善根を以て自陀に廻向し平等に利益せよ、兼ねて不淨の物を食せず、心に憂愁することなく、貪瞋癡等の煩惱を起さず、世の樂を樂はず深く禪定を修せん、是の如く行者は是れ世の大樂、是れ衆生の師なり、三摩地現前して速かに無上正等菩提を證せん。

國譯聖無動尊一字出生八大童子祕要法品 終

縮餘三。續藏三套一。豐山錄外中三。

國譯佛說大輪金剛總持陀羅尼經

是の如く我れ聞き、一時、佛王舍城耆闍崛山中に在して、大比丘衆千二百五十人と俱なりき、復た菩薩摩訶薩三萬六千あつて上首たり。爾の時に世尊、般涅槃に臨みたまひ後に佛法滅せんと欲するの時、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天龍八部、前後に圍繞して共に會して法を說かんと。爾の時に當つて執金剛神あつて其の法要を問ふ、世尊般涅槃の後、總持の法門云何んが受持せんや。佛、執金剛神に告げたまはく、善いかな善いかな汝等金剛能く末劫の衆生のために此の利益の事を問へり、善く之を思念せよ、吾れ汝がために利益の事を分別し解說して、法要を說くべしと。佛、執金剛に告げたまはく、夫れ總持法門を受持せんと欲はゞ、及び經典を誦し坐禪せよ、種種の善法第一淸淨、第二常に決定して志誠なれ、第三精勤にして退せざれ、第四佛の慈恩を報せよ、第五弘大誓を發して日夜精確にして師僧父母の恩を報せよ、第六菩薩の恩を報せよ、第七金剛恩を報せよ、第八三十三天の恩を報せよ、第九四大天王の恩を報せよ、第十持呪仙人の恩を報せよ。佛、執金剛神に告げて言く、我が滅度の後、末法の

時の衆生薄福にして三災競ひ起り、吾が毒鬼神諸の天魔等、南閻浮提振且國の中の諸の惡鬼神、及び諸の八萬四千の天魔、一一の魔に五千の眷屬あつて、南閻浮提の、衆生無量無數を殺害せん。汝等金剛、今此の會に於て秘密の法を聞き、汝等金剛、持呪の方法を聞いて、速かに先づ大輪金剛陀羅尼神呪を誦せよ、汝此の法門を持せずんば、一切の諸呪たとひ驗あらんも、猶し(一)行僞盗あつて悉く安ならず。爾の時に世尊即ち身呪を說いて曰く

那謨娑哆梨耶一地婆伽喃二多他羯伽南三嗚繪二合四毗羅時毗羅時五摩訶斫迦羅六薩哆薩跢七涉羅帝涉羅帝八哆羅曳哆羅曳九毗陀摩余十三盤禪徐十一但羅末徐十二悉陀羯梨怛餞十三娑訶十四

大輪金剛陀羅尼心眞言に曰く

南無悉哩二合耶一墜尾伽南二但他伽多南三唵四尾羅時尾羅時五摩訶斫羯羅六伐折梨七伐折羅八薩跢薩跢九娑羅帝娑羅帝十但羅曳但羅曳十一毗駄末徐十二三盤誓儞十三多羅末底十四悉陀阿羯哩底十五以の友哩餞涉訶心呪

爾の時に世尊、此の呪を說き已て、執金剛及び持呪仙人に告げたまはく、比丘●比丘尼等、先づ須らく新淨の衣を著し、香を燒いて樓至金剛を供養すべし、呪を誦すること七日七夜、唯だ燒香及び淨水をもつて、呪を誦すること十萬遍を滿たせ、一切の呪法成就したる以後は、通じて一切印を用ひよ。夫れ一切呪を持せんと欲はゞ、皆成就することを得、若し能く常に呪を誦せば、命終の後、速かに佛地に至らん。

(一) 行僞盗　此の下に脫字あるか、更に撿せよ。

爾の時に金剛藏菩薩摩訶薩等、佛の大輪金剛陀羅尼を持する秘密の藏を聞き、我等金剛藏菩薩摩訶薩、各〻百千恒河沙等の金剛を將ゐん、一一の金剛各〻百萬恒河沙の眷屬あり、百千恒河沙等の藏神を將ゐん、一一の藏神また各〻四天(一)罪を將ゐん。滅度の後當さに地獄に落つべし、罪苦を受け已て當さに畜生道に落つべし、行僞にして罪を獲ること是の如し。若し善男子●善女人及び無量の天仙●金剛菩薩●無量の藥叉●一切鬼神等あらば、善聽せよ、吾れ當さに汝がために(二)灌頂神呪を說かん、誦すること二十一遍せば、能く一切の呪法を成じ、善事速かに成就することを得ん。其の呪は乃ち是れ過去十方一切(三)諸佛の此の陀羅尼に因て悉く皆成佛し、一切の菩薩悉く佛道に至り、一切の金剛皆不壞の身を得、一切の仙人悉く成就を得ん。此の呪を誦する者は能く一切印法、一切壇法を成じ、曼荼羅大壇に入るべし、事壇を用ひざれ。(四)若し事壇を作らば種種の災起り、天難●地難●王難●賊難●水難●火難●一切の夜叉●羅刹の難●天龍鬼神の難●諸魔一切人の難あらん。是の呪を誦すること七日七夜、清淨にして香を燒き、尊像の

(一) 罪の字か。恐くは罪の字か。

(二) 灌頂神呪　大金剛輪陀羅尼なり。

(三) 諸佛の下、說の字脫あるか。

(四) 若し云云　事壇にては諸障あれども此の印言を用ふれば障なし。眞言の中、禮暗と怛覽の兩字肝要なり、一は胎の百字遍照の種子、一は金剛界南方灌頂尊王の種子なり、而も暗字を除き吽字を加ふるは金剛部の故なり。

(一)此の呪云云　此れ至極の懺悔法にて四重五逆罪も消滅す。

(二)雲雨　此の二字詳にせず、一本に爾の字に作る。

前に於て(一)此の呪を誦して、三業一切の諸罪を懺悔せば、並に消滅することを得、一切の鬼神悉く歡喜し、身上の所有る一切の諸病皆除愈するを得ん。

爾の時に佛、執金剛無量の天仙阿難比丘に告げたまはく、汝等善く聽け、汝金剛呪を持せば、我汝がために、金剛天中に於て壇を結ばん、汝菩薩呪を持せば、我汝がために菩薩天中に於て壇を結ばん、汝天呪を持せば、我汝がために天中に於て壇を結ばん、汝龍天の呪を持せば、我汝がために龍宮の中に於て壇を結ばん、汝二十八部鬼神の呪を持せば、我汝がために鬼神天の中に於て壇を結ばん、汝夜叉羅刹の呪を持せば、我汝がために夜叉羅刹天の中に於て壇を結ばん。佛、執金剛神に告げたまはく、當さに呪を說くの時、山河石壁一切六種震動し、一切の須彌山諸天鬼神、皆悉く安かならず、一切の龍王皆大莽走し(二)雲雨三十三天皆珍寶及び金剛山を下し佛に獻ず、願くは我等金剛藏菩薩摩訶薩、悉く佛地に至らば、我等の眷屬日夜歡喜せん。我等をして受持せしめば、また燒香●末香●塗香●幡花●寶蓋●百味の飲食を世尊に上奉り、過去未來現在十方三世の諸佛を供養せん、我等金剛藏菩薩摩訶薩、亦た末法の衆生のために呪を受持せんに、若し善男子善女人及び比丘尼●優婆塞●優婆夷有りて、此の大輪金剛陀羅尼

(一)界　此の字衍字か。

(二)汚　原本汗に作るは誤りか。

(三)供養の印　入業の印なり

を受持し、尊像の前に於て澡浴して新淨の衣を著し、香を燒いて三盤食を著し供養して具さに說く。我等無始の世(一)界より已來、生死に流浪して劫數を知らず、聲聞人●緣覺人●辟支佛人●佛乘人を毀謗し、獨覺人阿羅漢を毀謗し、大乘の菩薩を謗り、正法を行ずる人を毀り、伽藍を(二)汚泥し、寺塔を汚泥し、經書を汚泥し、戒行を破り、殺●盜●婬●三業の不善、佛身より血を出し、阿羅漢を殺し、常に顚倒を行じて、正を持してはは邪となし、十惡の不孝、父を殺し母を害して、一切種種の造惡頭數を知らず。今此の尊像の前に於て、發露懺悔すること七日七夜、三時に一百八遍陀羅尼呪を誦し、澡灌三枚を用ひ、淨水を盛り滿たし、楊柳枝を挿み、三盤食及び酥蜜酪飴茶湯蜜糰種種の菓子を作り、尊像の前に於て一地に火爐を穿つ、蓮花開敷に似たり、赤土を用ひ四面を摩拭して、方さに炭十斤を呪し、樹王木炭を用ふ、輪薑子木是れなり、別炭を用ひず。また薰陸香三大兩、安悉香二大兩、白檀香二大兩、青木香二大兩、酥半升、蜜半升を用ひ、件の五種香を剉斫し斬剪すること、なをし巨類大の如くす、一銅器中に於て銅匙を用ひて私合し、呪を誦すること一百八遍、此の酥蜜香等を呪し、呪すること一百八遍す、其の像の面を東に向け、行者の面を西に向け蹲跪し合掌して(三)供養の印を

なす、開敷蓮花の相の如し。二大指相ひ並べ怒て後に向へ、二小指合し怒て、前に向へ、六指を鉢の捧ぐるごとくにす。此を供食印と名く弟子某甲等、某州某縣某鄉、某里自ら姓名を稱へよ、若し比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷ならば本僧尼名、本寺名を稱へよ、十方三世一切の諸佛、過去一切の賢聖、冥官業道を啓白すらく、弟子某甲等、某年某月八日五更に初めて懺悔して、心を披き膽を露はし、十方三世一切諸佛、過去の一切諸佛、現在の一切諸佛、當來の彌勒尊佛、及び十二部經、修多羅藏、諸大菩薩、一切賢聖僧、一切金剛三十三天、四天王、帝釋天王、曹地府、日天、月天、星宿天、善惡の童子、護戒善神を請して、弟子の發露懺悔を證知して、所有の罪障悉く消滅せしむ。弟子無始世界より已來、六道に輪廻して生死に流浪し、善惡を識らず、未だ佛時佛邊を識らずして、罪を造つて偸盜●飲酒●食肉●兩舌●惡口●種種の鬪亂を行して頭數を知らず、殺生無數、邪行無數、妄語無數なり、今日今時發露懺悔して、一懺して已後更に重ねて作さず、願くは弟子某甲等、今十方諸佛の前に於て具さに罪禍を說かん、齋を破りて夜食し、常に邪行を行じて、六道の餓鬼畜生邊夷下賤に生ず、常に不善を行ずる處、今日今時發露懺悔して、一懺已後復た更に重ねて作さず、若し善男子善女人あつて、

月の八日より十五日に至るまで、毎日供養して皆新食すべし。其の七日の內、誦呪十萬遍に滿たば(一)境界あり。若し是れ上根の人ならば、夢に一切諸佛賢聖の摩頂受記を見ることを得、即ち佛藥を受けて以後、即ち菩薩金剛地位を證して佛を逐ふて去らん、若し是れ中根の境界ならば、七日の內に前供養に準じて、風雨霰雹として夢に金剛賢聖を見ん。若し是れ下根の衆生ならば、前の七日供養に準じて賢聖を見ず、七日の內に風雨あらず、幡花動せざれば、此の人の前世に十惡五逆の業を造作し、法と無緣(二)れば倍功懺悔し、一日一夜六時に懺悔せよ。我等即ち服香念誦すべし。

南無佛陀耶　南無達磨耶　南無僧伽耶　南無十二部經、
南無金剛藏菩薩　南無文殊師利菩薩摩訶薩　南無觀世音菩薩摩訶薩
南無大勢至菩薩摩訶薩　千手千眼觀世音菩薩摩訶薩、十一面觀世音菩薩摩訶薩、
救脫菩薩摩訶薩、定自在王菩薩摩訶薩　地藏菩薩摩訶薩、
藥王菩薩摩訶薩、藥上菩薩摩訶薩、彌勒菩薩摩訶薩、
是の諸の菩薩等、各〻恒河沙の眷屬を將ねて前後に圍繞して、佛に白して言さく、世尊我が菩薩の眷屬、各〻末香●塗香●幡花●寶蓋をもつて、十方の諸佛に供養したてまつり、

(一) 境界あり　靈夢等なり。

末法の衆生のために大輪羅尼を修學して善福を助く。善男子善女人●比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●婆羅門等、經典及び秘密修多羅法門を修學して、持呪者及び下根の衆生をして速に因果を證せしめん、我等諸菩薩衆、亦た印可せしめ、十方の諸佛摩頂受記して此の陀羅尼を誦せば、是れ過去無量の諸佛根本の法門なり。此の呪を誦せば能く一切の罪障根本の罪を除いて消滅せしめん。若し下根の衆生、正月一日より尊像の前に於て、此の神呪を誦すること十萬遍せよ、則ち道場に入て四大天王の幡四口を懸け、四方に各各金剛幡十二口を置き、菩薩の幡八口を、(一)陽に當てゝ盧舍那像を鋪置し、前に於て種種供養せよ、三面銅盤を用ひて、盤内に種種の飲食を著き、銅埦を用ひて粳米乳酥飯を盛つて、六埦一盤に埦飯●銅匙●佛筯●羹鑪種種の供養を著け、像前に於て地を畫して壇と爲す、方圓四尺、香泥を上に塗りて、上に五色を以て書くこと一に本方の如し、各〻五寸、中間の圓色に於て、上に向て新盤五枚に香水を滿盛し、楊枝●柳枝を挿む、其の壇の南面に地を穿つて、火爐の方圓一尺五寸なり、一尺内に於て蓮花形の如くす、赤泥を用ひ、其の内を摩拭すること前に准ず。五種香及び酥蜜等、銅器沙羅を用ひて、酥蜜及び香を盛り、一處に相ひ和すに一新銅匙を用ふ、此の香を呪すること一百八遍し

(一)陽に當ては中の意。

て、其の壇に五の盞燈を安き、雜綵一尺五寸なり、毎月一日一夜呪を誦すること一百八遍、前の供養に准せよ。七日に二十一(一)廻、食を換ふるに七日已來、境界亦た風雨なく、鬼神現せず、金剛菩薩の現せざれば、罪根深重なり。前の五種香を取て和合し搗き、蜜を和して丸となし、呪を誦すること一千八遍す、即ち此の香を服するに毎朝空腹なるとき二十丸を服す、井華水を用ひよ、下も藥を喫せんと欲する毎に、水を呪すること二十一遍せよ、其の内障悉く除滅することを得ん。此の下根の衆生、無始より已來三寶物●佛法僧物を用ひて、常に偸盜を行じ、他を婬して一切賢聖罪を受くること無數なり。某年某月某日、弟子某甲、今尊像の前、金剛菩薩聖僧の前に於て發露懺悔するに、諸佛現前したまひ、天龍八部一切の鬼神供給し駈使し、諸大菩薩恒に伴侶と爲らん。持呪者毎日一食齋に粳米●乳酪飯を以てせば、身力强健なるを得、去處通達し衆人恭敬し、所出の言語を人皆信受し、一切の財寶日夜に增長し、若し此の陀羅尼秘密法藏を行せば、常に信敬を生せん。一清淨なる空房に於て念誦し、日夜精懃にして雜行を作すこと莫く、一心に受持し、此の一身を盡さんには、更に胞胎四生を受けず、

(一)廻に作る。一本に遍

常に諸大菩薩と俱に一處に會せん。若し善男子善女人、比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●婆羅門等、受持し讀誦して他人のために解說すれば福を獲ること無量なり。此の經は是れ末法の時の衆生の福田、無量百千陀羅尼の法門に入ることを得ば、亦た是れ一切經藏なり。善男子善女人受持し讀誦して淨に尊像の前脚底に於て臥(一)胝せば、即ち境界一切經藏及び一切藏神、金剛菩薩、師僧父母及び一切の尊像を見たてまつらん。此の人會外より來て此の相を見已らば、口を閉ぢて人に向つて、說くこと勿れ。若し人に向つて說かば戒行俱に破れん。若し善男子●善女人●比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●婆羅門等、經典秘密總持法門三種の梵行を讀誦し、口に經典を誦して惡言を說かず、心に惡を懷かず、身に五欲の染著なく、五種の氈陀羅の女と同じく、共に一處に居住することを得ざれ。外道獵師五千の徒黨と、載無數なることを得ざれ。婬女寡婦と同じく共に語言することを得ざれ、沽酒の家に止宿することを得ざれ、亦た外道と一切の經典を戲論することを得ざれ、鬪亂諍競して正法を誹謗し、及び一切利養することを得ざれ。若し善男子●善女人、尊像を供養して其の食を自ら喫するを得ず、戒行俱に破れん、貧兒に與ふれば福を得ること無量なり。亦た在家の人、出家の人の殘食を食すること

(一) 胝 或は眠の字か。

を得ず、亦た五辛酒肉家食するを得ざれ。若し善男子、善女人、此の食を食せば、受持讀誦の戒行俱に破れて、受持讀誦と名けず、神力俱に失して妄語罪を得ん。此の法を說く時、阿難●比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●五百婆羅門及び三十三天●梵王●帝釋●四天王●天龍鬼神八部●乾闥婆●迦樓羅●緊那羅●摩睺羅伽●人●非人等、及び轉輪聖王、佛の所說を聞いて皆大いに歡喜して、悉く無生法忍を證し、即ち阿(一)耨多羅三藐三菩提心を得、悉く佛地を證せり。

爾の時に世尊、畫像の法を說きたまふに、過去未來現在の十方三世の一切の諸大菩薩摩訶薩百千萬の衆に於ては、(二)俱に來て集會したまふ。百千の金剛藏王俱に來て集會したまふ。千百の二十八部藥叉天王俱に來て集會したまふ。百千の香天王俱に來て集會したまふ。百千の天藥叉王俱に來て集會したまふ。百千の師子天王俱に來て集會したまふ。百千の聖僧俱に來て集會したまふ。百千の持呪仙人俱に來て集會したまふ。百千の帝釋天王俱に來て集會したまふ。百千の轉輪聖王俱に來て集會したまふ。百千の孔雀天王俱に來て集會したまふ。百千の龍天王俱に來て集會したまふ。千百の大風天王俱に來て集會したまふ。百千の大雷天王俱に來て集會したまふ。百千の四大天王俱に來て集會した

(一) 靜 縛の字か。

(二) 俱に來て集會す 多くの集會あり、是れ華嚴會座の如し。

まふ。百千の大雨天王倶に來て集會したまふ。百千の金翅鳥王倶に來て集會したまふ。百千の白象王倶に來て集會したまふ。百千の日天王倶に來て集會したまふ。百千の月天王倶に來て集會したまふ。百千の星宿天王倶に來て集會したまふ。百千の阿修羅王倶に來て集會したまふ。百千の水天王倶に來て集會したまふ。百千の火天王倶に來て集會したまふ。百千の餘摩羅王倶に來て集會したまふ。百千の大地王倶に來て集會したまふ。百千の山神天王倶に來て集會したまふ。百千の河神天王倶に來て集會したまふ。百千の海神天王倶に來て集會したまふ。百千の五穀神善倶に來て集會したまふ。百千の舍宅神倶に來て集會したまふ。百千の守門戸神倶に來て集會したまふ。百千の園林花菓神倶に來て集會したまふ。百千の戲食善神倶に來て集會したまふ。百千の主七寶善神倶に來て集會したまふ。百千の五種淨錢財天王倶に來て集會したまふ。百千の修多羅王倶に來て集會したまふ。百千の秘密藏天神王倶に來て集會したまふ。百千の功德天女倶に來て集會したまふ。百千の比丘・比丘尼倶に來て集會したまふ。百千の優婆塞・優婆夷倶に來て集會したまふ。百千の乾闥婆・迦樓羅・緊那羅倶に來て集會したまふ。百千の摩睺羅伽・人非人等倶に來て集會したまふ。百千の仙藥天神王倶に來て集會したまふ。百千の上妙四時衣服天王倶に來て集會したまふ。百千の恒河沙數の甘露天王倶に來て集會したまふ。百千の天印大將護念一切衆生倶に來て集會したまふ。

爾の時に世尊、此の畫像の法を說きたまふ時、三千大千世界六種に震動せり。是の時天より曼陀羅花を雨らして、香風四もに起り幢幡自ら動じて天鼓の如くにして自ら鳴り、十方三世の諸佛大慈光を放ち、下も阿鼻地獄に至るに、六趣の衆生其の光色を見已て、皆悉く念佛、念法、念僧して無上菩提を證し、結衆衆會して、願て三世諸佛の畫像の法を聞く。其の絹を取て四複となし、各〻長八尺なり、香汁を用ひて絹に塗れ、膠汁を用ひて像を畫くことを得ざれ。其の像を畫く人は八戒齋を受けしめ淸淨の食を與へ、澡浴して新淨の衣を著し、一淨房に於て香を燒いて一澡瓶を安き、香水を滿盛して四方に灌ぎ、即ち結界の畔を爲せ。先づ水池を畫いて池下に向ふこと二叉、其の池水中に蓮花を畫いて開敷す、開かざるは下に向ふ、水池の四邊に劒を安し、欄の石柱は悉く綵色を用ひて其の柱を莊嚴せよ、頂上は開敷蓮花の形に似たり、其の中に金剛珠を安き、其の柱の一一に金珠を安き、中心に一降橋を作り、亦た綵寶を用ひて其を莊嚴せよ、千の寶階を畫いて上に五間門屋を畫作す、其の上は一らに樓形の如し、上に

向て七門屋を造り、上に鴟尾を安け、其の瓦一ら碧流離色の如し、下に向て薝頭の一一の口中より寶花を吐く、中に珠鐸を懸けよ、其の七間樓に門及び牕を安いて中心門に當て、一大金鏁を安く、諸門も亦た七寶綵畫して其の樓を莊嚴し、下心門に當て一盧舍那の像を畫作せよ、一ら佛の長短形像の如し。左右の阿難●迦葉及び觀世音菩薩●大勢至菩薩は、悉く七寶を用ひて莊嚴せよ、左右に二の金剛を畫け、純ら金色となす、手に寶杵を執り威嚴あつて降魔の勢なり、及び金剛の脚下に金山を畫作せよ。其の左右に下に向てまた二の金剛形を畫作せよ、紅白色の如くす。其の金剛の頂上に輪蓋を安き、其の手は皆杵を把る彩畫莊嚴す、脚下に還た金剛山を踏む、端正にして威嚴あり、一は口を聞き一は脣を笑み、金剛の左右の脚下に二の師子を作れ、頭を擧げて上に向ひ、哮吼の勢を作す。其の盧舍那佛像の前に一の大金香爐上に七寶の蓋を安き、香烟をして斷絶せしむること勿れ。其の香爐の前に一の開敷蓮花を畫け、其の花の中心より七寶の花盤を化出す、其の盤中に七箇の金疊を畫作し、其の疊中に於て金●銀●琉璃●珊瑚●眞珠を安き、安悉●薫陸香●牛頭●旃檀香あり。供養盤前に四天王幡を畫け、四口なり、金剛幡子十二口、菩薩幡十二口、龍王幡八口あり、一行者を作り、一生褥子を作り、褥の上に於て吉祥鳥草を畫作せよ、行者胡跪し合掌供養す。若し善男子●善女人●優婆塞●優婆夷婆羅門等、各自に本尊の面貌を畫いて喜悅す、少年の形狀は結跏趺坐せり、畫像の法訖んぬ。

(一) 法身印法八葉文殊の法住の契なり。

爾の時に世尊、作一切印法(一)法身印を說きたまふ第一。起立して脚を丁字立に作し、兩手を直くし上に向け掌臂を合せ、二中指開き八指中節を相合し、二腕を屈して上を向けしめ頂上に上ぐ、此れは是れ護身の印なり、呪を誦すること一百八遍なり。降伏一切諸鬼神天魔印第二。八指相合せて其の二中指を開となし、右、左を押す印を作す時、一切諸佛菩薩、金剛天等皆悉く歡喜したまふ。

能消滅一切罪障印第三。八指の無名指●二小指●二頭指及び二中指を開となし、左、右を押し二肘を合せて蹲跪して、呪を誦すること一百八遍す、或は一千八遍す、若し善男子●善女人比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●婆羅門等、所有る一切過去未來現在の一切の罪障、悉く皆消滅して餘りなし。此の印を作す時は、常に一切諸佛菩薩及び天龍八部の擁護を得ん。此の印を作し已らば、行者心に想へ、此の印を以てせば身金剛身の如し。其の三道を供養するの印を作す時は、尊像の前に於て洗浴し、新淨の衣を著

し、燒香して手を薰じ、百味の餅果を種種に供養し上り、其の作法の人は過去未來十方三世の一切諸佛●天龍八部を啓請し、十二部經及び修多羅藏を以て冥官業道に啓告して我を證知せしめよ。弟子某甲等、所有る一切過去未來現在の一切の罪業悉く滅することを得、其の人此の陀羅尼印中に於て、金剛三昧を作すことを得。

一切諸天魔及び一切の惡鬼神蠱道精魅惡趣等を摧碎する印第四。　地に起立して脚を丁字立に作し、左手を下に向へ怒て指を立てゝ想へ、其の手中に器杖あつて出づと。右手を上に向へて想へ、其の手中に杵あつて、一切の諸の魔䰟及び一切の天魔を降伏し、降伏し盡して其の人大瞋威をなし、齒は下唇を咬み、目を怒らし眉を動し、其の杵印掌中にして八指(一)監文を拳にす。其の大母指節を屈し頭指の中節を捻して心中に想て、自の頂上に火輪あつて現に忿瞋を起すと。想へ一切の天魔、一切の惡鬼、蠱道魅鬼獸の類一時に俱に死す。上に向つて天を看れば、虛空中の一切の飛鳥飛天夜叉、一切の雜類等一時に俱に死すと。

降伏一切天魔鬼神斬頭印第五。　兩脚を並べて丁字立に作し、左手は右手の腕を把て低げず、前拳を名けて金剛鉞斧の印と曰ふ。此の印を作す時、一切の天魔鬼神悉く皆

(一) 監文又の誤か。或は堅

(一) 金剛火輪印阿吒薄拘の三戟の印か、然らば小指も立て合すべきなり。

(二) 金剛藏王降伏魔の印或はいふ此の印結び成し難しと。然るに左右俱に上に向へて仰け、右を上にし左を下にして、右の大・左の小を押し、右の小・左の大を押す、是れ大降天魔の印とす。次の印は左を下に向け、右は上に向へて背を合せ相叉へば成すか、是れは降伏一切魔の印といふ。

頭を斬つて一時に死す。

金剛刀印第六。　右手無名指小指を屈して、掌中に於て大母指を以て二指の甲上を押し、頭指●中指を舒べて高く手を擧ぐるを、名けて金剛刀印といふ、指を此の刀と想へば化して百千萬刀を作つて、諸の鬼神一切の精魅一時に俱起す。

(一)金剛火輪印第七。　二大母指●二中指を並べ相ひ合せ、其の二頭指及び二無名指相ひ叉へて掌中に入れ、左、右を押し相ひ鉤して二手の腕を合せ、上を怒り下に向つて殺(はなはだ)怒ること猶し百千の火輪の如し。其の作法の人、佛前に於て結跏趺坐し、其の二肘を兩膝の上に於て心に其の火輪を想へ、十二輻あつて一一の輻中に復た百千の火兵あり、一一の火兵化して百千の火兵と作り、各各無量の火神を駈使せり、若し諸の魔鬼神及び一切の雜類鬼魅、恒沙の眷屬あつて、衆生を惱亂せば、其の火輪悉く能く降伏せん。

(二)金剛藏王降伏魔印第八。　結跏趺坐して左右の二手の、頭指●中指●無名指の三指を左右の掌中に舒べ、右手の三指を上に向へ、左手の掌中に舒べて左右相押せよ、其の右手の大指は左手の小指を押し、右手の小指は左手の大指を押すを名けて大降天魔の印といふ。其の印に二名あり、一は舊印の如し、左手を下に向け、右手を上に向けて

相ひ叉へ、前に準じて相ひ叉ふるを、名けて降伏一切魔印といふ。

爾の時に如來、過去未來現在の十方三世一切諸佛菩薩金剛、諸天龍八部、百千萬恒河沙の諸佛と、菩提の道場に於て此の印を說く時、復た三十六種の魔王●天魔●虛空魔及び十二の魔王あつて、八萬四千の魔兵を領して以て眷屬となす。復た五百の天魔波旬あつて、各〻恒河沙の眷屬及び無量の惡鬼神の兵を領し、衆生の血肉、一切の精魅蠱道を食噉す、更に魔師を將ゐて雲を興し雨を致し、非時に霜雹を下して一切の苗稼を損や。復た貯ふる器仗を將て天下に於て病を行じ、衆生を殺害して恒に將さに業となし慈悲心なし。復た雜類の鬼神あつて人の精氣を吸ふ、無量無邊の有形無形、有手無手、有足無足言はずして來り、來て言をなすものあり、目心を興怒し諸の器(一)仗を將つ。復た烏類天魔、鼠頭天魔、猪頭天魔、鷄頭天魔、兎頭天魔、牛頭天魔あり。其の一切天魔等一切の器仗●弓弩●鉾楯●輪蓋、一切の衣甲を捨てゝ、如來の前に投じて命を乞ひ、是の如くの言を作さく、我等魔衆如來に歸依したてまつるに我を損ひたまふ莫れ。我は一切の佛法中に於て常に擁護せん。若し經典を持誦する者あらば、一切の災難あることなく、其の善法をして、日夜に增長せしめて、一切の災難悉く滅して餘なけん。爾

(一)伏の字なしらん。

の時に世尊、諸魔に告げて言く、汝等復た能く菩提心を發せば、即ち阿耨多羅三藐三菩提を得ん。若し善男子善女人あつて、如來の滅後に於て此の陀羅尼を受持せば、此の人即ち金剛藏菩薩の位を證することを得、常に一切諸佛を得て加護せられ、一切菩薩恒に伴侶とならん。若し善男子等資糧に乏少ならば常に豊足ならしめん。此の呪を誦せば身は甘露の如く、色力熾盛なり。若し比丘●比丘尼●優婆塞●優婆夷●婆羅門等破戒の者あらば、所有る一切の罪並に除滅せしめん。若し善男子善女人、此の陀羅尼を誦し、日夜に增長し精勤して思惟せば、一切衆生枷鎖の苦離れ、冥官業道に廻施すれば一切鬼神及び阿鼻大地獄に罪を受くるの衆生をして、悉く解脫せしめん。若し衆生あつて前世に一切惡業を造て今人身を得んに、種種の疾病蠱道精魅顚癲狂走、及び一切の災悔烏鳴、寒熱の惡病、連年累月差えざる者も、若し此の陀羅尼を誦すること一千八遍すれば、一切の災病悉く皆除差せん。若し薄福の衆生短命の者、此の陀羅尼を誦すること四十九遍を經ば、即ち增壽を得ん。苦し產生の難あらば、當さに此の陀羅尼經典四十九遍を誦すべし、災難消滅し平復して故の如し。若し瘧病一日二日三日四日五日乃至七日半月を患ひ、或は一月或は復た一年を經て差ゆるを得ざれば、井華水を取

つて澡瓶に之を盛り、尊像の前に於て水を呪すること一千八遍して此の患人に與へ、三兩合して之を服せしめ、前香五丸を用ひて之を服せば、即ち除愈することを得ん。若し是の日瘧病の者、刀を呪すること一百八遍して、地を畫して方圓四尺となし、其の患人洗浴して新淨の衣を著し、中に於て坐して香を與へて之を服し呪を誦すること一千八遍せば、即ち除差するを得ん。若し是れ多年差えずして瘦損する者、臥著して呪を誦し、尊像の前に地を畫して、諸佛に啓告すらく、願くは今苦を救ひたまへと。香を燒いて至心に百味の飲食を著け奉獻し供養すれば、即ち除差するを得ん。若し是れ一切の精魅●魍魎●横鬼●蠱道、衆生の心を食ひて、上下より血を出し差えざれば、或は年月を經ば、即ち尊像の前に於て、前に準じて燒香し、酥蜜●乳酪●穀稻花●胡麻相ひ和し火中に之を燒き、呪を誦すること、七日七夜にして、前に準じて供養し燒香し飲食し、菓餅の種種、一七日二七日供養せば即ち除差するを得ん。若し是れ天行病にして多月差えざれば、水を呪して澡浴し並に服すること四五合なれば、即ち除差するを得ん。若し人、一切の瘡疥及び五種の加摩羅病を患ひば、水を呪し沐浴すること四十九日、及び香を服すること二十一九、兼ねて尊像の前に於て此の經典を誦すること四十九遍せば、即ち除差するを得ん。若し是れ疥癬ならば乾濕を問はず、雄黃を碎くこと一兩、及び酥と相ひ和して、尊像の前に於て呪を誦すること一千八遍し、然して後に一切衆生に行き施せ。

(一)私に云く、五色粉の眞言は集經第十烏樞摩法品に同なり。

爾の時に世尊、此の陀羅尼經を說いて金剛藏菩薩摩訶薩等、及び阿難比丘●天龍八部に付囑したまふに、前後に圍繞し恭敬禮拜し信受し奉行したてまつる。

(一)白粉を加持する眞言。　唵 揭那去 音曳濕閉二合 駄去音夜莎訶。

赤粉を加持する眞言。　唵一揭那去音曳二阿羅上音駄去音夜莎訶

黃粉を加持する眞言。　唵一揭那去音曳二卑駄去音夜三莎訶

青粉を加持する眞言。　唵一阿揭那去曳二可唎駄去曳莎訶

黑粉を加持する眞言。　唵一阿揭那去曳君利二合瑟那去夜莎訶

歸命陀羅尼。　一切經藏の功德を所見し及び一切の道場を見て、皆此の眞言を誦すること七遍すれば、功德不可思議なり。

南摸布哆耶俱羅尼一　南摸達摩耶哆以捉二哺摸僧訶耶摩帝三達哩驃鞞四薩怛哩曩五哺謨引聲大輪の印。　左右の手を以て相ひ叉へて掌中に入れ、二大母指を亦た掌中に入れて、

將さに中印を頂戴し、左脚を以て右脚の上に安き、呪を誦すること二十一遍し、下に向て之を放ち散ず。

大輪金剛稽首請偈　南天竺三藏金剛智　譯す

稽首したてまつる珠髻大花齒　力士密跡大輪王
烏芻沙摩不動尊　火頭結界軍荼利
或は嗔り或は喚つて威怒を作し　山を移し海を轉ずること須臾の間
羅刹衆の毒心を降伏したまふに　眞言を說きたまふを聞いて皆怖畏す
十惡を摧滅して含靈を化し　如來の功德海に超入す
弟子の持誦の者を護らんために　發心して讚し請せば聲に應じて期せん
願くは大金剛淸淨の衆　跋折羅杵自ら隨心して
此の道場に於て念處を禮するに　周匝圍繞して結界と作らんことを。

國譯佛說大輪金剛總持陀羅尼經　終

國譯大輪金剛修行悉地成就及供養法

錄外豐山版中三。縮餘二。經藏三套一。此の軌は大輪金剛一明を以て一切成就を得る法なり。

我れ金剛頂經に依て、略して大輪持念次第を述す、先づ當さに一淨室を持し道場を嚴飾し、曼荼羅を起て、華幡幢蓋燒香散華すべし、先づ師に從て灌頂を受くることを得竟て、然して後親ら敎法を受持念すべし、乃ち修習すべきこと每日三時、時別に一千八十遍、更に移易せず、遍數三洛叉に滿たば即ち成就するを得ん。道場に入らんと欲する時ごとに、先づ心中に吽字を想へ、字を觀じて一大金剛を化す。便ち去て道場の中に入り、本尊の前に至て身を端し正しく立て掌を合せ、至心に懺悔し思惟せよ、無始より巳來生死に流轉して眞理を悟らず、常に三界に處せり、我れ今懺悔す、所有罪障並に願くは消滅したまへ。即ち懺悔除罪の眞言を念じて曰く、　唵引薩嚩轉舌引幡引跋尾入娑普二吒娜賀娜嚩日囉二合野引娑嚩二合賀引

此の眞言を誦する加持力に由るが故に、三業淸淨三昧を獲得す。次に頂上に當て合掌し、普禮一切佛及び聖衆眞言を誦して曰く、　唵引薩嚩怛他引蘖哆迦引翼嚩二合訖唧二合哆跛娜曩迦引嚕弭

十方等正覺　三世一切三身を具するを南無したてまつる
一切大乘の法に南無し　不退菩薩衆に南無したてまつる
諸明の眞實の言に南無し　一切諸の密印に南無したてまつる
唯願くは我を慈悲し護念し　我を拔いて生死の泥を出でしめ
我が肉眼見知せず　道眼普く我が歸命を見たまはんことを
歸命の眞言に曰く　曩謨引(ナウボ)　禰捨南二合(シャナン)　沒陀俱胝南上(ボダクチナン)　唵引(オン)　引盧戸盧悉駄路佐你薩縛囉他二合(ロコロシッダロシャニサラバアラタ)
婆駄(サダ)　你娑嚩賀(ニ)
我れ過去世より　生死中に流轉して　身口意業
及び嫉妬慳悋を恣にし　邪見は心を覆ふが故に　三昧耶に違越せり
今大聖尊に對したてまつり　心を盡して懺悔す　先佛所懺の如く
我今亦た是の如し　願くは加持力に乘じて　衆生悉く清淨ならしめん
二羽虛心合して　想へ身は瑠璃の如く　內外極めて明徹なりと
三密金剛を以て　加持して本尊となる　次に淨三業の印を以て
五處に轉し　清淨澡浴を成す。

眞言に曰く、　唵引(オン)　薩嚩(サラバ)　二合(バムバシユウ)　婆嚩(ニ)　秣(シユドカン)の反　駄一切清淨の法(サラバ)　薩嚩(タラマ)　達摩上　婆嚩(ニ)　合婆嚩(ババシユ)　秣度(シユドカン)　憾
金剛掌を頂に置き　運心して法界に遍し　親り十方佛
菩薩金剛衆に對して　身を捨て地に委して禮したてまつる。
我れ此の身を淨め諸垢を離れ　及(ヒ)與び三世の身口意
大海刹塵數に過ぎたり　一切諸の如來に奉獻してまつる。
密言に曰く　唵引(オン)　薩嚩(サラバ)　恒(タ)　他藥(ギヤタ)　哆布惹(ホジヤハ)　鉢羅(ラ)　二合(パリ)　嚩(ウタ)　舌哆(ナウヤ)　曩夜(アタマナンニリ)　阿(ヤ)　菩(タ)　摩(ヤ)　南涅哩(ニヤタヤミ)　二合野(ヤ)　多夜(サラバタ)　弭薩嚩(ギヤタ)　恒(タ)
他藥(ギヤタ)　多室(シツシヤヂ)　者(チ)　地底瑟(シユツタ)　姹(ニ)　合(ナウサラバ)　曩薩嚩(タ)　恒(ギヤタ)　他藥(ジヤナンメイア)　多若(ビ)　難謎阿(シヤト)　味設都
端坐して身心を澄し　政念本尊を觀せよ　先づ三昧耶を結び
定慧虛心合して　進力忍願に附け　背の初節の文を押し
禪智を進力に附け　各〻下節の文を捻せよ　諦かに諸の如來を觀たてまつる
相好見はれて分明なり。
佛部三昧耶の眞言に曰く　唵引(オン)　恒(タ)　他引(ギヤトウド)　藥都納婆(ベム)　二合(バ)　嚩引(ヤ)　野引　娑嚩(ニ)　合賀
七遍頂上に散じて　此に由りて能く　諸佛を警覺したまつるに來て護念し

身業清淨なることを得　次に蓮華部を陳ぶ　前の如く二羽合して
餘の六度を散し舒べ　微しく屈して八葉蓮の如くし　密かに想へ觀自在
相好極めて端嚴なり　並に無量倶胝　蓮花族の聖衆
圍繞したまふ其の加持　語業淨を獲得せん。
眞言に曰く　唵引跏娜麼二合納婆二合嚩野娑嚩二合賀引
金剛三昧耶　左覆せて右羽を仰げ　指背相ひ著けしむ
檀智並に禪慧　各各反けて相叉へ　餘は三股杵の如くす
當さに想ふべし金剛藏　忿怒光赫奕たり　應さに察すべし金剛族
眷屬自ら圍繞したまふ　此の加持に由るが故に　意業清淨を獲ん。
眞言に曰く　唵引嚩日嚧二合納婆二合嚩野娑嚩二合賀引
次に當に甲冑を被るべし　福智內に相叉へ　忍願堅て相ひ合せて
進力屈して鉤の如くす　禮智、戒方を押へ　五處を印して甲を成す
遍ぬく諸の有情を緣じて　速かに障難を離れしめん　諸魔及び惡人
能く其の便を得ることなし。

（一）次に纔發意云云　瑜祇經に說く小金剛輪の印言なり、此の加持を以て身器清淨と成て法曼荼羅を成ず。

眞言に曰く　唵引嚩日囉二合擬你二合鉢羅二合捻波跢二合野娑嚩二合賀
次に地界印を結べ　戒忍二度を以て　願方の間に置け
各〻掌中に繳入して　檀慧進力度　禪智各〻相ひ合せ
相金剛杵の如し　禪智、地を按せよ　印明加持の故に
下金剛輪に至る　即ち堅固界　金剛不壞座を成ず
天魔動ずること能はず　穢惡清淨なることを成ず。
眞言に曰く唵引枳里枳里嚩日羅部律二合滿馱滿馱、吽發吒半音
次に金剛牆を結べ　前の地界の印に準じて　掌を開いて禪智を堅てよ
印より熾焰を流し　右に旋遶すること三匝せば　即ち堅固界を成ず。
眞言に曰く唵引薩囉薩囉嚩日羅二合鉢囉二合賀囉吽泮吒
（二）次に纔發意　轉法輪密印を結べ　各、金剛拳に作し
進力檀慧鉤す　此の加持を以ての故に　身器清淨となり
法曼荼羅を成ず　印を以て壇上に觸るれば　即ち金剛部
調伏曼荼羅を成ず　印を本尊像に觸れて　及び虛空中に置けば

皆曼荼羅と成る　行者設し法を越へば　悞て三昧耶を破る

眞言加持力をもつて　戒品淨にして圓滿ならん。

眞言に曰く唵引縛日囉二合斫訖羅二合吽引若入吽鑁斛引

次に虛空藏　廣大供養印を結べ　當に定慧手を合せ

忍願外に相ひ叉へて　進力麽抳寶　印を諸供養に流せ

衣服飲食の雲　宮殿樓閣等　及び香花音樂

種種寶憧幡　雲海十方に遍ねく　眞實に供養を成ず

一ら極樂界の如し　壇中の地哩力二合成字　大光明を放つて

紅頗梨色の如くにして　遍ねく十方の刹を照さん　斯の光明に遇ふ者は

業障盡く消除す　我が功德力　如來加持力

及び法界力を以て　普く供養して住せん。

眞言に曰く唵引誐誐曩參婆嚩嚩日羅二合斛引

次に車輅印を結べ　二羽仰け相ひ叉へて　各〻禪智度を以て

進力の下節を捻せよ　七寶の車輅成じ　彼の金剛宮に往き

尊及び眷屬を請して　此の寶車輅に乘せたつてまつる。

送車輅の眞言に曰く　唵引都引嚕都嚕吽引

前の印相を散せずして　當に禪智度を以て　身に向け進力を撥せよ

便ち請車輅を成せん。

眞言に曰く　曩莫悉底哩也四合地尾二合迦南怛他蘖哆南引唵引囉日朗儗嬢上阿迦羅灑二合野

若し逢る時は阿迦羅灑野を除き、娑嚩二合賀加ふるに尾蘖野を以てせよ

車輅虛空に住して　當さに諸の聖衆を迎ふべし　福智內縛拳にして

智度鉤形の如くし　身に向へて三たび請召せよ　本尊並に眷屬

本誓を捨てずして　請に赴き道場に降らん。

眞言に曰く　唵引嚩日囉二合地吽二合摩賀引作訖囉二合嚩日嚩二合曳二合哩吽曳二合吽娑嚩二合賀

次に降三世　忿怒金剛印を結べ　二手金剛拳にして

檀慧反て相ひ鉤し右、左を押す　進力を心に當てゝ堅て　心想して本尊と成る

右足は大天を踏み　左は烏魔妃を踏み　遍身猛焰をもつて燃す

心●額●喉●頂を印して　左に旋て辟除を成し　右に轉じて營界を堅くす

四面みな忿怒して　八臂は器杖を執り　立て丶丁字の勢の如くす
此の三摩地に入て　菩提心に住すべし　深く悲愍を起して
内外の障を滅除せん。
眞言に曰く　唵引遜婆去顎遜婆去顎吽短呼あるこの下も同じ疙哩二合疊拏二合疙哩二合疊拏吽上に準ず疊哩二合疊
拏二合跂野吽阿曩野舸引婆誐鑁嚩日囉二合吽發吒半音
上方金剛網　即ち前の地界印　禪智進力下文を捻して
頂上に三たび旋遶せよ　金剛堅堅の網。
眞言に曰く　唵引尾婆普二合囉捺羅二合乞叉二合嚩日囉二合半惹の反囉吽引吽引泮吒
金剛火院界　左に右の羽の背を掩ひ　禪智度を桙り竪て
想へ火焔熾盛にして　印より光明を流し　右牆外に旋りて
三重の火焔を圍むに　諸佛菩薩衆　猶尚は違越せず
何に況んや諸の天魔　能く嬈近する者なし。
眞言に曰く　唵引阿三去葬去儀寧賀引羅吽引發吒
次に閼伽を獻ずるの印　想へ聖衆の足を浴し　當さに修行者の

三業淨なることを獲得せしむべしと。
眞言に曰く　曩謨三滿多沒馱上喃誐誐曩三去麼上糝摩娑嚩二合賀
復た蓮華座を獻す　合掌して戒方　及び忍願進力を舒べて
圓かに八葉の蓮の如くせよ　想へ印より　無量の金剛華を流出すと
諸の聖尊に奉獻したてまつる　眞言に曰く　唵引
廣大不空王　(一)摩捉供養の印　當に金剛掌を合して
進力慇めて寶の如くし　纔かに祕密明を誦するに　十方界に遍して
普く大供養を雨らさん　塗香華鬘の雲　燒香衣服の雲
麼尼光明の燈　幢幡寶帳の雲　種種の天音樂
普ぬく諸佛土に遍して　眞實に供養を成さんに　無量の福聚を獲ること
虛空の無邊なるが如し　常に諸佛の會に生じて　諸の有情を拔濟せん。
眞言に曰く　唵引阿謨佉布惹摩捉鉢娜麼二合慈日哩二合怛他蘖多尾路引枳帝三滿多鉢囉二合
娑囉吽引
專注して本尊を觀ずるに　分明なること目前の如し　慈悲忿怒の相なり

(一)摩捉供養の印　金合二頭寶形、文殊藏陀羅尼經の文殊寶珠の印と全く同じ。

眷屬自ら圍遶して　念念に仰慕を生じて　現前に三昧を獲ん。

虔誠金剛の讃。讃に曰く

麼賀作訖囉二合野戰拏野尾你也二合囉引惹野婆引駄吠の反訥難平多那摩上迦夜引野曩摩悉帝引
嚩日羅二合跛拏曳

衆聖皆觀喜す　想へ本尊の頂　上に金剛輪あり

空中に旋轉せり　座の下に二の金輪　次に金剛部母

次に二大輪金剛　根本懺悔の印　戒方進力内に相ひ叉へ

檀慧忍願智相合せて　輪の三角光明焔の如くし　禪智は頂に在て歡喜を乞ふなり

我今、法に依て結し已る　皆三昧耶を闕犯すること有らば　密に蘇摩金剛明を持

して　四時の諸の過失を懺悔せよ。

大輪金剛の眞言に曰く

曩莫悉底哩也四地尾二合迦引喃薩嚩怛他引蘖哆喃唵引尾囉爾茲以の反尾囉爾摩賀引作訖囉二合嚩日
哩二合婆哆婆哆婆引囉底丁以の反婆囉底上に準ず怛囉二合以怛囉二合以尾駄摩爾三去吽若你怛囉二合摩上底
悉駄引儗哩二合曳怛覽二合婆嚩二合賀引

(一) 大輪金剛云云　内縛三股の印。二地・二火・二空立て合せ禪智頂に在て歡喜を乞ふ、眞言は大金剛輪と同なれ共、暗も唵に非の上の野も曳に作る異のみ。

次に金剛掌を拍ちて　聖衆をして歡喜せしめよ。

眞言に曰く　唵引嚩日囉二合都使野斛

二手念珠を捧げて　頂に至り心に置け。

眞言に曰く　唵引嚩日囉二合玉咽野二合惹跛三麼曳吽引

持珠眞言に曰く　唵引枳里枳里勃知里二合底娑嚩二合賀

妙菩提心を觀ずるに　圓明なること淨月輪の如し　祕密の暗字門

紫磨金色の光　行住及び坐臥に　常に其の前に現せしめん

身心動搖せず　輕慢して諸事を觀すれば　小聲自らの耳に聞え

緩ならず亦た急ならず　念誦するが如し時に於て　切緣して道場を出づれば

當さに諸聖衆を安すべし。　偈に曰く

奉請來降三摩地　本願に違せずして世間に滿つ

不空事業暫く安ならしむ　唯願くは聖衆圓寂に歸したまへ

(二) 當さに金剛鈴を振るべし。眞言に曰く

唵引嚩日囉二合健吒惡入引

(二) 當さに云云　撥遣の前に至て、振鈴、次に撥遣なり、自餘の行法にはなき作法なり。

安祥徐歩し　出入に吽字の明を稱し　念じ畢て發遣せんと欲ふ
再び普供養を結び　次に部母の明を陳べて　眞言の句を分付す
我今一切のために　菩提の果を至求す　唯願くは大聖尊
我が遍數を成就せしめたまへ　當さに部母の印を結ふべし　百字を明を加持して
本尊をして歡喜せしめよ　火院左に旋轉すれば　即ち大印を解くことを成ず
偈を誦して曰く
現世の諸の如來　救世の諸菩薩　大乘敎を斷せざれば
殊勝智地に到らん　唯願くは聖天衆　決定して我を證知し
各〻所安に隨ふべし　後復た哀赴を垂れたまへ。
次に發遣の偈を誦す。
已に是の如くの勝上利を作し　一切衆生に施與し竟んぬ
願くは諸の聖者本土に歸り　振鈴して弘誓願に違せず。
當さに車輅奉送の印を陳ぶべし。
次に開發願　次に三部護身　禮懺は常儀に依りて
意に隨て任に經行せよ。

國譯大輪金剛修行悉地成就及供養法　終

國譯慈氏菩薩(一)略修愈誐念誦法卷上

青龍寺(二)山林院一切經

慈氏菩薩略修愈誐(三)入法界五大觀門品第一(四)並に序

大興善寺三藏沙門善無畏　詔を奉じ譯す

(五)尾哩左曩佛　一生補處の妹怛唎二合耶と

四智と四波羅蜜多と　(六)八大有情摩訶薩と

五部の諸明と定慧の相　諸波羅蜜男女の像と

十方護世天王衆とを稽首したてまつる　我れ今盡く皆な稽首して禮し上つる

一切を利して愈祇を修するもの　速かに慈氏の大悉地を成せんが爲めなり

(七)無生を修するものゝ爲めに愈誐を說き　有相を樂求するには兼ねて相を說く

(八)有無二相各一體なり　文字と觀照と實相との智

三種波羅壞(ラシヤ)は無相なり　(九)身口意業は三密と成る

三密即ち應と化と法とを成ず　(一〇)五輪五智是れ五分

(一)錄外豐山版初四、縮餘一、續藏三套一、略修愈誐略にあらず廣本なれども かくいふ。此の軌は一門即普門の密意に依て製するもの貴むべし 猶ほ愈誐は相應と翻じ、下に瑜祇と云ふは女聲なり、下の愈誐とは愈蹇行者、行者即ち慈氏菩薩。

(二)山林院　異本に東塔院といふ同じか。

(三)入法界　五輪法界。

(四)並に序　此の二字未詳、文相は歸敬序なり。

(五)尾哩　尾亥の切

(六)八大有情　八大菩薩曼陀羅經の八菩薩か或は八供の大士か。

(七)無生　七地八地なり、無生といふは一切智を得る位なり。

(八)有無相　有相は有爲法。大日經には本地を無相と

し加持を有相とせり。

(九) 身口意行者の三業本尊の三密となる。三密即ち三身なるは今文明證たり。

(一〇) 五輪五智云云　五輪の性清粹なる五智といひ、身の支分五處にあるが故に五分といふ。即ち戒・定・慧・解・脫解脫智見なり、又た五分即五智なれば是れまた五智といふべし。

(一一) 淨法界心三昧耶　覺字觀なり定印或は火輪の印なり、有爲の五大（不淨）を燒き無爲情淨とす。

(一二) 此の圖一本になし已下同じ。眞言原本には梵字あれども今文之を略す以下之に準ず

五分に盡く法界輪を攝す　是の故に我今愈誡を禮す

愈誡即ち是れ慈氏尊　是の故に我今愈誡を修す

速かに慈氏を證して同一體ならむ。

若し現世に色身を捨てずして、速かに慈氏宮を證して同會の說法をして大悉地を得んと欲はゞ、必ず此の愈誡に依て念誦せよ、心ず無上の大悉地を獲ん。若し此の法に依て念誦せんと欲はゞ先づ(一)淨法界心三昧耶を觀せよ、頂上に智火輪あり、狀日の初めて出づるが如し、色赫奕として三角なり、漫荼羅の其の形左の如し(二)△

淨法界心の眞言に曰く

納葬三滿多鬱駄腩一覽二一遍

頂上の如く三角の智火を觀じて、身に遍して燒き盡せよ、五蘊皆空にして唯空寂のみあり、中より金剛座を觀せよ、腰已下は紫磨にして方なり、金剛輪なり、其の形左の如し

(三) 丸

金剛輪眞言に曰く

納葬三滿多鬱駄南一遏二一遍

號して金剛輪座といふ。金剛輪より上に水輪を觀せよ、色白うして賞佉の如し、其の形滿月の如し、圓形左の如し。(四)

水輪眞言に曰く

(一) 納葬三滿多鬱駄引腩一嚩二一遍

號して水輪といふ。又た水輪より上み心中に當て智火輪を想へ、三角赤色にして尖となる、頂上に向へよ、號して一切智心といふ、其の形左の如し。△

火輪の眞言に曰く

納葬三滿多鬱駄引腩一囉二一遍

又た眉上に於て半月仰ける輪の狀を觀せよ、黑風の鬘髻として雲を垂るゝが若し、又た其の形左の如し (六)

風輪の眞言に曰く

納葬三滿多鬱駄引腩含去聲二一遍

又た頂上に於て欠字を覺して虛空となせ、一切の色を具せり、其の形左如し、(八)

(二) 納に作る。一本に南

(一)五輪云云　法界眼とは上の覽字觀の無垢眼をいふ。

(二)普通眞言云云　轉明妃なり下に一切も見えたり、一切佛身印とは金合なり、摩勝軌上には一切佛心三昧耶印といふ。

(三)定慧を以て等慶吒二字觀なり、此の字を自の眼界に安布すれば法界眼となり、そは十方界を以て法界眼を以て器界また清淨法界となる、

虛空輪の眞言に曰く

納莽三滿多鬱駄引賜一欠二一遍

五輪を圖する形左の如し

(一)五輪及次び法界眼を觀せよ、圖は上の如し、五智輪を以て身を嚴り、(二)普通眞言一切の佛心印をもて五支を加持せよ、即ち金剛不壞の無漏智清淨法身と成る、(三)定慧を以て日月となし眼界に安置せよ、法界眼を以用て觀し、遍ねく十方界を照し、身既に是の如し、此の漫拏羅も亦た然なり、此の法界を以て眼に五輪を觀せよ、先づ智火を觀じて漫拏羅の地の、一切穢惡を燒除せよ、其の形左の如し、△

智火の眞言に曰く

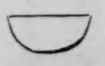
納莽三滿多鬱駄引賜一嚩二一遍

地穢を燒除し已て下に唯だ虛空のみあり、虛空の中に於て又空輪を觀せよ、其の輪形左の如し ◯

觀虛空輪の眞言に曰く

納莽三滿多多鬱駄引南一欠二一遍

又た虛空輪より上に風輪を觀せよ、形仰月の如くにして黑色なり、其の形左の如し、



風輪を觀ずる眞言に曰く

納莽三滿多鬱駄引賜一含二一遍

又た風輪より上に火輪を想へ、三角赤色にして其の形左の如し △

觀智火輪眞言に曰く

納莽三滿多鬱駄引賜一嚩二一遍

又た火輪より上に水輪を想へ、號して大悲水輪と曰ふ、白きこと雪乳の色の如くして圓形月輪の如し、其の形左の如し ◯

觀水輪眞言に曰く

納莽三滿多鬱馱引賜一斛二

又た水輪より上に金剛輪を觀せよ、方形にして黃色なり、其の左の如し □

觀金剛輪眞言に曰く

納莽三滿多鬱馱引賜遏二

上の如く五輪を觀じ了て、即ち普通の眞言及び印を以て地上を加持せよ、即ち眞實の金剛輪となる。又た愈誐海會の聖衆を觀せよ、漫拏攞の圖形(一)左の如し。

上の如く五輪及び漫拏攞海會を觀じ已て、便ち普通の眞言を誦して、普通の印を以て地を加持せよ、便ち眞實の金剛輪大愈誐漫拏攞海會と成る。

普通眞言に曰く

納莽三滿多鬱馱引南薩囉誐二合他上欠鬱捺蘖二合底二薩破二合囉醯翰誐 誐曩撿薩誐二合引賀三

此の眞言は亦た供養の中に於ても普通供養眞言と成る、五部の中に於て普供養となす。其の普通の手印の相は、定慧の二手を以て十輪相ひ叉へて度を齊せよ、即ち是れ普通の印なり。若し此の印を用ひて身を加持すれば、即ち金剛不壞の身となるなり。若し

(一) 左の如し 此の下曼拏羅の圖を脫せるか。

地上を加持すれば便ち金剛地漫拏攞となる。此の如く五輪上の如し、略く慈氏菩薩の修愈誐漫拏攞を觀じたり。大圓明の內に更に九の圓明を觀せよ。(一)八金剛を以て界道となせり、其の中の圓明に慈氏菩薩ゐます、白肉色なり、頭に五智の如來の冠を戴き、左の手に紅蓮花を執る、蓮花の上に於て法界塔印を畫け、右の手の大拇指を以て、火輪の甲の上を押し、餘指は散し舒べて微し風幢を屈す、種種の寶光あり、寶蓮花の上に於て半跏して坐し、種種の瓔珞・天衣・白帶・鐶釧を以て莊嚴せり、八の圓朋の中に於て(二)四智の三昧耶等を安す、下の曼拏攞品の中に一一に分明なり、上の如く觀じ以て便ち三昧耶辟除護身結界等の事を作せ、次第にして之を作せ。

次に三昧耶眞言を說いて曰く

(三)鄔斛二合誐躭囉二合躭履三莽也

其の手印の相は、智定の二手を以て十輪相ひ叉へて合掌せよ、明を誦すること五遍して五處を加持せよ、便ち三昧耶身の印となる、此を一切佛心三昧の印と名く、此の印より一切の印を生ずるに因るが故に、先づ三昧耶の印を作る。

金剛部三昧耶眞言に曰く 鄔斛二合誐躭囉滿陀怛喇二合吒一

(一) 八 一本に以の字に作る。

(二) 四智 此の下に四の字脫するか。

(三) 鄔斛云云 文中の囉は尊勝の軌に嚩に作る、一本に躭を脆に作るは最もよし、下も同じ。

(一)便に造る。一本に即

(二)降三世印は左右金拳にして風を立て、左は心上に置き右は物に觸れ等しく大印を引放つなり、

(三)掘に作る。一本に屈

其の印相は前の金剛合掌の印に作し、(一)便ち成ず、合せて拳に作て心上に繫け置く、心臍に繫る時に當て、明を誦すること一七遍して其の合拳を散せよ、雙べ下して三たび繫けよ、此を結金剛界の印と名く、三たび心に繫け已れ、是の眞言及び印の力によるが故に、能く三業を淨めて母地心を堅固ならしむ。次に持誦の處に於て穢觸及び障をなす者を遣除せよ。凡そ香花●塗香●末香並に諸の供具を獻せば、辟除し去垢し清淨に光現じ增威して金剛界を作せ、諸の方界を結し、身及び伴を護し、居住の處を護せよ、上の所說の如し。及び未だ詳かならざることあらば、事に臨んで要らず須らく一一皆眞言を誦し、印を作して護持すべし、能く成就せしめて諸の障難なからん。當さに(二)降三世尊明王眞言及び手印を用ひて、加持をなして各の能く諸の事業等を成辨すべし。次に降三世尊明王眞言を誦せよ、曰く

鄔㖿二合(ラム)顎三婆上(ハンバ)一誐(ザラ)羅二合(コク)虎㖿二合(ラム)三

此れを降三世明王眞言と名く。諸事を成辨すとは、其の印相は智定の二手を以て各の拳に爲して其の風幢を竪て、大空輪を(三)掘す、掌內に入れよ、地水火輪の三輪を以て之を押して即ち成ず、其の印、定の手印を以て心の上に置在せよ、智の手印を以て用ひて諸物に觸れ、及び地界の四方四隅乃至上下等の方を結し、右に轉すること三遍して上下を指せ、便ち成ず、十方界を結し訖て、次に本尊及び一切の諸の世尊四智四波羅蜜多を警覺し上る(たてまつる)、三昧耶より起ちて愈(ユギ)瞋者を觀瞻し、勤苦を愍念し、昔の本願を憶して道場に降赴したまふ。警覺の眞言に曰く

鄔㖿二合(ラム)誐(ザラ)羅二合(チ)嚩(シュタ)悉吒二合

其の手印の相は、智定の二手を以て地輪を鉤鎖して、相連ねて其の大空を屈して掌中に入れしめ、水輪及(なよ)以び火輪を以て雙べて大空輪を押せ、風幢を前に向へて相ひ著けよ、掌を以て上に向へよ、便ち眞言を誦すること七遍して、印を以て下より發起して本尊を請したてまつる、是を發起本尊の印と名くるなり。發請本尊の眞言に曰く

鄔㖿二合(ラム)誐(ザラ)二(ハンバ)嚩(ラン)二(サンマジヤク)合(ク)糝忙(ボウ)急重呼す

其の手印の相は、智定の二手を以て(一)相ひ叉へて金剛拳に作し、此の拳を解かずして、智の風幢を以て智の大空を撥へ、定の手も亦た然なり。是の如く三たび彈指して、明を誦すること一七遍す、即ち發請となる。

凡そ諸尊を請する(二)定法は、心に本尊、覩史陀宮の珊瑚殿の上に在(ましま)すと想へ、普現色身三昧耶より起て、珊瑚殿の上、白寶階道場より道場に降臨したまふと。其の形左の

(一)相ひ叉へ一本に腕に作すか。

(二)定一本には之に作る。

如し。大圓明の內に更に五の圓明あり、四隅に四の半月輪、八の寶塔、四の金剛輪あり、四の金剛杵、道を界へり、其の中の圓明には本尊慈氏菩薩ゐます。次に四面には(一)智波羅蜜多菩薩、四隅には四の內供養等の菩薩、其の圓明の外邊には、智火光焰を旋して、空よりして降れり、其の聖者等は皆頭に五智の如來の冠を戴せ、各の本印契を執て半跏にして坐したまへり、其の慈氏等の尊は亦た上に說くが如し、左の手に紅蓮華を執りたまへり、華の上に於て法界塔印を置いて、右の手は說法の印を作す、上の如き是れなり、莊嚴上の如し、想へ已て便ち本尊を迎請せよ。請本尊の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭嘲引二合俱捨躭急重呼一

其の手印の相は、智定の二手を以て各〻金剛拳に作て、二の風幢を竪て、智の腕を以て定の手の腕の上に置いて外に向へ(二)鉤形に作れ、而して此の印を作し已て、明を誦すること一七遍して三たび召請せよ、既に來赴を蒙りなば、次に道場に請し入れよ。

請入道場の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭羅二合簸捨虎斛二合一

其の手印の相は、智定の二手を以て金剛拳に作て、二地輪を竪て二大空を交へ結べ、

(一) 智一本に四の字に作る。

(二) 鉤形に作れ此の句下に一本に「地輪交へ結び」の句あり。

右を以て左を押せ、既に請入し奉り已て、明を誦すること一七遍して、便ち尾曩夜迦を辟除せよ、三昧耶を示して請に依て住せしめよ、請住の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭囉二合健引吒惡一鈴

其の手印の相は、智定の二手を以て金剛拳に作て、二地輪を竪て二大空輪を屈して、雙べて掌中に入れよ、上來の發請より乃至歡喜し堅固に住せしめ、眞言一七遍せよ。

堅固の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭囉二合塞普二合吒一鐵

其の手印の相は、智定の二手を(一)相ひ拍ちて、便ち堅固の印となる。次に本尊に灌沐し及び己身に灌頂すべし、眞言に曰く、

鄔斛二合蹉躭囉二合(二)帖迦姹一

其の手印の相は、智手の水輪を以て大空輪と相ひ捻せよ、餘の輪は直く竪てゝ水器の上に按せよ、本尊に沐浴したてまつると想へ、印を以て尊及び己身の頂上に灑ぎ、遏囉伽二合香水を奉獻せよ、本尊の頂に灌ぐと想へ、此の印を用ひ並に眞言を誦せよ、三七遍。

(一) 此の處に一本に以ての字あり

(二) 帖尊勝の軌に諾に作る。

(一) 昧怛唎也 慈氏の梵語なり。

(二) 摩 若しは此の字剩れるか。

(三) 二 一本に一の字に作る。

(四) 加持の下、一本に花の一字あり

(一)昧怛唎二合也菩薩修愈誡法奉獻本尊香花等品第二

復た次に、所有る水陸所生の香花●寶燈●塗香●末香●燒香●散花等、各〻本(二)尊眞言を以て加持すること一七遍して、以用て奉獻せよ。先づ燒香を奉じ、奉獻燒香の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭羅二合度閉一惡入

其の手印の相は、智定の二手を以て金剛拳に作り、其の香爐の上に按せよ、眞言を持誦して(三)二七遍を經れば、即ち眞實の香雲と成て、十方の一切世界に遍滿して、所として至らずといふことなく、廣く佛事を作す。次に妙花を奉獻せよ、奉獻妙花眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭羅二合補澁閉二合唵

其の手印の相は、智定の二手を以て金剛合掌に作り、用ひて(四)加持し眞言を誦すること一七遍を經れば、即ち眞實の寶花と成り、十方世界に滿ちて大佛事を作し、寶花三昧耶の身と成る。次に奉獻寶燈の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭羅二合你閉一入你

其の手印の相は、智定の二手を以て金剛拳に作て、二大空を豎てゝ心の上に置いて、眞言を持誦して一七遍を經べし、便ち寶燈●香燈●莽尼寶燈●蘇燈●香花燈等と成りて、十方の一切世界に遍滿して、普ねく智燈供養を獻ず。次に奉獻塗香の眞言に曰く

鄔斛二合蹉躭羅二合獻度引一虐

其の手印の相は、智定の二手を以て掌を覆せて、八輪を散し舒べて、右の手の大空輪を以て、左の大空輪の上を押し、眞言を持誦して一七遍を經れば、即ち塗香三昧耶菩薩に同じ、法界に遍周して所として至らずといふことなく、一切の諸佛菩薩摩訶薩に供養す。如上の諸の供養香●花●燈●塗香●等皆本三莽耶身に同じく、所として至らずといふことなし。

次に三寶に歸依すべし。次に出罪懺悔すべし。次に功德を隨喜すべし。次に功德常住を勸請すべし。次に母地心を發すべし。次に當さに佛の功德を讃歎すべし。次に殊勝上願を發せることを(一)讃嘆すべし。次に當さに運心供養すべし。

其の三寶に歸依すとは、云く願くは我れ今身より乃ち當さに母地道場に坐するに至るまでに、如來無上の三身に(二)歸依し上り、方廣大乘の法藏に歸依し上り、一切不退轉の菩薩大有情衆に歸依し上る(禮すること三拜す)まさに是の如く三寶に歸依すべし。

(一) 讃嘆 此の二字恐くは剩れるか。

(二) 歸依し上りの上に禮すること三拜の夾注脱するか。

其の出罪懺悔とは、云く無始より已來、乃ち今日に至るまでに、煩惱に覆纏纏せらる。又た生死に流浪して三種の業障、罪を造ること無邊なり、今日誠心に發露懺悔す、まさに廣く懺して罪をして滅せしむ（禮すること三拜す）

功德を隨喜すとは、云く三世の如來及び諸菩薩、衆生の爲めの故に無量の功德を修して、所有の功德を我れ當さに隨喜し上る（禮すること三拜す）

常住を勸請すとは、云く唯願くは諸佛久しく世間に住して、愈誡理趣無住(一)空囉二合に依りたまへ、復た大法輪を轉じて十方淨土に遍したまへと請し上る。

母地心を發すとは、今日より始めて乃ち當さに正覺道場に坐するに至るまでに、誓て無上大母地心を發し、誓て無量の諸の有情類を度して、皆生死の(二)苦海を免離せしむ、今發す所の心復た當さに我法の二相を遠離すべし、我法平等にして自性なぎが故に、まさに知るべし是れ母地を發すなり。眞言を以て加持して、母地心をして、堅固不退ならしめよ。母地心不退堅固の眞言に曰く

鄔(ボウ)仡(シツタ)二合母地質多一(ボタハ)幕怛(タヤ)簸二合(ダヤ)曩夜引弭

其の手印の相は、智定の二手を以て合掌金剛に作して、發母地心の眞言を以て、加持

(一) 空囉　梵語か又た二合の注未詳尊勝の軌に無住涅槃といふ、更に考ふべし。

(二) 苦海　一本に大苦海を作る。

して誦すること一七遍す。

次に當さに(一)讚歎すべしとは、云く讚歎の眞言を誦して曰く

迦上(キヤ)莽擺(マラ)(二)墓佉上(ボキヤ)一迦上(キヤ)莽擺(マラ)虜引左曩二(ナウ)迦上(キヤ)莽擺(マラ)引薩曩平(ナウ)三迦上(キヤ)莽擺(マラ)訶薩跢(カサタ)二合四迦上(キヤ)莽(マラ)引婆(バム)鉢二合五莽(マ)顎(ニキヤ)迦上(キヤ)莽擺(マラ)上迦上(キヤ)莽擺(マラ)糝婆(サンバム)蹉(バ)六薩迦(サキヤ)二(ニ)擺(ラ)莽擺(マラ)訖灑(キツシヤン)二合引擺(ラ)七納(ナウ)啥(ボ)斯(ソト)觀二合上は入底(ナイ)八聲に呼ぶ

次に當さに勝上願を發すべしとは、云く願くは諸の衆生をして、財寶に多く饒にして(四)悲んで常に智慧を勇施し具足し、常に大忍を懷いて善の因緣を作り、宿命智を得て有情を悲念せしむべし。願くば諸の衆生所生の處に、是の如くの種種の勝事を獲んと。次に當さに運心供養せよ、心を以て運想して、水陸の諸花は主の所攝なくして虛空靈十方界に遍滿し、及以び人天上妙塗香海雲●燒香海雲●燈明海雲●幢幡●寶蓋●種種の皷樂●歌舞伎唱、眞珠の羅網、諸の寶鈴を懸け、花鬘●白拂、微妙の(五)磬●鐸●寶繩●羅網●如意寶珠●衣服の雲、天の諸の厨(六)膳上、妙の(七)香美なると、宮殿樓閣寶柱莊嚴し、(八)天の諸の嚴身(九)頭冠瓔珞、是の如くの愈(ユ)運心虛空に遍滿して、至誠心を以て是の如く供養する、最も殊勝なりと爲す。是の故に行者、定心を以て此の法を行じて運心供養せよ。眞言を誦持し及び手印を作せば、上の想ふ所の如く皆悉く成就す。運心普通供養眞言に曰く

(一) 讚歎　如意輪と全く同じ、即ち是れ同躰なり。

(二) 墓　一本に墓に作る。

(三) 莽嚩　一本に墓嚩に作る。

(四) 悲　一本になし。

(五) 磬　鈴なり。

(六) 膳　一本に饍に作る。

(七) 香美　一本には氣に作る。

(八) 天の諸嚴　一本に此の句なし。

(九) 頭冠瓔珞　一本に頭冠瓔珞を具しとあり。

(十) 運　一本になし。

(一)一　恐くは衍字ならん。

(二)持誦　一本に此の下に本尊の二字あり。

(三)色　一本になし。

(四)法界手印　以下慈尊に三箇の印あり、今は其の一なり。

(五)火輪の上節　樽尾上人の口に云く、是れ本を以て上とするか。即ち指の節の文なり。

(六)即ち成ず　一本になし。

鄔(ウム)𠻝(ケン)二合薩囉(サラバ)𠻝(ケン)二合他欠(タケンウ)鶻捺(ギヤ)蘖(ギヤ)二合底薩(ハ)巨(クイマム)二合囉(ラ)𠻝(ケン)三合𠻝(ギヤギヤナウケンソハ)𠻝(ギヤギヤナウケンソハ)二合引賀(カ)

其の(一)一手印の相は、智定の二手を以て金剛合掌に作て、頂上に置いて此の眞言を誦して一七遍を經よ、即ち諸の供養の具を成就す、眞言及び手印を以て身の五處を護せよ。又た手印の上に於て一の寶蓮花を想へ。花の上に普通供養の種子の字を想へ、点撿字是れなり。上に想ふ所の如く一一皆此の一字より流出す、印を以て頂上に置き、字を想ふて黄金色に作せ、五大色の光明を放つ、供養種子字門と名く。

慈氏菩薩修瑜𠻝法(二)持誦眞言品第三

若し慈氏菩薩の速かに悉地を證せしめ、肉(三)色身を變せずして面(オモテ)り慈氏を視たてまつり、摩頂授記せられて無生忍を悟り、普現色身三昧に入ることを求めんと欲せば、昧怛唎二合也菩薩の法界の印を以て、本尊及び己身の五支を加持せよ、便ち慈氏の眞體とならん。(四)法界手印、曰く二の地水輪を掌中に交へ叉へて、二の風幢を以て各〻火輪の背に在て、頭(ツム)をして火輪の甲の下に著けしめよ、二の大空を以て竪てゝ二(五)火輪の上節の文を捻せよ。其の二火輪は相ひ離るゝこと一寸半許して、二空輪を開いて來去せよ、(六)即ち成ず。又た慈氏菩薩の法身印眞言を以て本尊及び愈𢡟者を加持せよ。五

(一)支　一本に處の字に作る。

(二)文の下、一本に間の字あり。

(三)唎　一本に唎に作る。

(四)大悲　一本に大慈に作る。

(五)魄　一本に魄に作る。

(六)弩蘖多　一本に𣪍蘖𣪍に作る。

(一)支を加持せよ即ち清淨法身となる。慈氏菩薩の法身の印は、曰く地水二輪を以て相ひ叉へ屈して掌中に入れよ、二火輪を開いて二風輪を竪てゝ背(セナカ)に相けよ、二空輪を屈して雙べて火の中の(二)文を押せ、火開くこと一寸半許りにして、風幢を以て來去せ、即ち是れ慈氏菩薩の法身印なり。慈氏菩薩根本眞言に曰く

納𠻝引三合唎(ナウボ)(ラタン)怛羅(ナウ)二合夜(タラ)引耶(ヤ)一納莫(ナウマク)阿哩(アリヤ)也二合引𠻝盧(ロ)引吉底(キ)濕(ライシツ)𠻝(バ)二合羅(ラ)上引耶(ヤ)二母(ボウ)引地(デ)薩(サ)怛(ト)𠻝(バ)二合引耶(ヤ)三莽(マカ)賀(キヤ)薩(サ)怛(ト)𠻝(バ)二合引耶(ヤ)四莽(マカ)賀(キヤ)迦(カ)上引噜(ロ)嚩(ニ)迦(キヤ)上引耶(ヤ)五(タ)怛(ニヤタ)涅(ネ)他(ヤ)六(タム)鄔(ウム)𠻝(ケン)二合妹(マイタ)怛(リ)唎(ライ)二合妹(マイタ)怛(リ)唎(ライ)七妹(マイタ)怛(リ)囉(ラ)二合縛(ナウセイ)八妹(マイタ)怛(ラ)囉(ラ)二合縛(サンバ)婆(ビヤ)上戲(ビヤイ)九妹(マイタ)怛(ロ)噜(ニ)二合納(ナウ)婆(ビヤ)上二合(バム)𠻝(ケン)十莽(マカ)賀(カ)縛(サンバ)莽(マヤ)也薩(サ)𠻝(バ)二合賀(カ)十一

上の件の眞言は同じく兩印に之を用ひよ。眞言印を以て本尊の五支、及び愈𢡟者の五處を加持せよ、即ち法身と成る、然して後に大慈生心三昧耶に入れ、眞言印即ち是れ本尊の體なり。

次に本尊慈氏菩薩を觀せよ、發生普遍(一)大悲心三昧耶に住す。眞言に曰く

納莽縛(ナウマクサンバ)滿多(マンダ)𣪍駄(ボダ)引隬(ヤ)一過(ジ)(五)魄單(タンザ)𣪍耶(ヤ)二薩(サ)囉(ラ)𠻝(バ)二合薩(サ)怛(ト)𠻝(バ)二合引捨(シヤ)也(六)弩(ド)蘖(ギヤ)多(タ)三薩(サ)𠻝(バ)引合賀(カ)四

其の心手印の相は、智定の二手を以て虛心合掌して、二風輪を以て屈して二火輪の下に在(ヲ)け、餘は舊(モト)のごとし、印を以て五支を加持せよ、即ち慈氏菩薩の眞身となる。印

を以て本尊及び愈願者の五處を印す、然して後に數珠を執て合掌し頂戴して、兩手を心に當て珠を執て念誦して、本尊を觀せよ、心上の圓明の中に本尊の眞言の字を布列せよ、一一分明にして皆火光を放つ、日を逐ふて之を轉せよ、下の圖の如し。𑖭遏字を觀せよ、變じて法界塔となる、圓明の中にありと。また塔を轉變して慈氏本尊の身となる、即ち此の尊の身は即ち是れ愈願者の身なり、是の故に三密轉じて三身となる、故に(一)心を以て心に置き、心を以て心を觀じて(二)實の如く自心を知る、(三)即ち是れ母地心なり、初發心の時に便ち正覺を成ず、此の心發る時に便ち(四)普現色身三昧耶身となる。是の如き心に住して字輪を安布せよ、字輪を輪轉すること了了分明にせよ、愈願者の口より一一の眞言の字を出して、本尊の(五)心月輪の中に安布し、本尊の心圓明の中より眞言の字を流出して、愈願者の頂上より入て、諸の手孔に遍して甘露乳光三昧耶を流出せよ、即ち此の三昧耶變じて大圓明となる、修愈願者の其の中心に在け、是の如く之を觀じて限せよ。先づ圓明の中心に𑖭遏字を觀せよ、種子と名く、即ち是れ本尊の身なり。然して後に眞言を誦し、或は己身は即ち是れ本尊なり、大圓明の中に坐せりと觀せよ。自心の上に復た圓明を置いて、上の如く眞言を安布せよ、輪轉して漸

(一) 心を以て云云　是は行者の心蓮(理)を以て本尊の心月(智)に置くなり、本性に約して任運に成就する義。

(二) 實の如く等　行者平等の智身なり、理智不二の心を知るなり。

(三) 即ち云云　拂の邇一切身なり。

(四) 普現色身三昧耶身　加持受用身。

(五) 心月輪　一本に心圓明の三字に作る、

く廣大にして、法界に遍周して一體性となせ、愈願者の心圓明の中より遏字を流出して、本尊の心圓明の上に入て、本尊の心圓明の上より𑖭遏字を流出して、愈願者の心中に入る。是の如く漸漸に澄濾して即ち同一體なり。一一の字皆(一)諸の戒定慧解脫三昧耶の形像となる。又た本尊の心圓明の上の𑖭遏字變じて本尊の身となる、修愈願者の頂上を觀せよ。又た修愈願者の心圓明の上の𑖭遏字變じて修愈願者の身となる、本尊の頂上に觀せよ。是の如く展轉して法界に周遍して、無盡法界普現色身三昧耶身となる、眞言輪を以て安布し輪轉して、乏極に至るまで常に是の如くの觀をなせ。若し念誦畢らんと欲せば、漸漸に少くして、復た本身に還て、眞言印を以て五支を加持せよ、然して後に復た初めより香花遏囉伽(二合)等を供養し、眞言手印一一法の如く次第せよ、廣く發弘誓願出罪廻向等をなし、一ばら初の如く方便に依て廣く發露懺悔等をなし、力を盡して作し了れ、然して後に意に隨て本尊を前に依て運想せよ、七寶の階道あつて、道場の所より都史陀天宮善法堂珊瑚殿上に出で、車輅を以て慈氏菩薩並に諸の眷屬を奉送せよ、無量の天衆圍繞して去ぬと。奉送本尊の眞言に曰く

鄔㘑二(一合)𑖩引𑖨二(二合)𑖩引𑖭二(二合)𑖩引𑖭二(二合)𑖩引𑖭一

(一) 諸　一本に諸佛に作る。

(二) 𑖭　一本に𑖭に作る。

其の界を解し本尊を送り上る印とは、智定の二手を以て相ひ叉へて、金剛拳に作りて頂上に向つて解散せよ、是れ能く結界せる所を之を解し、亦た能く發遣を成辨し、本尊等を奉送したてまつると名く。意に隨つて本尊を送り已て、重ねて更に道場を結護し、兼ねて己身を護り印せよ。又た略して己身を觀じて本尊の身となして、大圓明の中に於て住し坐せよ。復た自心圓明の中の𑖦遏字を觀せよ、無生の義、若し乏困しなば(一)復任に道場に出でゝ諸の事業をなせ、(二)木を以て塔を印し沙を印し水等を印せよ、或は像を浴洗し(三)人十事を接ぎ、(四)三乘たる昧怛囉二合也經及び慈氏本願經(五)大鉢囉二合𑖭經を轉讀したてまつること、乃至本尊の法等毎日の三時に念誦し作法し、觀行等の事をせよ。三時といふは後夜より齋時に至り、午時より未時に至り、初夜より三更に至るなり。常に作すこと是の如くして間斷することを得ざれ、(六)即ち障を生ずるなり。所説の眞言に八種の義あり、一には眞如の性一體の義、謂はゆる無生無滅、無來無去、離言離相、言語道斷、心行寂滅にして本來淨の故に。二には想に隨て流出し相成する義、何を以ての故に、性淨を以ての故に、應化相應の義の故に。三には加被護念の義、何を以ての故に、四種の不可思議力を以ての故に、謂はゆる業力・佛力・眞言

(一) 復一本に「然して後に」に作る。
(二) 木を以て云云謂く地水火風空は即ち是れ印佛の法、五大みな印すべきなり。
(三) 人十事詳にせず更に驗すべし。
(四) 三乘經上生經・下生經等是れなり。
(五) 大鉢囉等大般若經。
(六) 即ち云云此の句の上に間斷の二字を脱するか、無きも通ずべし。

力・藥力等護念し成就ず。四には諸の衆生の所求の不同に隨ふ義、何を以ての故に、本願は神藥の服するに隨て念に應じて成就するが如くなる故に。五には慈悲の義、何を以ての故に、慈悲此の法を證するが故に。六には佛の願を以て有情を度する義、(一)何を以ての故に、心に隨て像に應ずるが故に。七には諸の菩薩を以て有情を度する義。八には一切諸佛(二)不思議の義、何を以ての故に、眞言の不思議力亦た無上不思議の果を成ずるが故に。恒に八義を具せり。常に眞言如意法に順じ、寶珠の如きの所求皆な得、有相無相の悉地皆成就することを得るが故に、(三)是の故に名けて眞眞如以無言如の相は是れ眞言なり。手印相とは謂く誓敎の法なり、即ち國王の勅して印文を(四)級し驗するに、所行の處に隨て人の敢て違乖することなきが如く、此の如來の誓敎の法印を承くることも亦た復た是の如し、一切の凡聖及び諸の天龍・惡魔・鬼神皆違越することなきが如く、此の如來の誓敎の法印と能はず。又た復た奉勅の、一人をして去らしむるに愆過ありと雖も、進止を奉はるを以て、人の敢て違することなきが如く、此の如來の敎勅も亦た復た是の如し、慈氏甚深の法印は諸佛の敎に等し即ち凡夫に在りて知らず覺らざるを以て、少分法に順せざる處ありと雖も、此の法力を以て請聖加被して漸く煩惱を離る、此の法印に隨て

(一) 何を以ての故にの下、一本に「大を修するを以て」の句あり。
(二) 不思議一本に不可思議に作る。
(三) 是の故に一本此の句なし。
(四) 級一本に及に作る。

所作の處に隨て乃至諸佛及び(一)諸佛の金剛、必ず敢て違越せず、何に況んや天人諸の鬼神等をや。復た次に此の法は神藥樹の、觸れ及び取るに隨て即ち諸の病を離れ、及び身、空に騰て飛び往くこと、意に隨て自在なるが如く、此の法も亦た然なり。法力の加被を以て同じく自在を證すること聖本尊の如し、是の故に名けて法敎印と爲すなり。復た次に若し善男子善女人有りて、若し此の法印に依て行持し供養せば、此の生より已乃(ノチ)し成佛に至るまで、永へに(二)下道を離れて所生の處に更に三惡道處に墮落せず、法印の加被を以ての故に恒に護念を爲(かうむ)り、煩惱を斷じ漸く彼の岸に(三)證らしむ。

(一) 諸　此の字一本になし、最もよしとす。

(二) 下道　下部か

(三) 證　一本に登の字に作る。

(四) 青龍寺　云云一本になし。山林一本に東塔に作る。

(四)青龍寺山林院一切經

昧且唎二合也菩薩略修愈誐入法界五大觀門品異本卷上上の青龍寺の九字此の下の與注

大中九年九月五日、長安城右街龍興寺に於て淨土院雲居禪知房、左街青龍寺法全阿闍梨に請ふて本抄を寫し並に勘定す、日本國求法沙門圓珍記す。

國譯慈氏菩薩略修愈誐念誦法卷上　終

國譯慈氏菩薩略修愈誐念誦法卷下

(一)青龍寺山林院一切經

大興善寺沙門三藏善無畏　詔を奉じ譯す

持誦本尊眞言法品第四

復た次に此の法の不思議力は如意寶の如く、如意寶は所言なしと雖も、所願の處に隨て必ず願に違せず、此の如來の法印も亦た復た是の如し、無言無相なりと雖も、一切の法を作すに必ず成就を得、此れ是の法力の不可思議なる故なり。

復た次に此の法若し奉持する者、凡夫に在て煩惱を斷せずと雖も、法力を以ての故に、所作の處に隨て彼の聖力に等しうして、諸の賢聖及び諸天龍八部、一切の鬼神を駈使するに、皆敢て違せず、法印の力(チカラ)(二)不思議なるを以てなり。

復た次に此の法、所行の處に隨て、或は己身を印すれば彼の本尊の身となる、或は他身を印するに亦た他身に隨て作すに隨て成す、譬へば拙人の手に諸佛菩薩の印を執て於、(三)泥沙及び(四)皇等を印するに皆諸佛菩薩の像となり、印するに隨て諸の形像となる

(一) 青龍寺等　一本には題下の夾注とす。

(二) 不思議　一本に不可思に作る。

(三) 泥沙　一本に「泥土沙乃至水」に作る。

(四) 皇　若しは旦字か。旦は通じて壇に作る。

が如し、此の法印の力も亦た復た是の如し、悉地を得ずと雖も、諸佛の法即を執るの力を以て、教に依て行ずれば便ち本法を成ず、若し法界印を執て己身を印すれば、即ち本尊慈氏の眞言の體となる、若し駭嚕左曩法印を以て己身を印すれば、亦た駭嚕左曩の身となる、乃至諸菩薩莽賀薩埵の諸の天龍八部乃至人非人等の身に(一)生ずべし、印する所の相に隨て即ち本身と成る、己を印し他を印すれば皆本體三昧耶の身と成る、凡愚は見ずと雖も一切の聖賢●天龍八部●諸鬼神及び尾那夜迦は皆本尊の眞身を見る、諸の護法明王等、此が爲めに親近して、俱に助けて悉地を成せしめ、速かに成就を得しむ、若し持眞言者若し見聞覺知せん者、乃至供養親近し承事し伴侶たらん等の者は、即ち一切諸佛及び、諸の賢聖を供養するに同せん、是の如く眞言及び契印等の法は、具さに陳ぶべからず、一劫二劫乃至無量劫に說くとも盡すことあたはず、若し修愈(二)以等、此の法印に依て、供養し持誦せば、香花飲食、所供養の處に隨て、諸佛の淨刹、諸の天龍鬼神等、諸の有情の類、彼の運心に隨て亦た印法に順じて必ず悉地を得ん、此れに準じて供養すれば、必に隨ひ印に順じて彼の事を成せしむ、是の如く應さに知るべし(三)一切の行六度萬行及び四無量心●七覺分●八聖道分及び諸の八萬四千恒河

(一) 生ずべし　此の句は「成る」の語の替りなり、

(二) 以等の下、一本に心の字あり、最も可。

(三) 一切行の下、一本「行の」二字あり。

沙の法門に同じ、所作の處に隨て即ち彼の印に順じて即ち彼の法を成ず、是の故に此の法印は義信じ難く解し難し、佛菩薩の能く知る所をば除く、且らく不動明王の刀印を論ぜば、左の手は女に應ず、三昧に相應す、慈悲(一)相義なり、右の手は男に應ず智慧に相應す、善惡を簡擇す、雄猛の相の義なり、左の手の智慧の刀を將つて左の手の三莽地門の鞘に入れて印を成さしめ、所印の處に隨て法事の諸度門等を成せしむ、是の如く眞言の印契は劫を窮めて說くとも盡す可からず、唯し佛と佛とのみ乃ち能く之を說きたまふ、祕密主菩薩も亦た之を知ること能はず。

慈悲菩薩修愈誐法畫像品第五

復た次に我れ今略して愈誐を說かん、速かに悉地を成就することを得んと欲はゞ、必ず順らく知法が畫像の人をして、三昧耶灌頂を與受すべし(二)出入し澡浴して新淨の衣を著し、白氎及び細布絹乃至綾帛を取り、極めて淸淨ならしめ、龍腦香の末を以て麝香膠香水に和して之を洗ひ、且らく所用の彩色皆龍腦香を和せよ、及び香膠之に和せよ、皮膠等を用ふることを得ず、大小は意に任せよ、吉宿の直日を取れ、鬼宿を勝となす、上の如くに依て像を造て悉地を求めば必ず成就を獲ん、心を至さざるをば除く、

(一) 相義　一本に想義に作る。

(二) 出入　大小便利なり。

圖は左の如し、其の畫像は白氎布絹等を取て意に隨て大小にせよ、亦た價を還すことを得ず、中心に大圓明を畫け、大圓明の中に就て更に分ちて(一)井となし、中心に五の圓明をせよ、四隅に四の半月を畫く、圓明の中間に十二金剛を用ひて道を界へ、一ら常の法の如くせよ、金剛の頭上ごとに(二)窣覩二合婆法界の印を安せよ、中心に本尊慈氏菩薩を置け、首に五如來の冠を戴けり、左の手に蓮華を持ちたまへり、華の上に於て法界塔印を置く、右の手に說法の印に作て結跏趺坐したまへり、本尊の右の圓明の中に於て事業波羅蜜多菩薩を畫け、左の圓明の中に七寶波羅蜜多菩薩を畫け、前の圓明の中に法波羅蜜多菩薩を畫け、後の圓明の中に金剛波羅蜜多菩薩を畫け、東北隅の半月の中に花波羅蜜多菩薩を畫け、東南の隅の半月の中に燈波羅蜜多菩薩を畫け、西南の隅の半月の中に(三)香波羅蜜多菩薩を畫け、西北の隅の半月の中に燒香波羅蜜多菩薩を畫け、又た大圓明の下右邊に降三世明王を畫け、半月輪の漫拏羅の中に身色奥青なり、三眼四牙あり大瞋怒の(四)形なり、左の脚を屈して前に向へ、右の脚を拽て後に向へ、輪の中に於て走る勢の如くせよ、四臂あり兩手に(五)三昧耶心鉤印を結して胸心の上に向へよ、左の手をば曲げて耳の上に向へよ、金剛鉤斧を(六)把れり、右の手は直く

(一) 井となし心中の四中に界なせ、田の如くす。
(二) 香 一本に塗香に作る。
(三) 形 一本に狀に作る。
(四) 三昧耶心鉤印降三世の根本印。
(五) 把 一本に抱に作る。

頂に向へて峻く下げて五股蹴(一)躭囉二合を把れり、周旋して火を生ず、首に五智の冠を冠むり閉口す、左邊には三角形の漫荼羅を畫き、中に於て不動尊を畫く、頂に七髻あり、一(二)髮を垂れ左耳輪に於てし、右邊の脣を咬へたり、左の目を怒らし開いて右の目稍〻合するに似たり、頭稍〻低れて右に向へて跏趺坐せり、盤石の七寶金山に半せり、右の手に金剛刀を把て周旋して三昧の火焰を生せり、右の膝の上に(三)屈して、左の手は臂を屈して外に向へて金剛索を執り、身の上に周圍して三昧の火焰を生せり、上件の二明王天衣●朱裙●瓔珞●環釧●白帶を以て莊嚴せり。又た兩の明王の中間に香爐寶子を畫け、右の三世明王の下に圓明を畫け、中に於て修愈譏者を置け、踞跪して手に(四)燒香爐を執り、大圓明の上に於て七寶の傘蓋を畫け、兩邊に各の三箇の首陀會童子を畫け、半身五色の雲中に(五)滿てり、香花爐塗瓶花枝等を以て佛の上に散ず、畫像の法(六)上の如く一一に皆、本印契を執るの形狀色貌、相違せしむること勿れ。

復た次に我れ今更に修愈瞿者に、速かに大悉地を成就せしむることを說かん、故に先づ(七)一生補處の菩薩の最勝大三昧耶の像を觀せよ、號して莽賀姝怛唎(八)二合耶三昧耶といふ、亦た慈生三莽地と名け、亦た慈生三昧耶と名く、像端正微妙第一にして色瞻部

(一) 躭 一本に皆に作る。
(二) 髮 一本に髻に作る。
(三) 屈 或は居の字か。
(四) 燒 一本になし。
(五) 滿 若しは滿の字か、
(六) 上の如く一本に「上の如く畫像の法」に作る。
(七) 一生補處 大疏の意は阿字の一生なり。
(八) 二合耶 一本に地の字に作る。

洲の檀金色の如し、像を畫くこと深赤黄色なる是れなり、首に五佛智の七寶の冠を戴き、種種の瓔珞莊嚴天衣環釧●鬘花呪索●眞珠(一)緩帶●白帶●髮袋等なり、大圓明の中に於て大なる(二)百寶蓮花を畫け、蓮花の上に於て結跏趺坐して三昧に入て疑定せり、面貌慈輭にして笑を含み、三十臂を(三)具せり、各〻寶蓮花を執り、蓮花の上に於て皆本印契を執り、各〻三昧耶を表すること不同なり、種種の身光あり(四)頂背も亦た爾なり、初に左の第一の手には蓮花を執れり、法界塔印を畫け、右の第一の手は金剛拳を執れり、風幢を舒べて右の頰を指して至らざらしむること三分許りにせよ、次の左の第二の手は蓮花を持せり、蓮花の上に於て竪て七寶の金輪を畫け、次の右の第二の手は金剛拳に作れ、亦た風幢を舒べて横に三股蹴(五)杵羅二合を旋弄せよ、次に左の第三の手は右の手に準じて竪に立股金剛杵を旋弄せよ、右の第三の手には金剛鉤を執り、次に左の第四の手は蓮花を執り、蓮花の上に於て金剛羂索を置き、右の第四の手は倒に寶螺を畫け、五股杵を旋弄する形の如くせよ、次に左の第五の手には寶幢幡を持し、右の第五の手には蓮花を執り、蓮花の上に於て七寶の宮殿を畫け次の左の第六の手には數珠を執り、右の第六の手には蓮花を執り、蓮花の上に於て羯磨金剛を置け、次の左の

(一) 緩 一本に綬の字に作る。
(二) 百 一本に百種寶とす。
(三) 具 一本になし。
(四) 頂 一本に項の字に作る。爾は耳の字に作る。
(五) 蹴 一本に飯に作る。

第七の手には蓮花を持す、蓮花の上に於て寶金剛を置く、右の第七の手には蓮花を執り、蓮花上に於て法金剛を置け、次に左の第八の手には蓮花を持す、蓮花の上に於て如來毫相三昧耶を畫け、右の第八の手には蓮花を(一)執り、蓮花の上に於て如來眉形三昧耶を畫け、次の左の第九の手には蓮花を執り、蓮花の上に於て如來鼻三摩地の形を畫け、次に左の第十手には如來耳根三昧耶び三莽地の印を執持し、右の第十の手には蓮花を持し、蓮花上に於て如來舌根三昧耶を畫け、次の左の第十一の手には如來口三莽地を持し、右の第十一の手には蓮花を持し、蓮花の上に於て佛心三昧耶を畫け、次の左の第十二の手には蓮花を(二)執り、蓮花の上に於て如來馬陰藏三摩地を畫け、次の左の策十三の手には蓮花を持ち、蓮花の上に於て如意摩尼を畫け、右の第十三の手には如意捧を持す、次の左の第十四の手には如意寶劒を執り(三)右の第十四の手には如來寶鏡を執る、次の左の第十五の手には蓮花を執る、蓮花の上に於て寶師子を畫け、右の第十五の手には金剛杵鐸を把る。已上是の如くの三十手皆金剛拳を以て寶蓮花を執る(四)蓮花の上に於て印契を置く、皆天帶を繫げ、光焰之を繞せり、及び天衣を以て種種に像を莊嚴せよ、

(一) 執 一本に持の字に作る。
(二) 執 一本に持の字に作る。
(三) 右 一本に「次に右の」に作る。
(四) 蓮花 一本に金剛蓮花に作る。

(一)賀　一本に賀の下に味の字あり。

(二)大漫拏羅品　此の品は三重の壇を說く、即ち中心は圓壇、外の二重は方壇なり。

(三)母　一本になし。

(四)葬　一本になし。

左右に皆十鉢羅二合(ジヤウ)譚波羅蜜多菩薩を畫け、前後に復た內外の八供養菩薩等を畫き、各の本契を執て圓明に住して、皆慈氏本尊に向つて恭敬する相にせよ、上下の諸の莊嚴供養の具、並に持眞言者を畫すること皆常の法の如くせよ、我れ已に略して葬(一)賀怛唎二合耶三昧耶の像法を說き竟んぬ。

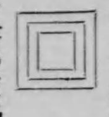
復た次に更に入三葬地を說かん、一尊慈氏の像を省略す、一幅の絹を取て圓明を畫き、圓明の中心に於て本尊慈氏如來を畫け、結跏趺坐して三葬地に入る形の如くす、兩臂あり、又た手掌に從て一の寶蓮花臺を持す、蓮花臺の上に於て薩嚕左曩佛塔を畫き、佛塔の上に於て大日如來を畫け、通身に寶光あり、皆光中より又た諸佛世尊を化出せり、鉢羅二合譚佛母菩薩の像の如し、諸佛を以て光となす、上下の莊嚴一(ちつぱ)ら前の如く、同じく像に對し持誦して速かに悉地を得。

慈氏菩薩略修愈誐(二)大漫拏攞品第六

復た次に我れ今、妹怛唎二合耶の法を修して、速かに大悉地を證得せしめんがために、是の故に略して悉地漫拏攞の法を說かん、先づ吉宿直日、本法と相應せるを簡擇して勝地を撰び取り已て、平治して淨土を取て塡實平正にして、瞿(グマ)葬(ミ)母移(ボイ)及び瞿(グマ)(三)葬母

若し八肘の者は四肘を以て兩邊となし四肘を中心となす、兩邊各更に分ちて二院とす、各院に於て更に分ちて三道となす、尊聖、供養位、來往道是れなり。第二院は外より白黃赤を畫いて之を圍む、三學三身、第三解脫の義なり、第三院の最外には白黃赤黑を以て圍む、是れ五智五分五輪五部の義。

(一)若し八肘云云



(二)聖　一本には此の字の下に位の字を存す。

(三)蜜　一本に蜜多に作る。

怛囉二合(タラ)を以て、並に沈水香末水に和して加持して而も塗り、乾き訖て次に龍腦鬱金香を取て、相和して眞言を以て加持して更に中心に塗れ、皆眞言を以て加持して十肘量り取れ、或は八肘五肘乃至最勝四肘にせよ、右し十肘なる者は五肘を中心の圓明となし、五肘を分ちて兩邊とせよ、(一)若し八肘の者は四肘を取て兩邊となし、四肘を中心の圓明となせ、若し四肘ならば二肘を分ちて中心となし、二肘を分ちて兩邊とせよ、外の兩院の(二)聖是れなり、また四面の二肘を分ちて兩院となす、中心の大圓を又た更に分ちて九の圓とせよ、圓の中每に各の佛菩薩等を畫け、其の中心更に分ちて九圓となし、中心及び四面の四圓に於て本尊及び四面の四圓に於て本尊及び佛を畫け、中心とせよ、各の四波羅(三)蜜等の菩薩あり、半月輪には各の四供養菩薩を畫いて、最中心には本尊をかけ、四面には四波羅蜜をかけ、四面の四圓には四方の佛をかけ、各の本部に依て四智波羅蜜菩薩をかけ、四隅には四の內供養をかけ、四圓には各の四部に依て四印の母地菩薩をかけ、四隅には四方に隨て本部四攝及び外供養印を畫け、八金剛を以て道を界へ、金剛界の道の上(うへ)ごとに法界塔印及び八の寶瓶等を畫け、一(ちつぱ)ら如常(よあつね)に依て鮮花を以て之に挿め、また第二院を分ちて三道とせよ、第三院も亦た此の如くし兩院に

(一) 食　一本にな し。

(二) 主　恐くは衍文か。

(三) 五輪　一本に五輪金剛に作る。

(四) 又　一本にな し。

界道あらしめ、外より第一には位を安して聖象を坐せしめよ、第二位には一食飲食等を下し之を供養する位なり。第三院分ちて案行食を行く來往の位道を作し、第二院には外より白黄赤の三道を畫いて之を圍し、(一)三の戒定慧の義を表す、亦た是れ三身の義、亦た是れ三解脱の義なり、第三院の最外には白黄赤青黒の五道を之に圍らす、五智の義を表す、亦た是れ五分の義、亦た是れ(二)五輪の義なり、亦た是れ五部の義なり、前に通じて八解脱の義を成す、中胎は十一地方便爲究竟智遏字の義を表す、第二院の直東に駭嚕左曩如來を畫き、左邊には虛空眼三蕣地菩薩を畫き、右邊には如來毫相三蕣地菩薩を畫け。また左邊には妙吉祥童子菩薩を畫き、右邊には普賢菩薩を畫け、又た左右に八大佛頂輪王を畫け、各の位地に依て之を畫け已上の十二尊の位、法の如く之を畫け。北面の直北には觀自在王菩薩を畫き、左には得大勢至觀自在菩薩を畫け、右には部母白處尊觀自在王菩薩を畫け。又た左邊には忿怒觀自在王菩薩を畫け、右には隨心觀自在王菩薩を畫け。又た左に一髻觀自在金剛を畫け、右に馬頭觀自在金剛を畫け、(三)又た左右に分ちて七吉祥觀自在菩薩を畫け、各の次第に依て法の如く之を畫け已上十三位を畫するも法の如く之を畫け南面に執金剛藏王祕密主菩薩を畫け、左に金剛母菩薩を畫け、左に金剛鉤菩薩を畫け、

(一) 東方天　一本に曰く此の下に持國天の三字あり。

(二) 七曜　四方に七曜二十八宿を畫け、胎藏の外院もまた倣なり。

左に金剛拳菩薩を畫け、右に金剛甲菩薩を畫け、左に金剛鏁菩薩を畫け、右に金剛槊菩薩を畫け、左に金剛鈴菩薩を畫け、右に金剛忿怒月黶王菩薩を畫け、左に金剛甘露瓶菩薩を畫け、右に金剛牙菩薩を畫け已上十三尊の位法の如く之を畫け

西面に門を開け、門の左邊に降三世尊明王を畫け、右に不動尊明王を畫け、千手千眼觀自在菩薩を畫け、右に如意輪觀自在菩薩を畫け、左に虛空藏菩薩を畫け、右に地藏菩薩を畫け、左に除一切蓋障菩薩を畫け、右に十一面菩薩を畫け。又た門の左右に難陀龍王及び拔難捺愈龍王を畫け、守護門者を以て各の左右に依て次第に本印を畫いて之を作れ已上八尊は一邊に四尊を置け

上の如く四面四角の空間處に四の外供養の菩薩、當部の諸明王等の尊を畫け、各の本部に依て使者法の如く安置して、次第に之を畫け。次に第三院の東面東北の角に從て大自在天王を畫け、眷屬を兼ねたり。次に南は(一)東方天を畫け、(二)七曜を以て之を圍繞せよ。次に大火德天王を畫け。次に正門に能仁天王を畫け。次に日天子を畫け、七曜之を圍繞せよ。次に東南の角に火仙の像を畫け。以西に那羅延天王を畫け。次に尾嚕茶迦天王を畫け。次に正門に焰魔法王を畫け。次に大黑天を畫け。次に鬼子母女天を

書け。次に西南の角に囉訖灑二合沙王を書け。次の北に尾嚕博訖沙二合天王を書け、七曜之を圍繞せよ。次に月天子を書け七曜之を圍繞せよ。次に門の南には水天王を書け。次に門の北に地神天を書け。次に正門には地神天王を書け。次に大辯才天女を書け。次に阿素羅王を書け。次に西北の角に風天女を書け。次に東に(一)藥單拏王を畫け。次に藥訖沙王を畫け。次に正北に多聞天王を書け。次に大功德天女を書け。次に青目天女等を書け。上の所說の如くの十方の天王衆●法界の神衆一一布列して之を書け、各の本三莽地の契を執り、形狀瞋怒喜笑せよ、慈悲柔輭等の面目なり、天衣●珠鬘●甲冑●環釧形勢一(二)看し時に臨んで四種の法の中に就て、如上の佛菩薩金剛天衆、一一に本法に依て相應して之を作し、四種の漫拏攞に隨つて方圓三角半月等、法に隨て之を作せ、其の漫拏攞の大小は意に任せて之を作れ、半を分ちて中圓となし半を兩邊とせよ、一一に次第に之を畫け。(三)又た半に於て兩邊を取て分ちて兩院とせよ。又た兩院の中に就て院ごとに分ちて三道とせよ、(四)外より第一分には聖衆を安置せよ、第二分には供養飲食香花燈塗菓子等を下せ、第三分には辨事の者食等を下げ、往來の位(五)面門を開いて(六)三方を閉ぢよ、若しは十肘已上は門は四門にせよ、寶瓶二十一箇にせよ、(七)中

(一) 藥單拏王 一本に藥單拏羅王に作る。
(二) 看 一本に首に作る。
(三) 又た云云 前頁の文と意同じ。文に望んで之を校すべし。
(四) 外 或が云く內の字か。
(五) 面 一本に西に作る。
(六) 三方以下 或本には亂脫あり。
(七) 中院には云云 具には文の如し但し最略の時も六瓶を安置すべし、中院を一瓶、門外一瓶なり。但し今時の行用は門外の瓶を略し灑水を用ひて替とす。
(一) 一本に此の處に「院の四角ごとに」の文あり。
(二) 外 一本に此の次に外二の二字あり。

院には五箇の瓶を安立せよ、外の兩院には各の八箇を安けよ、四院の角ごとに四方に各の一箇を安けよ、蠟燭も此の數に準せよ(一)香爐を安置せよ、亦た瓶の數に準せよ、蘇燈九盞を用ひて中院に安置せよ、外の兩院に各の四十九盞燈を置け、都べて九十八盞なり、菓食及び三白食の椀等、中院には九箇、外院には各の香爐の數に準じて同じくせよ、五色の綵帛を以て五方を鎭坐せよ、僊施物等の中心の五方と(二)外院各の四方四角とに之を安置せよ、本尊に食飲施物を倍加して皆加して供養せよ、所獻の物皆垢穢を辟除して、光顯淸淨ならしめて、然して後供養せよ、若し上法の供養を辨せずんば中下も亦た得、若し中の漫拏攞には印契を書き、若し下の漫拏攞には單に蓮花臺を畫き、上に種子の字を書け、若し更に事急にして廣く漫拏攞を得ずんば、(三)單に名字を書くことも亦た得たり、其の瓶廣く辨ずること能はずんば、都べて五箇も亦た得。若し五色の粉壇を造ることも亦た得、供養するには皆龍腦鬱金香の末を和して加持して作法せよ、然して後之を捻り用ひよ、餘事は上の法に準じて(四)同じくせよ。我れ已に略して慈氏の大漫拏攞の法を說くこと竟んぬ。

(三) 單に云云 梵號を書くべし、梵號の初字は種子なり、然れば梵號なかくは種子より勝れたる如きも、具備して更に勝劣なきなり。
(四) 同 一本に用に作る。

慈氏菩薩略修愈誐念誦法卷下

(一)頂上の上に一本に時瀧の二字あり。

(二)上　此の上の字、側(ホトリ)と訓して可なり。

(三)雲集一本に會の一字を加ふ。

(四)佛一本に菩薩に作る。

(五)臍一本に臍輪に作る。

(六)妳　一本、乳に作る。

(七)展　一本に展轉に作る。

我れ今略して一生補處の菩薩を觀ずることを說かん、知足天上諸佛集會に於て一生補處菩薩(一)頂上を觀せよ、十方の一切補處の菩薩の諸佛の集會も亦た復た是の如し、且らく一世界を觀じて一漫拏羅會とせよ、彌盧山頂より有頂に至り、下も金剛輪際に及ぶまでを一道場宮とせよ、知足宮を中心となし、三重にせよ、中心をば圓曼拏羅にせよ、外の兩重をば方漫拏羅にせよ、中心の第一の圓の內に更に五の圓を分ちて、四隅には四の半月をかけ、皆五尊を置け、一一の界道に寶柱を以てせよ、(二)上に法界塔印を置け、其の中に圓明の外の佛は、外に向て十方の本有法身の佛を禮し、又た大圓明の內の慈氏如來は、我が本有の法身佛を禮す。

第二院には十方の諸佛(三)雲集の像を置け、皆袈裟の角を執り印にせよ、其の(四)佛皆左の手に袈裟の角を執り金剛拳を爲て(五)臍の下に置けり、右の手は臂を曲げて(六)妳の上に向へて五指を(七)展べて掌を颺げよ、第三の院には諸大菩薩雲集の像を置け、第四の院の方壇には、十方の諸佛兼ねて菩薩及び二りの侍者、八大菩薩に各の二りの侍者、八大明王並に諸の侍者、悉地仙衆並に侍者、八大聲聞及び四大緣覺の衆を、皆本法に依て之を畫せよ、第五院には上の漫拏羅に準じて、二十八天及び諸の三十三天十方結護の天神王等を置いて、又た七曜二十八宿十二宮辰を置け、一一に本の像法に依て次第に法の如く之を畫せよ、皆本印契を執らしめよ、圖は左の如し。

(一)腰已上一本に頸已下に作る。

(二)起世經云云世界の成立、及び阿修羅の天衆を打つ等の事彼經に具さなり。

其の素名嚕山の腰には難陀拔難陀龍王を以て相ひ絞ふこと三匝を盤せよ、腰の上は天人の形の如し、頭上に九頭の蛇頭あり、(一)腰已上は天の形像を以てす、兩手合掌して仰いて天上を觀る、宮中の日天子妃、月天子妃及び五星●十二宮●二十八宿等、一一に法の如く之を畫せよ、又た三十三天能仁主王、白象王に乘じて無量の諸天圍繞せり、諸の遏素囉兵馬軍衆、又た七金山の間よりし、及び諸の遏素囉王各の諸の鬼兵を將ゐて天衆を打つ、唯だ(二)起世經論の中に具さに明せり、此には繁く更に說かず。

又た世尊、忉利天より七寶の階道を降りて、天より閻浮提に降る像をかく、四洲の王並に妃の形皆本方の如くせよ。

又た七金山の間に甘露香水等の海あり、其の中に諸聖而も居せり、又た諸の金山の中に從て皆諸の賢聖あり、地前の四十心の賢聖、十住●十信●十廻向●十行等と、大獨覺衆と並に諸の大阿羅漢衆の四果の聖人衆と、諸大龍王等の衆と、遏素囉(アソラ)藥嚕(ギヤロダ)拏(キンナ)●緊捺羅(ラ)●摩睺羅(マゴラ)伽(キヤ)●人及び非人、七金剛山の中に遍滿して、處として空間なることなし、皆

是れ宮殿なり、其の七金剛山の外と鐵圍山との間の洲と、並に諸の小洲と各各同類の眷屬あり、鐵圍山中の處處の地獄●餓鬼●鐵鳥●毒龍、山中に遍滿せり。

若し造次に大三蓁地の像を善く成就せんと欲はば、上の如くの法に依て畫し已て、作法して悉地を求めよ、持誦すること三落叉遍して、像の中心に於て大光明を放ちて、便ち愈誠者の畫像の處を抱かん、一時に空に騰つて都史陀天宮に住し、面り慈氏如來を觀たてまつりて摩頂授記せられん、若し具さに說かんと欲はば、劫を窮むとも盡きじ、我れ今已に略して說き、一生補處慈氏菩薩集會灌頂壇法を觀じ竟んぬ。

慈氏菩薩修愈誠護摩品第八

復た次に我れ今略して四種の念誦を說かん、及び護摩等の法次第等略說せん、前に準じて本尊の眞言を念誦すること法に依れ、一一法則に違せずして三落叉遍を滿せよ、落叉數に至るごとに更に加へて如法に供養せよ、三十萬遍の數滿し已んなば即ち(一)境界を祈れ、即ち本尊の指授を得ん、四種の念誦を作せよ、其の四種の念誦とは、初夜には除災の念誦をなせ、眞言の上下ごとに薩(ソ)嚩(ハ)賀(カ)の二字を加へよ、中夜には降伏諸魔の念誦をなせ、眞言の初夜ごとに虎(ウム)吽(ハッタ)合發(ハ)吒(タ)音の三字を加へよ、後夜より明日(あくる)の出

(一)境界を祈れ　好相のこと。

の時に至るまで、號して增益の念誦といふ、眞言の首末毎に納莽の二字を稱せよ、日中には攝召の念誦をなせ、眞言の首尾毎に紇(キリク)哩(ハ)合納(ナウマク)莽の三字を唱へよ、其の漫拏羅の火爐壇の形、方圓半月三角の圖左の如し。

四色にせよ、黃●白●青●赤の色等なり、次第に依て等しく之を配すべし、一切の諸の供養香花燈塗飲食等の器物、皆壇の色に準じて之を獻ずべし、若し八肘已下の壇には十四箇の寶瓶を用ひよ、香爐も亦た此の數に準せよ、若し四肘の壇には五の寶瓶●香爐等を用ひよ、若し十肘已上の壇には三十五瓶或は二十一を用ひよ、諸物此れに準せよ、其の瓶には五穀と及び五寶と香との末を(一)井花水を漉して之を用ひよ、諸の生花●菓穀を挿さみ、隨方の五色の綵を以てせよ、一切の供養物等皆辟除法を以て結護加持して、然して後に之を獻せよ、其の護摩の柴薪は、楓香木を柴とせよ、樺木●栢●諸の菓木●句路草等、乃至苦楝木等、若し四種の法を作さば中各の本法の相應に隨て柴薪とせよ、其の火爐の壇は方圓三角の半月壇等なり、量は四肘を取れ、中心にそひて掘ること方圓一肘、深さ亦た一肘せよ、緣の高さ八指、闊四指、緣の外に更に高さ二寸の、重緣を安せよ、其の諸の支具さに說くべからず、蘇悉地經に準じて之を用ひよ、其の火の

(一)井花水　天一、水を生ずるの意、寅の一天に人定まり陰極て水勢盛滿して花の咲ける如く、水涌き上るなり。

色は本色と相應せば即ち好し、其の持念の人の手に辨事蹉躭囉二合及び金剛鐸母地子の念珠、或は水精珠を把りて、四種の念誦に隨て之を用ひよ、其の杵鐸之を作るに(一)五種を用ひよ、一には金、二には銀、三には鉛錫、四には鍮石、五には好き(二)賓鐵等是れなり、並に梵字の眞言種子の字を安せよ、是の如く作す者を名けて辨事蹉躭囉二合と引なす、常に其の身に隨て、念誦の時ごとに執持して業を作せ、我れ已に四種の念誦護忙等の法を說き竟んぬ。

慈氏菩薩修愈誐法分別悉地品第九

我れ今略して修慈氏菩薩摩訶薩の速證悉地を說かん、肉身を化せずして慈氏如來宮の中に往いて、慈氏菩薩を見たてまつりて摩頂授記せられ、一時に閻浮提に下て同會說法する者、或は若し一生の中に初念誦より三無數劫の行を越ゆるに至るまでに、即ち一生補處三莽地を證し(三)一百六十種の心を越ゆること三度、即ち是れ三遏僧祇の行を度するなり、即ち是れ無相の悉地なり、若し有相の悉地は即ち本尊の指授なり、是の如く初めて是の如く悉地を作さんと求むれば、即ち五地八地を證して已來、眞言の菩薩或は現身に知足天上に往いて慈氏菩薩を見たてまつらん、其の所成就物は衆多無數な

(一) 五種一本には「五種の金」に作る。
(二) 賓一本鎖に作る。
(三) 一百三百に作る。一本に

り、具さに陳ぶべからず、今之を省略す、蹉躭囉二合とは或は金銀・熟銅・賓鐵・白檀木・紫檀木等五金を以て鑄よ、(一)或は五股・四股・三股・二股・獨股等なり、時に臨んで本尊の授記の如上等の物を取て、如法に加持念誦せよ、三相具さに現せば即ち執金剛菩薩を成ずることを得、慈氏宮に往いて本尊を見たてまつりて、摩頂授記を與へらるゝことを得ん。若し事法を求むる中に、或は本尊悉地を求めば、即ち金或は銀・水精・馬腦・頗梨或は白檀木等を取て、法界塔印を作つて、即ち七粒の舍利骨を安して作法して念誦し三落叉滿せよ、其の壇上に大光明を放ちて愈鄙者を證し、須臾の間に十方世界の一切の知足天宮の上に往至して、慈氏菩薩莽賀薩埵を見たてまつりて、無數の身となつて大いに佛事を作さん、若干の世界に分身して衆生を度し、無盡に修行し無盡に成佛し、慈氏宮の珊瑚の法堂に處して廣く佛事を作さんに、意に隨て自在ならん。若し如意莽尼珠の法を求めば、頗梨・馬腦・水精等の珠の、極めて明淨にして妙なる者を取て、加持念誦して三落叉を滿せよ、三相具さに現せば即ち(二)如意悉地の法を得て、十方世界に滿ちて諸の七寶を雨らして、衆生に施與し一切の諸佛菩薩を供養すること、意に隨て自在に成就せん。

(一) 或は云云二股四股普通にはなし、世護三藏譯の微妙曼荼羅經には一股乃至九股を說く、高野山御影堂の寶物中に九股あり。
(二) 如意悉地法一本に如意珠悉地仙に作る。

(一)瓷瓶　一本に瓷瓦に作る。(二)一層　一本に一の字なし。(三)白芥子云云　寶瓶に白芥子云云並に龍腦香を盛り之を加持すれば如意珠となること文の如し、東寺八十粒の佛舎利中、白芥子あること此の故なり。(四)者　一本に行者に作る。(五)朱砂　眞砂なり。(六)煙　一本に相に作る。

若し如意寶瓶の法を求めば、金銀乃至(一)瓷瓶を取て瓶を作れ、一升已來を受くるばかりにせよ、一ら畫壇の法に依て佛菩薩等を畫せよ、三重の(二)一層に之を畫せよ、即ち水を著れず(三)白芥子並に龍腦香を滿ち盛つて、本尊の前に安置して、眞言を誦すること三十萬遍せよ、瓶の口の上より畫く所の諸佛菩薩の形像の上、諸の天神王等の形像の上より大光明を放ちて、眞言(四)者の身上を照觸せん、即ち寶瓶の上悉地を得ん、其の白芥子皆變じて如意莽尼珠となつて、一切衆生に施與して求むる所如意自在ならしむ。寶瓶仙の中に、轉輪王となつて、慈氏如來の下生を待ちて第一會主となり、賢劫千佛の時を待ちて皆轉輪王となり、千佛皆授記を與へ、千佛のために應身とならむ、是の如き等の悉地の法無量無數にして、具さに陳べ著すべからず、藥物の數亦た具さに陳ぶべからず、時に臨んで知んぬべし。其の藥物とは、一には(五)朱砂、二には牛黃、三には雄黃、四には龍腦、五には水銀なり、上件の藥等は皆三種の悉地を具す、若し火焰現せば空に飛ぶこと自在なることを得て、駄囉尼仙を得、五地の菩薩の位に證入せん、若し(六)煙を得ば隱形仙の中に王とならん、若し煖を得ば世間の一切の所求の善事、意に隨はずといふことなく、多聞辯才他心道眼を得て通ぜずといふ所なく、若し

(一)合錬悉地藥　丹を合し丹を練る悉地。(二)尅　一本に刻に作る。

長生して死せず、神仙を喚び仙藥を索めて喫ふことを求めば、如意自在なることを得ん、或は伏藏の悉地を得、或は(一)合錬の悉地を得て點化無窮ならん、所點の銅鐵鉛錫皆金となつて、貧乏の衆生に廣く施して利益せん。

若し木を以て千佛の印に(二)尅作し、若し河海の洲の上にして沙を印せよ、塔を成すこと三十萬箇して、佛ごとに塔ごとに前にして眞言を誦すること一百八遍して、香花を供養して一一に法の如く念誦せよ、最末後の塔の上より光明を放ちて、愈鄙者の頂上を照觸せば、便ち大悉地を得て八地已來の菩薩の身を證得せん、須臾の間に三千大千世界の大火德の天王能仁天主等、諸の大威德の天衆八十億俱胝の天衆、諸の寶臺寶蓋を將て伎樂し歌詠讃歎して、諸佛の刹土に迎へ將ゐ廣く佛事をなさん、現世に十惡五逆の罪を造らん人も、此の印沙佛像塔像を作さば、必ず大悉地を得ん、斷絶せしむることなし。其の印塔の作法は一ら西方塔形の如く、中に法身の佛像を置け。

慈氏菩薩略修愈誐法大三昧耶像悉地品第十

復た次に我れ今略して慈氏大三昧耶を成就する像法を說かん、一ら莽賀三莽耶の像法に依て、一一に法の如く或は畫き或は繡し或は金銀を鑄、或は白檀を尅み、隨て一

色を取て法の如くして造れ、其の像の頂上に七粒の舍利骨を安せよ、一ら如上に依て持誦して、法に依て成就を作せ、大三昧耶の頂上より大光明を放ちて、愈誠者の頂中を照觸し、體に入て內外明徹にして、狀七歳の童眞の形の如くして、八地の觀自在三莽地を證得し、便ち入りて一生補處の尊の身に同じて、常に無生の三莽地を說かん。復た次に一法有り、前の畫像及び繡像等を取て(一)大悉地を成就せんことを求めんと欲は、亦た得ん、上の例に依て法の如く念誦すること三十萬遍せよ、像の頂上より大光明を放ち、或は像動いて眼睛轉じて、便ち(二)像中に愈誠者を畫ける處を把るを見ば、即ち身空に騰りて十方世界三千大千世界に往いて、一時に分身して皆一生補處慈氏菩薩の摩頂授記し說法することを覩ん、分身無量にして遍ねく十方一切の世界の六趣の中に至つて皆之を度すべし、若干の衆生の類度せずといふことなけん、具さに說くべからず復た一法あり、悉地を求めんと欲すれども、一切の衣服飲食資具香花等の物に乏少ならん、若し辨求せんと欲せば覓むべきこと難きが故に、即ち道を妨げん、是の故に我れ今略して穀を辟そけ藥を服して、悉地を求めて速かに成就を得ることを說かん、其の藥を名けて(三)桑耳天門冬棗肉豆黃白木桂心といふ、又た人參を加へて右如上の藥等、

(一) 大悉地　一本に大悉地法に作る。

(二) 像中に云云　一本に「其の像中に乃至抱くた」に作る。

(三) 桑耳　桑の木のコブタみ。

各の二兩皆細末に作して、白蜜を以て之に和して空腹に頓に三彈丸を服せよ、明日には減じて兩丸を服せよ、後日には即ち減じて但し常に一丸を服せよ、棗湯及び蜜人參等の湯を以て、皆煎熟の湯を須ひて之を下せ、服藥一劑すれば神仙三十年、再び妙藥を服すること兩劑すれば四百五十年を得、第三の劑服すれば五千五百年を得、第四劑を服すれば四萬四千年を得、第五の劑を服すれば五億五千年を得、第六劑を服すれば天地と齊しく畢る、此れ即ち名けて服藥の悉地となす、是の故に我れ今略して說く、智者疑慮の心を生ずること勿れ、新たに藥を服するに至るごとに、即ち舊藥を却退くべく、蔡子湯並に乾棗湯を以て煎じて飲んで服に滿ちなば即ち止め、更に新を取りて進めて以て度をなせ、我れ以に略して說く。妹怛利二合也慈悲して本願力を憶念するが故に、閻浮支那國に降臨して、速かに愈誠大悉地を證せしめ、(一)親り尊顏を珊瑚殿の上に覩たてまつらん。

灌頂說法して無生を悟らしめん　慈氏大日同一體なり
咸嚕左那即ち慈氏なり　(二)一生の菩薩即ち愈誠なり
自心は即ち是れ母地心　母地は即ち是れ慈氏尊なり

(一) 親たり云云　軌の文此に終る。又た次の偈中の如實智に至るまで軌の文か。次の中天三藏以下は法全等の後人の增加せるならん。

(二) 一生の菩薩　慈氏なり。愈誠とは行者なり、大師の本地を彌勒とすること知るべし。

三種無二にして元より一體なり　是の故に我れ如實智を求む
中天の三藏善無畏は　廿露飯王の釋の苗胤なり
五十五の(一)殊十三にして臨んで　烏馱(二)釋國土を任持す
十八にして位を捨てゝ兄に讓り　那蘭陀に度りて塵勞を脫ぐ
多聞にして博く學ぶこと七百數なり　百五十藏を誦持せり
大乘經論皆十萬　多聞を弃捨して妙藏
祕密三藏及び總持を修し　並に了義を解すること一萬偈あり
明かに七種の諸の聖敎を開き　五明の論悉く通せずといふことなし
一の摩賀支那の僧あり　法號種種の(三)喜無畏
純陀が供を最末後に獻ぜしが如く　未だ許可を得ざるには猶ほ未だ傳へざらん
但し無上の大悉地を求めんもの　尊者に從て口づから傳授せずして
輙く一句一偈を與ふる者は　但だ現世に悉地せざるのみにあらず
當來に必ず無間獄を獲ん　諸の持念するもの速かに悉地せんことを願はゞ
若し人此の人を供養すれば　慈氏を供養する千佛とに同せん

(一) 殊一本に孫に作る方よし。
(二) 釋一本に擇に作る。
(三) 喜善の字か一本に善に作る。

是の故に我れ今盡く歸命す　持誦者に非ずんば能く傳ふる所あらんや

國譯慈氏菩薩修愈誐法卷下

青龍寺東塔院一切經

一本の奥に云く　大中九年九月七日珍記す、又た同時に於て之を撿め勘へ珍記す。

少疑少なからず

八家錄に云く、行●運●圓●覺●本に加ふと、然るに今校刻する所の本の奥に、智證大師撿勘の記を載せたり、之を以て此れを見れば、則ち智證の請來する所の本ならんか、詳にせよ、今、淨嚴和上の點本及び異本を以て燈を挑げ之を讐校す、普天に鏤布して以て珊瑚殿上の嘉會を期せんのみ耆

元文五上章涒灘十二月朔旦

豐山妙音輪下沙門　無等

國譯(一)佛說觀彌勒菩薩上生兜率天經

宋居士沮渠京聲譯す

是の如く我れ聞く、一と時、佛舍衛國祇樹給孤獨園に在しき。そのとき世尊(二)初夜分に於て身を擧て光を放ちたまふ。その光金色にして祇陀園を繞り周徧すること七帀にして(三)須達が舍を照すに亦金色と作る。金色の光、猶は段雲の如くなるあり、舍衛國に徧じて、處處皆金色の蓮華を雨らし、その光明の中に無量百千の諸大化佛あり、皆な是の言を唱へき。今此の中に千の菩薩あり、最初に成佛するを拘留孫と名け、最後に成佛するを名けて樓至といふ、是の語を說き已て、尊者阿若憍陳如、即ち禪より起て、其の眷屬二百五十人と俱りき。尊者摩訶迦葉は、其の眷屬二百五十人と俱りき。尊者大目犍連は、その眷屬二百五十人と俱りき。尊者舍利弗はその眷屬二百五十人と俱りき。摩訶波闍波提(四)比丘尼は、その眷屬千比丘尼と俱りき、須達長者は三千の(六)優婆塞と俱りき、毗舍佉母は二千の(七)優婆夷と俱りき。復た菩薩摩訶薩あり、跋陀婆羅と名け、その眷屬十六菩薩と俱りき。文殊師利法王子は、その眷屬五百の菩薩と俱り

(一)「震二」、縮藏「閏九」

(二)初夜分　晝夜六時の一にして、初更・又は甲夜ともいふ、午後八時頃をいふ。

(三)須達　佛在世時代の舍衛國の長者なり。性慈心深く、祇園精舍を建立して佛に供養し、又孤獨を救ふ、故に給孤獨とも稱す。

(四)比丘(Bhikṣu)　淨乞食、乞士怖寬等と稱す。佛道を修行する出家なり。

(五)比丘尼(Bhikṣuṇī)　乞士女又は勤事女といふ佛道を修行する女の出家

き。天●龍●夜叉●乾闥婆●等一切の大衆、佛の光明を覩て皆悉く雲集したまふ。爾の時世尊、廣長舌相を出して千光明を放ちたまふ。一一の光明に各千色あり。一一の色の中に無量の化佛あり。是の諸の化佛異口同音に、皆な清淨諸大菩薩甚深不可思議諸(一)陀羅尼法を說きぬ。謂はゆる阿難陀目佉陀羅尼●空慧陀羅尼●無礙性陀羅尼●大解脫無相陀羅尼なり。そのとき世尊、一音聲を以て、百億の陀羅尼門を說きたまふ。此の陀羅尼を說き已て、その時會中に一菩薩あり、名けて彌勒といふ、佛の所說を聞き、時に應じて即ち百萬億の陀羅尼門を得、即ち座より起て、衣服を整へ、手を叉へ合掌して佛の前に住し立ちき。そのとき優波離亦た座より起ちて頭面禮を作して佛に白して言さく、世尊、世尊往昔(二)毗尼の中及び諸の經藏に於て說きたまはく(三)阿逸多次に當に作佛すべし。此の阿逸多は、凡夫の身を具して、未だ(四)諸漏を斷せず。此の人命終して當に何處に生ずべき。其の人今者復た出家すと雖、禪定を修せざれば煩惱を斷せず。佛此の人成佛疑なしと(五)記したまふ。此の人命終して何の國土に生ずるや。佛、優波離に告げたまはく。諦に聽き、諦に聽き、善く之を思念せよ。如來應正徧智、今此の衆に於て、彌勒菩薩摩訶薩の阿耨多羅三藐三菩提の記を說きたまふ。此の人、今より

なり。
(一)優婆塞(Upasaka)近善男近住男と稱し、よく僧に近づきて佛道を修行する在家の男子のこと。
(二)優婆夷(Upasikā)近善女又は近住女と稱し、僧に近住して佛道を修行する在家の女子のこと。
(一)陀羅尼(Dhāraṇī)總持と譯す、一字の中に千理を總攝する義にして眞言のことなり。
(二)毘尼(Vinaya)にて、調伏、律等と譯す。(三)業を調伏して、諸善業を作さしむる道德的規律なり。
(三)阿逸多(Ajita)無能勝と譯す。
(四)諸漏とは煩惱のこと、見惑思惑に亘りて、數多の煩惱あり。
(五)記(Vyākaraṇa)授記と譯す、佛弟子に因緣により、將來必ず悟を開くことを得べきを論し、これを心に期待せしむること。

(一)兜率天(Tusita)妙足又は知足と譯す。六欲天の一、其の宮殿を兜率天と稱し內外兩院あり、彌勒菩薩は內院(四十九院あり)の內の說法院に居す。
(二)一生補處の菩薩、彌勒菩薩のこと、釋迦の後を嗣で五十六億七千萬歲の後に世に出づべしといふ。
(三)大心大なる菩提心のこと。
(四)閻浮檀金閻浮樹の下を流る水中に生ずる砂金のこと。

十二年の後命終して必ず兜率天上に往生することを得べし。その時(一)兜率天上に五百億の天子あり、一一の天子皆な甚深の檀波羅蜜を修して(二)一生補處の菩薩を供養せんがための故に、天福力を以て、宮殿を造作して、各各身の栴檀摩尼寶冠を脫し、長跪合掌して、是の願を發して言さく、我れ今是の無價の寶珠及び天冠を持す、(三)大心の衆生を供養せんが爲めの故に。此の人來世に久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずべし。我れ彼の佛の莊嚴の國界に於て受記を得ば、我が寶冠をして化して供具を成さしめん。是の如く諸の天子等各各長跪して弘誓願を發すこと、亦た復た是の如し。時に諸の天子是の願を作し已るに、是の諸の寶冠、化して五百萬億の寶宮と作り、一一の寶宮に七重の垣あり、一一の垣は七寶所成なり。一一の寶より五百億の光明を出し、一一の光明の中に五百億の蓮華あり、一一の蓮華化して五百億七寶行樹と作り、一一の樹葉に五百億寶色あり、一一の寶色、五百億の(四)閻浮檀金の光あり、一一の閻浮檀金光の中に五百億の諸天寶女を出し、一一の寶女樹下に住立して、百億の寶無數の瓔珞を執り、妙音樂を出せり。時に樂音の中に、不退轉地法輪の行を演說し、其の樹果を生じて玻瓈色の如し、一一の衆色玻瓈色の中に入る。是の諸の光明は右に旋り宛轉し

(一)苦・空・無常・無我、是れを四正見と稱し、三界の苦なることを說明せるもの。

(二)四弘誓願大の誓願の意佛菩薩の通願たり。一衆生無邊誓願度二煩惱無盡誓願斷三法門無盡誓願學四佛道無上誓願成

て衆音を流出し、衆音大慈大悲の法を演說す。一一の垣牆、高さ六十二由旬、厚さ十四由旬にして、五百億の龍王、此の垣を圍繞す。一一の龍王五百億七寶行樹を雨らして、垣上を莊嚴す。自然に風あり、此の樹を吹動す。樹相振觸して(一)苦・空・無常・無我・諸波羅蜜を演說す、そのとき此の宮に一大神あり、牢度跋提と名く、即ち座より起て、徧ねく十方の佛を禮して、弘誓願を發したまふ。若し我れ福德を以て應に彌勒菩薩のために善法堂を造るべし、我をして額上に自然に珠を出さしめたまへと。旣に發願し已るに、額上に自然に百億寶珠瑠璃玻璃を出し、一切の衆色具足せざることなきこと、紫紺摩尼の如く表裏暎徹す。此の摩尼珠空中に廻旋し、化して四十九重微妙の寶宮と爲る。一一欄楯萬億梵摩尼寶を以て共に合成せられ、諸の欄楯の間自然に九億の天子、五百億の天女を化生す。一一天子の手中に無量億萬七寶蓮華を化生す。一一蓮華の上に無量億の光あり、其の光明中に諸の樂器を具し、是の如くの天樂鼓せざるに自ら鳴る。此の聲出るとき諸女自然に衆の樂器を執り、競ひ起て歌舞し、詠歌する所の音十善・(二)四弘誓願を演說し、諸天聞く者、皆無上道心を發しぬ。時に諸の垣の中に八色瑠璃渠あり、一一の渠に五百億の寶珠あり、用て合成す。一一の渠中に八味水あり、八色具足す。

其の水上み梁棟間に湧繞し、四門の外に四華を化生す。水華中より出づること寶華流の如し。一一の華上に二十四天女あり、身色微妙なること、諸の菩薩の如く、身相を莊嚴し、手中に自然に五百億の寶器を化す。一一の器の中、天の諸甘露自然盈滿す。左肩に無量の瓔珞を荷佩し、右肩に復た無量の樂器を負ふこと雲の如く、空に住し水に從て出で、菩薩の六波羅蜜を讚歎す。若し兜率天上に往生するあらば、自然に此の天女の侍御を得ん。亦た七寶の大師子座あり、高さ四由旬閻浮檀金無量衆寶を以て莊嚴を爲す、座の四角の頭　四蓮華を生じ、一一の蓮華は百寶所成なり。一一の寶百億の光明を出し、其の光微妙にして化して五百億の衆寶雜華と爲り、寶帳を莊嚴す。時に十方面百千の梵王各各一梵天妙寶を持し、以て寶鈴と爲し、寶帳上に懸く。時に小梵王天の衆寶を持し、以て羅網と爲し、帳上に彌覆す。そのとき百千無數天子天女の眷屬各寶華を持し、以て座上に布く。是の諸の蓮華自然に皆五百億の寶女を出し、手に白拂を執り帳內に侍立し宮の四角を持して、四寶の柱あり、一一の寶柱、百千樓閣梵摩尼珠あり、以て交絡を爲す。時に諸の閣間に百千の天女あり、色妙にして比なく、手に樂器を執り、其の樂音の中に無常苦空無常無我諸波羅蜜を演說す。是の如く天宮百

億萬無量の寶色あり、一一の諸女亦同寶色なり。そのとき十方無量の諸天命終して皆兜率天宮に生せんと願ふ。時に兜率天宮に五の大神あり、第一の大神を名けて寶幢といふ。身七寶を雨らし、宮牆内に散じ、一一の寶珠化して無量の樂器と成り、空中に懸け處るに、皷せざるに自ら鳴り無量音ありて、衆生の意に適ふ。第二の大神を名けて華德といふ。身に衆華を雨らし宮牆を彌覆し、化して華蓋と成り一一の華蓋に百千の幢旛を以て導引を爲す。第三の大神を名けて香音といふ。身毛孔の中より微妙海此岸栴檀香を雨らし其香雲の如く百寶の色と作り、宮を繞ること七帀なり。第四の大神を名けて喜樂といふ、如意珠を雨らし、自然に幢旛の上に住在し、顯に無量の歸佛、歸法、歸比丘僧を說き、及び(一)五戒無量善法諸波羅蜜を說き菩提を饒益勒助する音なる者なり。第五の大神を名けて正音聲といふ、身の諸の毛孔より衆水を流出し、一一の水上に五百億の華あり、一一の華上に二十五の玉女あり、一一玉女の身の諸の毛孔より、一切音聲勝天魔后所有の音樂を出す。佛、優波離に告げたまはく、此れを兜率陀天十善報應勝妙福處と名く、若し我れ世に住して、一小劫の中に廣く一生補處菩薩の報應及び十善の果を說くとも窮盡すること能はず。今汝等がために略して解說せん。佛優波離に告げたまはく、若し比丘及び一切大衆有て、生死を厭はず、天に生れんと樂ふ者、無上菩提の心を愛敬する者、彌勒の爲めに、弟子と作らんと欲する者、當に是の觀を作すべし。是の觀を作さば、應に五戒●(二)八齋具足戒を持すべし、身心精進して斷結を求めず、十善法を修し、一一に兜率陀天上の上妙の快樂を思惟し、是の觀を作さば、名けて正觀となす。若し他觀せば名けて邪觀となす。

そのとき、優波離即ち座より起ちて衣服を整へ、頭面禮を作して佛に白して言く、世尊、兜率陀天上に乃ち是の如く極妙樂事あり。今此の大士、何時、閻浮提より沒して、彼の天に生る。佛、優波離に告げたまはく離却て十二年二月十五日、波羅奈國劫波利村波婆利大波羅門家本所生處に於て結加趺坐し、滅定に入るが如く、身紫金色にして、光明豔赫として百千日の如く、上兜率陀天に至り、其の身の舍利金像を鑄るが如く、動せず搖せず、身の圓光中に、首楞嚴三昧般若波羅蜜の字義あつて炳然たり。時に諸の天人尋で即ち爲めに衆寶の妙塔を起て、舍利を供養す。時に兜率陀天の七寶臺の内摩尼殿の上師子の牀座に忽然として化生す。蓮華の上に結加趺坐す。身閻浮檀金の色の如く、長さ十六由旬、三十二相八十種好皆な悉く具足す。頂上の肉髻髮紺瑠璃色な

(一) 五戒殺生・偷盜・邪淫・妄語・飲酒・を禁戒するをいふ。

(二) 八齋戒不殺生戒・不偷盜戒・不邪婬戒・不妄語戒・不飲酒戒・不塗香油鬘佩華環珞戒・不歌舞觀聽戒・不眠坐高廣未座戒

(三) 具足戒比丘比丘尼の持つべき戒法にして、比丘に二百五十戒、比丘尼に三百四十八戒あり。

(三) 三十二相、八十種好佛の具へたる端嚴の相好のこと。

(一) 釋迦毘楞伽摩尼　寶の名なり。

(二) 白毫相　佛三十二相中の一にして、佛の兩眉の間にあり、常に光を放つといふ。

(三) 六時　長朝・日中・日沒・初夜(午後八時頃)中夜(午後十時ヨリ二時頃迄)後夜(午前四時頃)をいふ。

(四) 正受　梵語(samādhi)散亂心を抑制して寂靜の境に住して諸法の實相を諦觀すること。

(五) 六通　通とは神通自在の義にて、天眼通・天耳通・他心通・宿命通・身如意通・漏盡通なり。

り。(一)釋迦毗楞伽摩尼、百千萬億の甄叔迦寶を以て天冠を嚴り、其の天の寶冠百萬億の色あり、一一色の中無量百千の化佛あり。諸の化菩薩以て侍者と爲る。復た他方諸大菩薩あり、十八變を作し、隨意自在にして、天冠の中に住し、彌勒の眉間に(二)白毫相の光あり、衆色を流出し、百寶色三十二相と作り、一一相中五百億寶色あり。一一好中に亦五百億寶色あり、一一好豔にして、八萬四千の光明雲を出し、諸天子と各華座に坐し、晝夜(三)六時常に不退轉地法輪の行を說き、一時を經る中、五百億天子をして阿耨多羅三藐三菩提を退せざらしむることを成就す、是の如く兜率陀天に處り晝夜恒に此の不退轉法輪を說き、諸天子を度し、閻浮提の歲數五十六億萬歲にして爾して乃ち閻浮提に下生すること、彌勒下生經に說くが如し。佛優波離に告げたまはく、是れを彌勒菩薩、閻浮提より沒して兜率陀天に生ずる因緣と名く。佛滅度後の我が諸の弟子、若し諸の功德を精勤して修し、威儀缺かず、塔を掃ひ地を塗り衆の名香妙華を以て供養し、衆の三昧を行じ、深く(四)正受に入り經典を讀誦し、是の如く等の人あらば、應當に至心にすべし。結を斷せずと雖(五)六通を得るが如し。應當に念を繫け佛の形像を念じ、彌勒の名を稱すべし。是の如く等の輩、若しは一念の頃八戒齋を受け、諸の淨業

(一) 曼荼羅華　梵語(Mandārava)白華又は天妙華と譯す。白蓮華のことなり。

を修し、弘誓願を發すも、命終の後、譬へば壯士の臂を屈伸する頃に即ち兜率陀天に往生することを得るが如し。蓮華の上に結加趺坐す。百千の天子、天の妓樂を作し、天曼陀羅華摩訶曼陀羅華を持し、以て其の上に散じ、讚して言く、善いかな、善いかな、善男子、汝、閻浮提に於て廣く福業を修し、此處に來生す。此處を兜率陀天と名く、今此の天主を名けて彌勒といふ。汝當に歸依すべしと。聲に應じて即ち禮し已るに諦に眉間白毫相の光を觀じ、九十億劫の生死の罪を超越することを得。是の時菩薩其の宿緣に隨て、爲に妙法を說き、其をして堅固にして無上道心を退轉せざらしむ。是の如く等の衆生若し諸業を淨め、六事法を行せば、必定らず疑なく、當に兜率天上に生ずることを得べし。彌勒に値遇し、亦彌勒に隨て、閻浮提に下り、第一に法を聞き、未來世に於て、賢劫一切諸佛に値遇し、星宿劫に於て、亦諸佛世尊に値遇することを得ん。諸佛の前に於て、菩提の記を受く。佛、優波離に告げたまはく、佛滅度の後、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等是の諸大衆、若し彌勒菩薩摩訶薩の名を聞くことを得るあらば、聞き已て歡喜し恭敬禮拜せん。此の人命終して彈指の頃の如く、即ち往生することを得ること、前の如く異なし。但

だ是の彌勒の名を聞くを得ば、命終して亦黑闇の處、邊地の邪見諸惡律儀に墮せず、恒に正見を生じ、眷屬成就し、三寶を謗せず。佛、優波離に告げたまはく、若し善男子、善女人諸の禁戒を犯し、衆の惡業を造るも、是の菩薩大悲の名字を聞き、五體地に投じ、誠心に懺悔せば、是の諸の惡業速に清淨なることを得ん。未來世の中の諸の衆生等、是の菩薩大悲の名稱を聞き、形像を造立し、香華衣服繒蓋幢旛を以て禮拜し繫念せば、此の人命終らんと欲する時、彌勒菩薩眉間白毫大人相光を放ち、諸の天子とともに曼陀羅華を雨らして此の人を來迎し、此の人須臾に即ち往生を得、彌勒に値遇し、頭面禮敬して、未だ頭を擧げざる頃便ち法を聞くことを得、即ち無上道に於て不退轉を得、未來世に於て恒河沙等の諸佛如來に値ふことを得。

佛、優波離に告げたまはく、汝今諦らかに聽け、是の彌勒菩薩、當に未來世一切衆生のために大歸依處〻作るべし。若し彌勒菩薩に歸依するあらば、當に知るべし、是の人無上道に於て不退轉を得、彌勒菩薩多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を成ず。時に此くの如くの行人、佛の光明を見て、即ち受記を得。佛、優波離に告げたまはく、佛滅度の後、四部弟子天龍鬼神、若し兜率天に生れんと欲する者あらば、當に是の觀を作し、念を繫け思惟して兜率陀天を念ずべし。佛の禁戒を持すること、一日より七日に至るまで、十善行、十善道を思念し、此の功德を以て廻向して、彌勒の前に生れんと願ふ者は、當に是の觀を作すべし。是の觀を作さば、若し一の天人の一の蓮華に坐するを見、若しは一念の頃彌勒の名を稱へば、此の人千二百劫の生死の罪を除却せん。但し彌勒の名を聞き合掌恭敬せば、此の人五十劫生死の罪を除却せん。若し彌勒を禮敬するあらば、百億劫生死の罪を除却せん。設ひ天に生せざれども、未來世の中に龍華菩提樹の下にして、亦値遇することを得て、無上道心を發さん。是の語を說く時に、無量の大衆即ち座より起て佛足を頂禮し、彌勒の足を禮し、佛及び彌勒菩薩を繞ること、百千匝す、未だ得道せずば各の誓願を發さん。我等天人八部、今佛前に於て、誠實誓願を發し、未來世に於て、彌勒に値遇し、此の身を棄て已て皆兜率陀天に上生することを得。世尊記してのたまはく、汝等及び未來世に福を修し、戒を持さば皆當に彌勒菩薩の前に往生すべく、彌勒菩薩の爲めに攝受せられん。佛、優波離に告げたまはく、是の觀を作さば、名て正觀となす。若し他觀せば名けて邪觀となす。そのとき尊者、阿難陀、即ち座より起て、手を叉へ長跪して佛に白して言さく。世尊善いかな、世尊、快く彌

(一)禁戒 梵語(Śīla)の訳、防非止惡萬善修行の根本にして、佛道修行者には五戒、八戒、十戒、二百五十戒等其種類分れたり。

勒所有の功德を說き、亦未來世の修福の衆生の所得の果報を記し、我れ今隨喜す、唯だ然り、世尊此の法の要云何んが受持せん、當に何んが此の經を名くべき。佛、阿難に告げたまはく。汝佛語を持し愼んで忘失する勿れ。未來世のために天に生る、路を開き、菩提の相を示し、佛種を斷ずる莫れ。此の經を彌勒菩薩般涅槃と名け、亦は觀彌勒菩薩上生兜率陀天勸發菩提心と名く。是の如く受持すべし。佛この語を說く時、他方より來り會する十萬の菩薩、首楞嚴三昧を得、八萬億の諸天、菩提心を發し、皆彌勒に隨從して下生せんと願ふ。佛是の語を說くとき、(一)四部弟子天龍八部、佛の所說を聞き、皆大いに歡喜して佛を禮して退きぬ。

國譯佛說觀彌勒菩薩上生兜率陀天經 終

(一)四部弟子又は四部衆とも稱す、比丘(僧)・比丘尼(尼)・優婆塞(信男)・優婆夷(信女)をいふ。

(二)天龍八部天龍とは諸天と龍屬にして龍神八部とも稱す天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦

國譯佛說(一)彌勒下生經

一名彌勒當來成佛

姚秦の三藏法師鳩摩羅什第三譯

大智舍利弗は、能く佛に隨て(二)法輪を轉じ、佛法の大將なり。衆生を憐愍するが故に、佛に白して言さく、世尊、前後の經中に說くがごとし。彌勒當に下つて作佛すべし。願はくは、廣く彌勒功德神力國土莊嚴の事を聞かんと欲す。衆生何の施、何の戒、何の慧を以て、彌勒を見ることを得ん。そのとき、佛、舍利弗に告げたまはく、我れ今廣く汝がために說かん。當に一心に聽くべし。舍利弗、(三)四大海水、以て漸く減少すること三千由旬。このとき(四)閻浮提の地長きこと十千由旬、廣きこと八千由旬、平坦なること鏡のごとし。名華、輭草、偏ねくその地を覆ひ、種種の樹木華果茂盛す。その樹悉くみな高さ三十里、城邑次で比し、鷄飛相及ぶ、人壽八萬四千歲、智慧威德あつて、色力具足し、安穩快樂ならん。唯だ三の病ひあり。一には便利、二には飲食、三には衰老。女人年五百歲にして、すなはち行き嫁す。このとき、一の大城あり、翅頭末と名づく。長きこと十二由旬、廣きこと七由旬、端嚴殊妙、莊飾淸淨なり。福德の人、

(一)彌勒(Maitreya)は梵語、慈氏と譯す、即ち彌勒菩薩の事なり、慈悲高大の故に名く。此の菩薩は今現に兜率の內院に在れども、衆生救濟のために彼の天より人間世界に下り來る、故に之を下生といふ。

(二)法輪 佛の說法をいふ。

(三)四大海水 須彌山の四方にある海水のこと。

(四)閻浮提 梵名閻浮は樹名、提は洲の義、閻浮樹の生ずる洲にして、此の世界をいふなり。

(五)十套ノ五 藏、縮閏九、十二、

その中に充滿す。福德の人なるを以ての故に、豊樂安穩なり。その城七寶上に樓閣戸屬、軒窓あり、みな是れ衆寶眞珠羅網その上を彌覆す。街巷、道陌、廣さ一ごと十二里、掃灑清淨なり。大力龍王あり、名けて多羅尸棄と曰ふ。その池、城に近く、龍王の宮殿この池の中に在り、常に夜半に、微細の雨を降し、用て塵土を淹ふ。その地潤澤にして、譬へば油を以て塗るがごとく、行人往來して塵あることなし。時に世の人民福德の致すところ、巷陌處處に明珠の柱あり、みな高きこと十里、その光照曜して、晝夜異ることなく、燈燭の明も、また用をなさず。城邑、舍宅、及び諸の里巷、乃至細微の土塊あることなく、純ばら金沙を以て、地に覆ひ、處處みな金銀の聚あり。大夜叉神あり、跋陀波羅賒塞迦（秦に善敎と言ふ）と名づく。常にこの城を護り、掃除清淨なり。若し便利の不淨あらば、地裂けて之を受く。受け已て、還て合す。人命將に終らんとせば自然に家間に行て詣り、而して死す。時に世安樂にして怨賊、刼竊の患あることなく、城邑聚落門を閉づる者なく、亦た衰惱水火刀兵及び諸々の饑饉毒害の難なく、人常に慈心恭敬和順、(一)諸根を調伏し、言語謙遜なり。舍利弗、我れ今汝がために麤略一て彼の國界城邑富樂の事を說かん。その諸の園林池泉の中、自然に

(一) 諸根　眼根、耳根、等の如きもの。

(一) 八功德水　佛國土を莊嚴する八種の功德水のこと。

(一) 八功德水あり、青紅赤白雜色の蓮華、徧へにその上を覆ふ。その池の四邊に、四寶階道あり。衆鳥和集し、鳧●鴛鴦●孔雀●翡翠●鸚鵡●舍利●鳩那羅●耆婆耆婆等の諸の妙音の鳥、常にその中に在り。復た、異類妙音の鳥有て彌げて數ふべからず。果樹、香樹、國內に充滿せり。そのとき閻浮提の中常に好香あり。譬へば香山のごとく、流水美好、味甘にして患を除く。雨澤時に隨ひ、穀稼滋茂して、草穢を生ぜずして一種に七獲し、功を用ふること甚だ少くして、收むる所甚だ多し。この香美を食ふに、氣力充實せり。其の國にそのとき、轉輪王あり、名けて儴佉と曰ふ。四種の兵あり、威武を以て四天下を治めず。その王千子あり、勇健多力にして、能く怨敵を破る。王七寶、金輪寶、象寶、馬寶、珠寶、女寶、主藏寶、主兵寶あり。又その國土に七寶の臺あり、舉高千丈、千頭千輪、廣さ六十丈、又た四大藏あり、一一の大藏に各々四億の小藏あつて圍繞せり。伊勒鉢大藏は、乾陀羅國に在り、般軸迦大藏は、彌提羅國に在り、賓伽羅大藏は須羅吒國に在り、儴佉大藏は波羅奈國に在り、この四大藏の縱の廣さ、千由旬、中に珍寶を滿し、各々四億の小藏あつて之に附けり。四大龍王あつて、各自此の四大藏、及び諸の小藏を守護し、自然に湧出する形は蓮華のごとし。無央數の人、

みな共に往て觀ぬ。このとき、衆寶守護するものなく、衆人之を見て、心に貪著せず、之を地に棄つること、猶ほ瓦石草木土塊のごとし。時の人見て皆な厭心を生じ、而してこの念を作さく。往昔の衆生、この寶のための故に、共に相ひ殘害し、更に相ひ偸刧し、欺誑し、妄語し、生死の罪緣をして、展轉增長せしむ。翅頭末城は、衆寶羅網その上を彌覆し、寶鈴莊嚴し、微風吹動す。その聲、和雅にして磬を扣く聲のごとし。その城中に大婆羅門主あり、名けて妙梵といふ。婆羅門の女を名けて、梵摩波提といふ。彌勒托生して、以て父母となる。身、紫金色にして、三十二相あり、衆生之を視て、厭足あることなし。身力無量不可思議にして、光明照曜し、障閡するところなく、日月火珠都べてまた現せず。身の長千尺、胸の廣さ三十丈、面の長十二丈四尺、身體具足、端正無比、相好を成就せること、金像を鑄るがごとく、肉眼清淨にして、十由旬を見、常光四照し、面百由旬、日月火珠光また現せず。但だし佛光有て、殊妙第一なり。彌勒菩薩、世の(一)五欲を觀じて、患を致すこと甚だ多し。衆生沈沒して、大生死に在り、甚だ憐愍すべし。自ら是の如き正念を以て觀ずる故に、在家を樂はず。時に儀佉王、諸の大臣と共に、この寶臺を持して、彌勒に奉げ上る。彌勒受け已て、諸

(一) 五欲　又は五塵といふ。色、聲、香、味、觸の五種の欲望にして、人の身心を迷はすもの。

の波羅門に施す。波羅門受け已て、すなはち、毀壞し、各々共に之を分つ。彌勒菩薩、この妙臺の須臾に無常なるを見て、一切法みな亦た磨滅すと知り、(一)無常想を修して、出家學道し、(二)龍華菩提樹下に坐したまふ。樹莖枝葉の高さ五十里、即ち出家の日を以て、阿耨多羅三藐三菩提を得たり。そのとき、諸天龍神王、その身を現せずして、華香を雨ふらし、佛を供養せば、三千大千世界、みな大に震動し、佛身より光を出して、無量國を照し、應に度すべき者、みな佛を見ることを得。そのとき、人民各々この念を作さく。復た千萬億歲、五欲の樂を受くと雖も、三惡道の苦を免るゝことを得ること能はず。妻子財產も救ふこと能はざる所、世間は無常にして命は久しく保ち難し。我等今宜しく佛法に於て、梵行を修行すべしと。此の念を作し已て、出家學道せり。時に、儀佉王、亦た八萬四千の大臣と共に、恭敬圍繞し、出家學道せり。復た八萬四千の諸の婆羅門あり、聰明大智にして、佛法の中に、亦た共に出家せり。復た長者あり、須達那と名く。今須達長者は是れなり。この人亦た八萬四千人と俱に出家せり。復た黎師達多富蘭那兄弟あり、亦た八萬四千人と出家せり。復た二大臣あり、一を栴檀と名け、二を須曼と名く。王の愛重するところ。亦た八萬四千人と俱に佛法の

(一) 無常想　萬有は無常變遷限りなしと觀想すること。
(二) 龍華菩提樹　彌勒菩薩此の樹の下にて成道せし故にかく名く。

中に出家せり。儴佉王寶女を舍彌婆帝と名く。今の毗舍佉是れなり。亦た八萬四千の婇女と俱に出家せり。儴佉王の太子を名けて天色といふ。今提婆那是れなり。亦た八萬四千人と俱に出家せり。彌勒佛の親族の婆羅門の子を、須摩提と名く。利根智慧、今の欝多羅是れなり、亦た八萬四千人と俱に、佛法の中に出家せり。是の如く等の無量千萬億の衆、世の苦惱を見、みな彌勒佛法の中にて出家せり。そのとき、彌勒佛、諸の大衆を見、この念を作して言はく。今諸人等生天を以て樂はざる故に、亦復、今世のために樂はざるが故に、我が所に來至り、但だし涅槃常樂の因緣となる。これ諸人等みな、佛法の中に於て、諸の善根を種え、釋迦牟尼佛、遣來して我に付かしむ。この故に、今はみな我が所に至る。我れ今之れを受けん。是れ諸人等、或は以て、(一)修妬路●(二)毗尼●(三)阿毗曇藏●を讀誦し分別し決定して諸々功德を修し、我が所に來至り、或は衣食を以て人に施し、持戒智惠を以て、この功德を修して、我が所に來至り、或は旛蓋華香を以て、佛に供養し、この功德を修して、我が所に來至り、或は布施を以て、持齋し、慈心を修習し、この功德を行じて、我が所に來至り、或は苦惱の衆生のために、それをして樂を得せしめ、この功德を修して、我が所に來至り、或は

(一) 修妬路　一佛の說きし經藏のこと。
(二) 毘尼　律藏のこと。
(三) 阿毗曇藏　論藏のこと。

持戒忍辱を以て、清淨の慈を修し、この功德を以て、我が所に來至り、或は施僧、常食、齋講、設會、供養、飯食を以てし、この功德を修して、我が所に來至り、或は持戒多聞修行禪定無漏の智慧を以てし、この功德を以て、我が所に來至り、或は塔を起て、(一)舍利を供養するあり、この功德を以て、我が所に來至る。善いかな、釋迦牟尼佛、能善く是の如く等の百千萬億の衆生を敎化して、我が所に至らしむ。彌勒佛、かくの如く三たび、釋迦牟尼佛を稱讃して、然る後に說法してこの言を作さく。汝等衆生、能く、難事をなし、かの惡世、貪欲、瞋恚、愚痴、迷惑、短命の人中に於て、能く持戒を修し、諸の功德を作して、甚だ希有なりと爲す。そのとき、衆生、父母、沙門、婆羅門を識らず、道法を知らずして、互相に惱害し、刀兵劫に近づき、深く五欲、婇妬、諂曲に著し、佞濁、邪僞、にして、憐愍の心なく、更相ひに殺害して、肉を食ひ、血を飲む。汝等能く中に於て、善事を修行せば、是れ希有なりとなす。善いかな、釋迦牟尼佛、大悲の心を以て、能く苦惱の衆生の中に於て、誠實の語を說き、我れに當來の度脫を示したまへ。汝等是の如くの師は、甚だ遇ひ難しとなす。深心を以て惡世の衆生を憐愍し、苦惱を救拔して、安隱を得せしめん。釋迦牟尼佛、汝等のための故

(一) 舍利　(Sarīra)骨身又は靈骨と譯す。佛の骨なり。

に、頭を以て布施し、耳、鼻、手、足、肢體を割截して、諸の苦惱を受け、以て汝等を利せん。彌勒佛、かくの如く無量の衆生を開導安慰し、其れをして歡喜せしめ、然る後説法す。福田(フクデン)の人、その中に充滿し、恭敬信受して、大師を渴仰し、各々法を聞かんと欲して、みな此の念を作さく。五欲不淨にして衆苦の本、又能く憂慼愁惱を除捨して、苦樂の法は皆是れ無常なりと知ると。彌勒佛、觀察するとき、會の大衆、心淨く調柔なり。爲に四諦を説きたまふ。聞く者、同時に涅槃道を得たり。そのとき、彌勒佛、(一)華林園にをりたまふ。その園縱の廣さ一百由旬、大衆中に滿つ。初會説法、九十六億人、(二)阿羅漢(アラカン)を得たり。第二大會説法、九十四億人、阿羅漢を得たり。第三大會説法、九十二億人、阿羅漢を得たり。彌勒佛、既に法輪を轉んじて、天人を度すこと已て、諸の弟子を將ゐて、城に入り乞食したまふ。無量淨居(ジヤウゴ)天衆、恭敬し、佛に從て翅頭末城に入りき。當さに城に入らんとする時、種種の神力を現じ、無量に變現す。釋提桓因と、欲界の諸天と、梵天王と色界諸天と、百千の妓樂を作し、佛德を歌詠し、諸々の天華を雨ふらし、栴檀末香を、佛に供養したてまつり、街巷道陌、諸の旛蓋を竪て、衆の名香を燒き、其の煙雲のごとし、世尊、城に入りたまふの時、大梵天王、釋提桓因

(一) 華林園　龍華樹の下に在る僧園にして、彌勒菩薩成道以後此の僧園にて衆生濟度の説法をなす。
(二) 阿羅漢　梵名應供と譯す佛弟子修行の果の一にして世間の勝供養を受くるに應ずるが故なり。

合掌恭敬して、偈を以て讃して曰はく。

(一)正徧知者(二)兩足尊　天人世間無與等
十力世尊甚だ希有なり　無上最勝良福田
其れを供養せば天上に生ず　無比大精進に稽首したてまつる。

そのとき、天人(三)羅刹(ラセツ)等、大力魔、佛の之を降伏したまふを見、千萬億無量の衆生、みな大に歡喜し、合掌して唱へて言はく、甚だ希有なりとなす。甚だ希有なりとなす。如來神力功德具足不可思議なり。このとき、天人、種種雜色の蓮華、及び曼荼羅華を以て、佛の前に散じ、地に積て膝に至る。諸天、空中に　百千の伎樂を作して、佛德を歌歎したまふ。そのとき、魔王、(四)初夜(ショヤ)(五)後夜(ゴヤ)に於て、諸の人民を覺まし、是の如くの言を作さく。汝等、既に人身を得て好時に値遇せり。應さに竟夜睡眠して心を覆ふべからず。汝等、若しは立ち、若しは坐し、當に勤めて精進し、正念諦觀(タイクワン)せよ。(六)五陰(オン)は無常なり、苦なり、空なり、無我なりと。汝等放逸を爲すこと勿れ。佛敎を行せずして、若し惡業を起さば、後に必ず悔を致さん。時に街巷の男女皆この語を傚ふて言はく、汝等放逸を爲すこと勿れ。佛敎を行せずして、若し惡業を起さば、後に必ず

(一) 正徧知者　佛のこと。
(二) 兩足尊　同上
(三) 羅刹　人を食ふ鬼なり。
(四) 初夜　今の午後八時頃のこと。
(五) 後夜　今の午前四時頃。
(六) 五陰　五蘊と同じ前出。

悔あらん、當に勤めて方便精進し、道を求むべし。法利を失ふて、徒らに生じ、徒らに死すること莫れ。是の如くの大師、苦惱を拔く者は、甚だ遇ふこと難しと爲し、堅固精進にして、當に安樂涅槃を得べし。そのとき、彌勒菩薩、諸の弟子普く皆端正威儀具足し、生老病死を厭ひ多聞廣學にして(一)法藏を守護し、禪定を行じて、諸欲を離るる事を得ること鳥の殼を出るが如し、そのとき、彌勒佛、長老(二)大迦葉の所に往かんと欲し、即ち四衆と俱に、耆闍崛山(ギシャクッセン)に就き、山の頂上に於て、大迦葉を見たてまつる。時に、男女大衆、心みな驚怪す。彌勒佛讃じて言はく、大迦葉比丘(カショウビク)は、是れ釋迦牟尼佛の大弟子にして、釋迦牟尼佛、大衆の中に於て、常に(三)頭陀(ヅダ)第一、禪定、解脫三昧に通達せりと讃嘆する所なり。この人神力ありと雖も、高心無く、能く衆生をして、大歡喜を得せしめ、常に下賤貧惱の衆生を愍み、苦惱を救拔して、安隱を得せしむ。彌勒佛、大迦葉の骨身を讃して言はく、善いかな、大神德釋師子、大弟子大迦葉は、彼の惡世に於て、能く其の心を修すと。そのとき、人衆、大迦葉の彌勒佛のために讃せらるゝを見、百千億の人、この事に因み、已つて、世を厭ひ道を得。この諸人等、釋迦牟尼佛を念じ、惡世の中に於て、無量の衆生を敎化して、(四)六神通を具することを

(一) 法藏　一切諸法の理性のこと。
(二) 大迦葉　佛十大弟子の一頭陀第一と稱せらる。
(三) 頭陀、第一抖擻又は澣洗等と譯す。煩惱の塵垢を抖擻することに最も巧妙なること。
(四) 六神通　六種の神通のこと。一、神境智證通　二、天眼智證通　三、天耳智證通　四、他心智證通　五、宿命智證通　六、漏盡智證通

得て、阿羅漢を成ぜしむ。そのとき、說法の處、廣さ八十由旬、長さ百由旬、その中の人衆、若しは坐し、若しは立ち、若しは近、若しは遠、各各自ら佛を見、その前に在て、獨り爲に說法す。彌勒佛、世に住すること六萬歲、衆生を憐愍して、法眼を得せしめ、滅度の後、法を世に住せしむることも亦た六萬歲なり。汝等宜しく應に精進して淸淨心を發し、諸の善業を起さば、世間の燈明を見ることを得、彌勒佛身必ず疑なし。佛、この經を說き已るや、舍利弗等歡喜受持し、禮を作して去りたまひき。

國譯佛說彌勒下生經　終

謙外豊山版初三。
縮餘一。
今密乘の六大眞如薫は無礙の軆性なるが故に、而も能薫・所薫俱に法界に周遍し無礙融通するが故に、起信論所説の眞如と無明互薫の場合と全く趣を異にす。

(一)蓮華金剛法儀　蓮華とは蓮華部、金剛法とは觀自在なり。蓮華部觀自在の法なり。

(二)智業不可得の理、是れ𑖮𑖿𑖨𑖱𑖾字の義、此の字は𑖮𑖨𑖂𑖀𑖾の四字合して一字を成す、是れ順旋轉、逆旋轉して一字を成じて六大法界に薫じ終に空法に歸すなり。

(三)香印の文　一本に文の字なし、

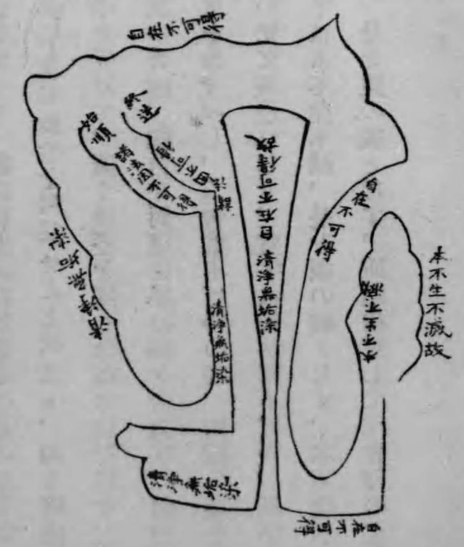
國譯觀自在菩薩大悲智印周遍法界利益衆生薰眞如法 一卷

大唐特進試鴻臚卿加開府儀同三司封肅國公贈司空謚大辨正大廣智不空三藏和尚　譯す

我れ毘盧遮那の聖旨を蒙りて、觀自在摩訶枳孃曩母怛羅の法を說く、若し修瑜伽の人有て、西方極樂世界に生じ衆生を利益せんと欲はゞ、即ち阿闍黎耶の有智熟者に從て、(一)蓮華金剛法儀を受けて、廣く供養を陳し念誦の法を作せ、其の壇の中に於て香爐を安置すべし、其の香爐、觀自在周遍法界の相を含攝す、何を以て相となす、即ち其の香印は紇哩合二文を作すべし、(二)智業不可得の理、四種の義を攝し、𑖮𑖨𑖂𑖀𑖾合して一字となる、其の梵文𑖮𑖿𑖨𑖱𑖾是れなり、賀字は諸法因不可得、羅字は淸淨無垢染、伊字は自在不可得、惡字は本不生不滅、是を順の義となす、本不生不滅自在不可得淸淨無垢染諸法因不可得、是を逆の義となす、逆順相應して(三)香印の文を顯す、我れ其の圖をなす。

(一)所生の處云云南方香積世界の如く、香焔以て善く說法す。
(二)衆生薰を得て云云猶ほし一色一香無非中道と云はんが如し。

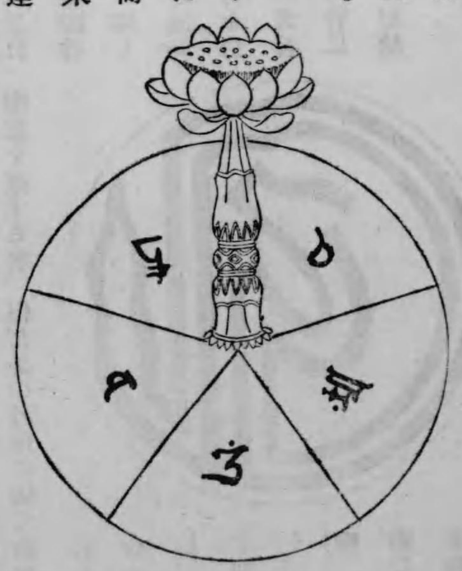
是の妙香印を大悲拔苦と名く、所以は何んとなれば、之を燒く次第に依て眞實の理を顯す、若し燒き盡さん時、若しは順若しは逆、遂に空法に歸することを表



一一の化身法界に周遍して衆生を利益す、是の故に行者現世に安穩を獲て諸の障礙なく、妙蓮華の如く見る諸佛の加被を蒙る、是の故に行者無量の福を得、悉地圓滿して者愛惜す、(一)轉じ已て極樂上品の蓮中に生ずることを得、其をして利根智慧方便有らしめ現身に佛を見たてまつる、陀羅尼の名を得て世に染せず。(二)所生の處に身より妙香を出して十方の國に遍し、(三)衆生薰を得て皆不退を證す、是の如くの功德具さに說

(三)蓮華の性蓮華の體性は即ち觀自在なり。
(四)香を燒くの言云云本尊の印言(ばざらどーぱ)を以て加持する時印香の功德を顯現す。

くべからず、其の香爐の蓋の上に嚩日羅二合達磨の字を雕るべし、首に唵字を加へて以て五字となす順に旋すべし其の蓋の中央に三昧耶形を立つべし、一鈷杵の上に開けたる八葉の蓮華を安す是れなり、如上の五字此の三昧耶を圍繞す。三昧耶とは是れ本誓の形ちなり、若し此の形を見て禮を作して專念せば、即ち(三)蓮華の性を證す、所以に極樂に生ずる者は、更に世に染せず、設ひ世間に交はれども、衆生を度すること蓮なすべし、是の梵文の香煙此の三昧耶形を成ず、此の形更に本尊の形體となる、因時の本誓を表して遂に果時の形色となる、是れ三昧耶の義なり、(四)香を燒くの時本尊の



華の諸垢のために染せられざるが如し、皆過去の本誓願力に由るが故に、此の果界を證するなり、是の故に行者、此の三昧耶形を立て專ら之を念じて是の想を

契を結んで、是の本眞言を誦し、之を印すれば即ち成就を得、其の蓋の圖斯の如し。此の輪に入りぬれば、無上菩提に至ることを得。若し不間常に眞言を誦せんと欲はゞ、然して攀緣を離れざれ、懈怠を擬する者、但だ是の妙印に依て栴檀蓮等の香を燒くべし、是の如く毎日燒香の法をなす者は、即ち常業に金剛法明を誦持するに成んぬ、何を以ての故に、如上の眞言の字義、皆此の印香に於て能く顯示するが故に。

根本印　二手金剛縛

二大指並べ立てにして、二頭指の頭を合せて蓮華葉の如くし、

よ即ち成ず、眞言に曰く、唵(オン)嚩(バ)日羅(ラ)駄羅(タラ)磨(マ)頡(ケツ)唎(リク)

若し人此の一字の眞言を持すれば、能く一切災禍疾病を除き、命終の後當さに極樂上品の生を得べし、餘の諸の所求、世間出世の大願、持するに隨て成ずることを得、何に況んや此の教法に依て修行せん者、一切の悉地久しからずして圓滿するなり。觀自在菩薩薫眞如香印法說き已竟んぬ。

國譯觀自在妙香印法一卷終

國譯(一)都表如意摩尼轉輪聖王次第念誦秘密最要略法

解脱師子　譯す

相貌品第一

我れ今當さに思惟の(二)法　三種の眞言次第あることを說くべし

初には大心を用ひて外を加持し　第二には根本復た內を想へ

第三の小心は內外に通ず　心を存して錯亂なかるべし

是の如くの三道の妙眞言は　行者を(三)明王地に安立す

若し此の三昧耶を修することあらんものは　須らく七種の殊勝相を具すべし

輪王の七寶を持して　四天下に王として皆降伏するが如し

次に諸の念誦の法に順ふことを說かん　復た(四)清淨吉祥の地を擇べ

或は山間と及び池邊とにあり　或は伽藍と精室の處とにあり

或は佛舍利と神塔との中に　心を存して諸俱を辨ずべし

縁外豊山版中一。縮餘一。續藏三套一。

(一) 都表如意云云　諸尊廣大甚深の德を都べて如意輪一尊に表す、如意摩尼等とは世の輪王の七寶を具し四天下に王たる如く此尊も無盡の莊嚴を具し衆生の願を滿すが故に名く。

(二) 法　或は寶の字か。

(三) 明王地　明王とは眞言王なり、眞言を以て加持する地を明王地といふ。

(四) 清　一本に無し、又祥の下に之の字あり。

先づ持地を以て教命の如く　復た次に本尊を安置せば
行者自ら須らく己が座を敷くべし　尊の面を西方に目前に在け
行者は像の前にして東に面して坐し　清淨に沐浴して香を身に塗り
兼ねて新淨の妙衣服を著して　又た種種の供養の具を持して
歩歩に八葉の蓮華を想ひ　地を變じて濁穢なしと存想せよ
加持護身して精室に入り　像を前に安置して念誦すべし

(一)大心密言品第二

先づ大心眞言王を用ひて　澡浴洗淨して結護の法をせよ
水を呪して身に灑ぎ衣を加持して　復た想念すべし皆成就すと
此の如くの五種隨て次第して　都べて大明及び本印を用ふ
唵波怛摩進跢末尼摩賀惹嚩引囉吽
澡豆沐浴の具を各々呪すること七遍して、然して後に澡洗せよ、想へ水白色にして甘露のごとしと。又た想へ自身の垢穢煩惱も、此の水を受け已りぬれば、一切の塵勞皆悉く(二)落ち盡くと。洗浴し畢已りなば洗淨すべし、土少し許りを(三)取て加持すること七遍

(一)大心密言品　[illegible]
(二)落　一本になし。
(三)取　一本に案に作る。

して、時に隨て洗淨して、然して後に衣を著する時に其の衣も亦復加持すること七遍し、此の如くの、想を作すべし、我れ今此の身に金剛の甲を被ると、法に依て訖已て即ち身に灑ぐべし、水一掬を用ひて加持すること七遍して、其の身に散灑して想へ、虛空の中より諸の寶華を雨らして世界に遍滿すと、便ち護身すべし、此の密印を結び誦持すること七遍して七處を印せよ、心と及び兩の肩と兩の(一)眼と兩の膝となり、頭上に散せよ、(二)亦た大護身を成じ已て即ち結界すべし、若し壇界を結せば四門を開いて結界すべからず、若し結護を作さば皆用心すべし、亦た鋪置次第して即ち啓請等の(三)事を作せ。

(四)根本密言品第三

復た根本軌儀の法を說かん　想念して大聖王を奉請し
此の密言を誦して及び印を結んで　一一自ら(五)想へ彼の山に往いて
存心頂禮して請し奉り　尊者を迎へ引いて道場に入ると
復た遏伽を用ひて授與し　香華飲食及び(六)塗香
燈と蓋と幢幡と藥等を兼ぬるとを　如法に彼の明王に供養すべし

(一)眼　一本に胸に作る。
(二)亦　一本に二の字に作る。
(三)事　一本に畢の字に作る。
(四)根本密言品　此の品中に根本の[illegible]を說く。
(五)想　一本に須の字に作る。
(六)塗香　一本に塗身に作る。

想念して尊者を供養し已て　便に隨ひ珠を持して密言を誦せよ

先世の過を悔いて及び發願し　誠を至して端坐して明王を觀せよ

行者の像の前にして端坐して思惟し、存心に諦かに(一)布多勒伽山の衆寶莊嚴して、華果茂盛なるを觀せよ、其の山の頂上に聖者の宮殿本より其の中にあり、想ふべし聖者、殿中に安坐して殊妙の供具あり、其の身を莊嚴したまへり、行者此の心想の中に於て、自ら彼の山に往いて尊者を迎請して道場に引入し、壇の中心蓮華臺上に於て聖者を安置せよ、次に遏伽水を奉り新たなる銅器に於てし、或は白瓷器を用ひて香水を盛り聖者に奉れ、便ち眞言を誦して復た想へ、此の水を聖者受けたまひ已て遍ねく四方に灑ぎ、及び妙身に灑ぎたまふ、行者細かに觀せよ、尊、水を灑ぎ已んぬれば、三千大千世界瑠璃のごとくにして、內外明徹にして中に一物なしと。遏伽を奉り已て次に復た香華・飲食・塗香・末香・燈蓋を供養するの事、一一に加持するに眞言及び印を以て(二)供養し畢已て、本尊聖者の前に於て其の身を悔謝し已が過を呵責して、次に復た願を發して、心の所求に隨ひて悉く皆陳說せよ、其の想の中に於て壇の三門を結せよ、(三)唯し西門を留めよ、復た大界を結し身の外に四方に周帀して鋪置し、及び虛空界までせよ、

(一) 布多勒伽山　補陀洛山のこと。

(二) 供養　一本に供養事に作る。

(三) 唯し云云　西門を結せざるは出入のためか。

次に塗香を用ひて手臂の(一)上に塗つて、然して後に念誦せよ、念珠を執て珠を以て香に熏じて、二手合掌して再三頂戴して是の如くの言をなせ、(二)我念存心、聖者に承事して此の密言を持す、唯し願くは尊者、大悲を捨てず本誓に違ひたまふこと莫れ、弘誓願を發して速かに一切妙莊嚴の身を現じたまへ、我れ若し見已んなば現身に法雲地を得證して、常に尊者に侍し左右を離れじと、此の願を發し已て便ち根本祕密眞言を誦して曰く。

曩上謨引阿去引囉怛曩上二合怛囉二合夜引(三)長野一曩上莫阿去哩野二合引嚩路枳帝三濕嚩二合囉野四冒地薩怛嚩二合引野五摩賀薩怛嚩二合引野六摩賀迦去嚕捉去迦去野七怛佗野二合佗去八唵九左訖囉二合嚩底十進跢末捉去十摩訶跛納冥十二合嚕嚕底瑟吒十三入嚩二合囉十四阿訖羅灑二合野十五吽引泮吒十六娑嚩二合引賀引

此の眞言を誦し(四)七日の中に於て三十萬遍を滿せば、聖者即ち持誦人の前に現じて、心の所求に隨ひて皆成就することを得せしむ。若し常に持念して每日三時、時別に念誦すること一千八遍或は百八遍、是の如くして數三十萬遍に滿せば、即ち悉地を成せん、時別に皆迎送の事、(五)付囑等の法をなせ、(六)大心密言に曰く

(一) 上　一本になし。

(二) 我念存心　一本に珍重心に作る。

(三) 長引　細註一本に去引に作れり。

(四) 七日の中に云云　大呪三十萬遍を七日間に誦すること恐くは難し、準提の軌に準ぜば歸命を除きて滿すべきか。

(五) 付囑等　所誦の眞言の遍數を以

て今は本尊に付囑して主掌し守護して散失せしめず成就の時に至り之を賜へと願ふなり。

(六)大心密言　前の大心密言と異る。

(一)麗　一本にないよしとす。

(二)小心密言品　行者本尊を淨土に送り奉ること五度までして辭し歸る。

(三)方　一本に宮に作る。

唵(ランバ)嚩(ラ)羅(ラ)五(ノ)曩(ノウ)上娜(ダ)跛(ハンド)納(ナ)冥(イ)二(シンダ)合進(シン)跢(ダ)末尼(マニ)上摩(マカ)賀(ガ)入(ジン)嚩(バ)二(ラム)合囉(ラ)吽(ハウム)引泮(ハンバ)吒(ソワカ)娑(ソハ)嚩(ハ)二合賀引

(二)小心密言品第四

復た最勝小心王を說かん　能く一切の諸の悉地を成ず

三業齊しく用ひて妙印を結んで　祕眞言を誦して付囑せよ

又た想中に於て結界を除き　次に遏伽を奉て四方に灑げ

後ち己が過を責めて深く慚愧し　大聖者を引いて本宮に還らしめよ

尊者を彼の殿に安置し已て　辭し別れて自ら念せよ本(三)方に還ると

又た復た行者持誦し已るごとに付囑をなすべし、此の密印を結び及び眞言を誦して聖者に付囑して、是の如くの語をなすべし、所有(あらゆ)る遍數と及び持の功夫とを尊者に付囑したてまつる、唯し願くは尊者、受け取て散失せしめたまふこと勿れ。又た想へ手印は寶藏のごとし、一切の遍數藏中に安在して聖者に授與せよ、聖者受け已て蓮華中に置く、付囑をなし畢て亦た須らく過を悔いて、弘誓願を發すべし、然して後に復た聖者を宮に還すの引送の法を作せ、即ち結界を除き復た香水を取て四方に散灑し、及び聖者に還し送つて本宮に至らしめ、殿中に安置すと想へ、聖者坐し已て自ら辭し去て

(一)大印　大心眞言。密印は內縛して二中立て合せ二風を二火の背の第三節につけ二空並べ立つるなり。

(二)第二根本眞言印　八葉の印なり、請召には二大來去す。

、却つて本方に還るべし、小心密言に曰く、

唵(ランバ)嚩(ラ)引羅(ラ)娜(ダ)跛(ハンド)納(ナ)冥(イ)二(シンダ)合吽(ハウム)引

此の中の密印の相貌を我れ今之を說かん、初に(一)大印を作し、種種の塗香を用ひて手臂に塗て、然して後に印を結んで頂戴して、心に當てゝ合掌し、二小指及び無名指を鉤して掌中にあらしめ、其の二頭指、中指の背の第二の節の上を押して、二大指並べ堅てよ、此れは是れ大心眞言の密印なり、要らず須らく共に用ふべし、加持をなす所其の祕密言各々誦すること七遍して、各印を以て之を印して、或は擲げ或は止む、要らず當さに想成すること一一法の如くなるべし、中に就いて心餘境を緣じて世法に隨順することを得ざれ、行住坐臥諸佛甚深の境界に安在せよ、若し行者あつて此の法を修する者は、久しからずして即ち一切種智を成ずべし。

(二)第二根本眞言印

二手を以て腕相ひ着けて、當さに胸の前に在くべし、其の十指並べ散して二小指及び二大指を並べ堅てゝ蓮花の形の如くせよ、亦た前の法に依て之を印し之を止む、惟だ迎請のみ有て母指來去せよ。

(一)第三小心眞言印未敷蓮合掌、最極祕印なり。

(二)此の　一本には此の法とあり。

(三)除災護摩念誦品　已下に四種護摩を說く。

(四)出世法　一本に出世間に作る。

(五)相　一本に法とす

(六)怨　一本に惡に作る。

(七)持護摩　一本に持誦護摩に作る。

(一)第三小心眞言印

二手を以て虛心合掌して未開蓮花のごとくせよ、若し付囑の時は前に依て想念し、
尊者を發遣するには、二大指を開け、此の小心密印は蓮花部一切處に通じて用ふべし。
我れ今大蓮花部三昧耶の中に於て、(二)此の祕密甚深念誦の次第を略出す、其の修行者
錯り傳ふることを得ざれ、眼目を護るが如くせよ、若し能く是の如くすれば、一切の
聖者皆大いに歡喜して此の人を憶念し、一切の善神日夜に常に護りて左右を離れず。
成就世間出世間(三)除災護摩念誦品第五
我れ今蓮花部に順じて　略して如意摩尼輪の
能く諸部に勝れたる最祕密の　世法と(四)出世法とを成就することを說かん
念誦に都べて四種の(五)相あり　行者諦かに聽け我れ之を說かん
初に息災の加持の法を作し　第二に增益福智成ず
第三は心に隨て愛念する法　第四は一切の(六)怨を降伏するなり
此の四種の(七)持護摩の事は　上中下法あり次第に陳べん
若し息災を成就せんと欲はゞ　先づ安忍慈悲の心を發して

須らく無上の妙覺の地を求むべし　聲聞二乘の心を樂ふこと莫れ
復た若し大事を成就せんことを求めば　要らず當さに先づ轉障の法を作すべし
又た白檀の十六指なるを取て　一たび持し一たび燒いて己が名を稱へて
數百八或は千八に至らん　本より求願する所皆滿足すべし
行者若し他病を除かん時　或は國中の大災厄を滅し
或は自佗の災及び畜生までに　心を存して大聖を請すべし
其の一一の大城門に於て　中に各々本尊を安し
種種の殊妙の寶を以て莊嚴せりと想へ　六臂を思惟すること盡く說くが如し
又た想へ眉間より白光を出して　徐徐として廣く引いて世界に遍し
一切衆生の所有の殃　悉く皆頓に謝して所有なしと
或は想へ此の光我が身に入て　一切の罪障皆滅盡すと
罪滅し福生ずれば以て加持し　復た勤めて念誦すれば便ち成就す
增益福德品第六
我れ今略して福生の法を說かん　大慈悲の故に有情に順じて

菩薩の分身一切に遍す　彼の衆生の所樂の心に隨つて
又た復た諸の珍藏を安立す　種種の法門各の同じからず
百千萬國隨ふ所の者　一一勤求して皆悉く成ず
或は相法を說き或は無相　衆生の性の所趣に隨順して
佛法を建立して世界を護す　大聖の勢力不思議なり
(一)奉現一法速かに超越し　一法の中に於て復た三を現ず
三部各別にして三種あり　中に就て最初は是れ攘災なり
諸部の攘災は略して說き已んぬ　次に當さに增益を今之を說くべし
若し長壽と及び財資とを求め　復た聰明と聞持門とを樂ふに
或は宿命を以て前後を知らんことを求め　或は現世に力龍の如くなる事を欣はん
若し自の爲めに增益の福を作さば　先づ須らく每に三白食を喫すべし
若し長壽にして身に患なからんことを求めば　一火爐の蓮華の形を作し
深淺方圓皆一肘にして　又た五淨を取て其の中に塗れ
復た蘇蜜及び檀木を取て　一呪一燒して己が名を稱し

(一)奉現　奉親に作る。一本に

數百八と一千八とに至て　乃至三千まで前の儀に隨ふべし
若し先世の極重の業ありとも　萬遍に過ぎざるに悉く皆除かん
罪を除滅し已て福智を增し　即ち無病と及び命長とを得ん
若し他の爲めの故に此の事を作さば　但し彼の名を稱せよ法則は同じ
行者如法に存心をなし　每日(一)晨朝に柳木を取て
呪して(二)八百に滿し便ち之を嚼め　久しからずして一月或は三月にして
即ち能く心を開いて聰明を得ん　護摩を作さんには小心の呪を用ひよ
念誦するには根本大眞言を以てせよ　我れ此に略して增益の福を說かん
無福の衆生速かに加持して　(三)論なくんば此の數種の法を作せ
但し長命を願はゞ大に護身して　若し能く每日持すること千八せば
現世に即ち宿命通を得ん　日夜にて殷勤に修習すれば
所求の悉地成ぜずといふことなし　又た若し藥を服して色力を求めば
根本の眞言を以て之を加持して　念誦すること十萬滿足し已て
每に須らく空服に取て之を服すべし　三七五七復た七に過ぐるに

(一)晨朝　晨時に作る。一本に
(二)八百　百八か。
(三)論　一本に福に作る。

力九龍に同じて等うして差なけん　若し延年甘露藥を持せば
或は一劫を得(一)中劫を過ぎ　若し藥草を持して成就を求めば
諸部に過ぎて以て　牛酥と雌黄と雄黄等とのごときを成ずることを得ん
須らく一物を持して壇中に置くべし　白月一日或は十五日の
初夜より起首して之を念誦せよ　(二)一期持誦して間斷すること勿れ
三相を現ずるに及んで唯し之を限りとせよ　初に煖相を現ぜば聰智を成せん
第二の煙相は其の軀を隱す　第三に火現せば空に昇り去らん
此れは大仙人を成就することを得　悉地の牛酥をばまさに服すべし
雄黄等の藥は用ひて之を塗れ　我れ今此の增益を說き訖んぬ。
行者努力めて之を守護せよ

(三)隨心憶念品第七

我れ今復た隨順(四)事を說かん　人と非人と及び畜生と
又た鹽を取て大麥の麪を和して　所求心に隨て其の形に作り
男は左、女は右にして脚より興て　須らく(五)寶鐵刀を用ひて細かに截るべし

(一)中劫　一本に劫中に作る。
(二)一期　命終の一期に非ず、一七或は三七等の期限なり。
(三)隨心憶念品　敬愛の密語
(四)事　一本に等に作る。
(五)寶　一本にな し。

毎日三時に各々百八し　乃至千八せよ自ら心に隨ふ
若し羅遮(アランシヤ)を憶念せしめんと欲はゞ　所造の形を持して彼の名を稱して
護摩して亦た名號を念ずべく　八百を過ぎざるに即ち心に隨はん
若し雨を祈らんと欲はゞ青色にすべく　復た若し澇(ナカアメ)の時には赤色にすべし
燒火は乳汁ある木を用ふるべく　三日を過ぎざるに即ち之を成せん
作法するには至誠の意をもつてすべく　中に就て懈慢の心あることを得ざれ
若し諸天藥叉等を攝せば　類に隨て各各に本名を稱せよ
若し怨家あらんを歡喜せしめんとをもはゞ　念誦して亦た彼の心を轉ずる事を得ん
或は護摩を作し或は持誦せよ　上中下品の怨家別なり
上根の福報あるは三百遍　中下の福なくば再び之を稱せよ
隨心の念誦我れ略して說く　智者諦かに思惟すべし
一切の部の中に總じて攝し盡す　祕密最要の蓮華心なり
阿毗遮嚕迦品第八
我れ今彼の大聖を稽首し上る(たてまつ)　ために種種の方便門を現じたまふ

(一)雌木　松或は杉等には雌木あるなり。

(二)樂幽　此の二字書かならず、齒を叩くか。

(三)禮嚕根　降伏の用なり。

(四)大明王　本尊なり。

佛法を護するが故に忿怒を現ず　聖法を破滅する人を降伏す

此の中の火爐は三角にすべく　用ひて(一)雌木と兼ねて濕へる薪を燒け

若し此の法を作すには黑月を須ひ　或は一日及び月の頭を用ふ

體を露はし(二)樂幽及び忿怒にして　大聲にして持誦して彼の名を稱せよ

惡酥と惡油とを爐の底に擲げ　千八を滿せざるに自然に成せん

鬼神の卒暴の者を降伏するには　復た(三)禮嚕根を燒くべし

或は苦楝或は生木を燒き　麪を人の血に和して復た形を作り

一たび截り一たび呪して百八遍すれば　三日を過ぎざるに即ち調柔ならん

若し復た滅法者を降伏するには　意を加へて(四)大明王を供養し

諸の毒藥を用ひて爐中に燒け　又た濕薪を取て護摩を作すこと

三日の中に於て八百遍すれば　彼の惡人をして即ち廻心せしめん

復た若し護摩の事を作さゝれども　根本眞言明を持誦せば

降伏せんと欲する所の一切の者　句句に皆彼の名を稱すべく

其の數復た八百遍を滿せば　彼れ即ち自ら來て之を尊敬せん

(一)都攝の門　都表と意同じ。

(二)習　一本に集に作る。

法に依て略して此の調伏を說く　行者諦かに思惟すべく

甚深の祕密口訣の法　次第念誦(一)都攝の門なり

若し能く此の尊に承待する者は　是れ一生に善根を種うるにあらず

曾て無量の諸佛の所を經て　菩提究竟門を修(二)習せるなり

中に就て若し善知識に値へば　一生に即ち不壞の門に入る

我れ若し廣く此の功德を說かば　無量億劫に歎ずとも窮りなけん

今已に略して此の少を陳ぶるのみ　行者精心に之を勤修せよ。

國譯都表如意摩尼轉輪聖王次第念誦

祕密最要略法　終

離二。縮閏六。藏十五套九。本經に四家の請來あり、弘法大師の請來は一卷の經、自外三師の請來は並に二卷なり。譯に四譯あり。

(一) 難那　歡喜と翻譯す。
(二) 嗢波難那　近歡喜といふ。
(三) 娑伽羅　鹹海と云ふ。
(四) 無熱惱と云ふ。
(五) 大意と云ふ。
(六) 解脫處と云ふ。
(七) 蓮華と云ふ。

國譯大雲輪請雨經卷上

特進試鴻臚卿大興善寺三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

是の如く我れ聞く、一と時、佛難陀嗢波難陀龍王宮の吉祥摩尼寶藏大雲道場寶樓閣の中に在りて、大苾芻及び諸の菩薩摩訶薩衆と與なりき。復た諸の大龍王衆あり、その名を

(一)難那龍王　(二)嗢波難那龍王　(三)娑伽羅龍王　(四)阿那婆達多龍王　(五)摩那斯龍王　嚕嚕拏龍王　德叉迦龍王　持國龍王　嚩素吉龍王　(六)目眞隣陀龍王　伊羅跋拏龍王　(七)芬陀利龍王　威光龍王　吉賢龍王　雷聲龍王　大摩尼髻龍王　摩尼珠髻龍王　光燿火龍王　帝釋仗鋒龍王　帝釋幢龍王　帝釋杖龍王　瞻部幢龍王　吉祥龍王　大輪龍王　大鱗蛇龍王　光味龍王　月威龍王　具吉祥龍王　宋見龍王　善見龍王　善住龍王　摩尼瓔珞龍王　與雲龍王　持雨龍王　澍雨龍王　大拍脅聲龍王　小拍脅聲龍王　奮迅龍王　大撥拏龍王　大項龍王　深聲龍王　大

深聲龍王　大雄猛龍王　鴦鉢羅龍王　大步龍王　螺髮龍王　質怛羅斯
那龍王　大名稱龍王　翳羅葉龍王　徧光龍王　驢耳龍王　商佉龍王
捺度羅龍王　鴦波捺度羅龍王　安穩龍王　腹行龍王　呼嚧拏龍王
阿波羅龍王　藍謨羅龍王　吉哩弭賒龍王　黑色龍王　帝釋軍龍王
那羅龍王　鴦波那羅龍王　劒謨囉龍王　捺囉弭拏龍王　端正龍王　象
耳龍王　猛利龍王　黃色龍王　電焰龍王　大電焰龍王　天力龍王
嚩嚕蘖蹉龍王　妙蓋龍王　甘露龍王　河津龍王　瑠璃光龍王　金髮龍
王　金光龍王　月幢光龍王　日光龍王　警覺龍王　牛頭龍王　白色
龍王　黑色龍王　焰摩龍王　沙彌龍王　蝦蟇龍王　僧伽吒龍王　尼
泯馱囉龍王　持地龍王　千頭龍王　寶髻龍王　不空見龍王　雲霧龍王
蘇屣那龍王　麌波羅龍王
王　鮫頭龍王　持毒龍王　食毒龍王　蓮華龍王　大尾龍王　騰轉龍
王　可畏龍王　善威德龍王　五頭龍王　波哩羅龍王　古車龍王　嗢
怛羅龍王　長尾龍王　鹿頭龍王　擯比迦龍王　醜相龍王　馬形龍王

三頭龍王　龍僊龍王　大威德龍王　那羅達多龍王　恐怖龍王　焰光
龍王　七頭龍王　大樹龍王　愛見龍王　大惡龍王　無垢威龍王　妙
眼龍王　大毒龍王　焰肩龍王　大害龍王　大瞋忿龍王　寶雲龍王
大雲施水龍王　帝釋光龍王　波陀樹龍王　雲月龍王　海雲龍王　大香
俱牟陀龍王　華藏龍王　赤眼龍王　大幢旛龍王　大雲藏龍王　雪山龍
王　威德藏龍王　雲戟龍王　持夜龍王　雲雨龍王　雲雨龍王　大雲雨
龍王　大光龍王　雲聲離瞋恚龍王　惡瓶龍王　龍猛龍王　焰光龍王
雲蓋龍王　凝祁羅目佉龍王　威德龍王　出雲龍王　無邊步龍王　蘇
師拏龍王　大身龍王　狠腹龍王　寂靜龍王　勤勇龍王　老鳥龍王
烏途羅龍王　猛毒龍王　妙聲龍王　甘露堅龍王　大散雨龍王　震聲
龍王　相擊聲龍王　皷聲龍王　注甘露龍王　雷擊龍王　勇猛軍龍王
那羅延龍王　馬口龍王　尼羯吒龍王

是の如く等の諸大龍王あり而も上首となる。復た八十四俱胝百千那庾多の諸の龍王有て俱に來て會坐す。時に彼の一切の龍王等座より起て各の衣服を整へ偏に右の肩を袒

(一)そのとき云々以下龍の供養をあぐる中今は總じて供養雲海を明す。

ぎ掌を合せて佛に向ひ即ち種種の無量無邊阿僧祇數の微妙の香華●塗香●末香●華鬘●衣服●寶幢●旛蓋●龍華●寶冠●眞珠●瓔珞●寶華●綵彩●眞珠●羅網を以て如來の上へに覆ひ衆々の妓樂を作し、大般重奇持の心を起し、右に佛を遶り已て却いて一面に住しき。

(二)そのときに諸の龍心に是の願を發せり。あらゆる一切の諸の世界海の微塵身海、一切諸佛菩薩衆海一切諸世界海に徧じ、已にあらゆる一切四大地水火風微塵等海にあらゆる一切諸色影像微塵數海に過ぎ、已に無量不可思議不可宣說阿僧祇數諸身等海を過ぎ一身に于て無量阿僧祇の諸の手雲海を化作して十方に徧滿し、又一一の微塵の分の中にをいて無量の供養雲海を化出して十方に徧滿せん。我れ等咸く皆な持して以て一切諸佛菩薩の衆海無量無數にして、思議すべからず宣說すべからず、阿僧祇數にして間斷あることなく、普賢行願の色身の雲海、虛空際に滿ちて住せる、是の如く菩薩の色身雲海に供養したてまつる。一切の寶の衆の光明の色ある一切の日月身の宮殿道場雲海を以てし、一切の寶鬘雲海を以てし、一切の寶光明藏樓閣雲海を以てし、一切の末香樹藏雲海を以し、一切の塗香燒香現一切色雲海を以てし、一切の諸の音樂聲を繫つ雲海を以てし、一切の香樹雲海を以てし、是の如く等の無量無邊にして思議すべからず、

(一)復た一切云々已下十種の供養雲海を明す中、第一摩尼雲海を明す

(二)復た云々第二樓閣雲海を明す。

宣說すべからざる阿僧祇數なる、是の如くの一切の供養雲海、是の如く等の虛空際に滿ちて住せるを以て我れ等咸く皆な一切の諸佛菩薩の衆海を供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。(一)復た一切の莊嚴境界照耀藏摩尼王雲海の虛空際に滿ちて住せるを以て、我等咸皆一切の諸佛菩薩の衆海を供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。復た一切の普徧寶雨莊嚴摩尼王雲海を以てし、一切の寶光焰●佛決定音聲●摩尼王雲海を以てし、一切の佛法平等音聲普徧摩尼寶王雲海を以てし、一切の普門寶焰諸佛化光雲海を以てし、一切の衆光明莊嚴顯現不絕摩尼寶王雲海を以てし、一切の光焰順佛聖行摩尼寶王雲海を以てし、一切の顯現如來不可思議佛刹電光明摩尼王雲海を以てし、一切の間錯寶徽塵三世佛身影像示現徧照摩尼王雲海を以てし、是の如く等の虛空際に滿ち住せるを以て、我れ等咸く皆な一切の諸佛菩薩の衆海を供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。

(二)復た一切の寶香間錯華樓閣の雲海を以てし、一切の無邊の色ある摩尼寶王莊嚴樓閣の雲海を以てし、一切の寶燈香焰光樓閣の雲海を以てし、一切の眞珠妙色樓閣の雲海を以てし、一切の華臺樓閣の雲海を以てし、一切の寶瓔珞莊嚴樓閣の雲海を以てし、

一切の寶徽塵數嚴飾無量莊嚴示現樓閣の雲海を以てし、一切の徧滿妙莊嚴樓閣の雲海を以てし、一切の普門華幢幡垂鈴羅網樓閣の雲海を以てし、是の如く等の虛空際に滿ちて住せるを我等咸く皆な一切の諸佛菩薩衆海を供養し恭敬し尊重禮拜したてまつる。

(一)復た一切妙金寶間雜莊嚴瓔珞寶歡喜藏師子座雲海を以てし、一切の華照耀間雜師子座雲海を以てし、一切の帝青摩尼(二)閻浮檀妙色蓮華藏師子座雲海を以てし、一切の摩尼燈蓮華藏師子座雲海を以てし、一切の摩尼光寶幢妙蓮華藏師子座雲海を以てし、一切の寶莊嚴妙色蓮華藏師子座雲海を以てし、一切の樂見因陀羅蓮華光藏師子座雲海を以てし、一切の無盡光焰威勢蓮華藏師子座雲海を以てし、一切の寶光普照蓮華藏師子座雲海を以てし、一切の佛音聲蓮華光藏師子座雲海を以てし、是の如く等の虛空際に滿ちて住せるを、我等咸皆な一切諸佛菩薩衆海を供養恭敬し尊重禮拜したてまつる。

(三)復た次に一切の妙香摩尼樹の雲海を以てし、一切の諸葉周匝して皆な合掌の如く香氣を出す樹の雲海を以てし、一切の莊嚴現無邊明色樹雲海を以てし、一切華雲垂布せる寶樹の雲海を以てし、一切の無邊莊嚴藏を出す樹の雲海を以てし、一切の寶焰輪電樹の雲海を以てし、一切の旃檀末菩薩の神通身を示現する樹の雲海を以てし、一切の不

(一)復た云々第三師子座雲海を明す。
(二)閻浮檀　閻浮提のこと
(三)復た　第四摩尼樹雲海を明す。

(一)復た云々第五諸藏師子座雲海を明す。
(二)復た云々第六寶帳雲海を明す。

思議無邊樹神莊嚴菩提道場寶衣藏日電光明樹の雲海を以てし、一切の妙音聲流出意樂音普徧金光樹の雲海を以てし、是の如き等の虛空際に滿じて住せるを我等咸皆な一切諸佛菩薩衆海を供養恭敬し尊重禮拜したてまつる。(一)復た一切の無邊寶色蓮華藏師子座雲海を以てし、一切周匝摩尼王電藏師子座雲海を以てし、一切の瓔珞莊嚴藏師子座雲海を以てし、一切の諸の妙寶鬘燈焰藏師子座雲海を以てし、一切の圓音出寶雨藏師子座雲海を以てし、一切の華香蓮華莊嚴寶藏師子座雲海を以てし、一切の佛座現莊嚴摩尼王藏師子座雲海を以てし、一切の闌楯垂瓔珞莊嚴藏師子座雲海を以てし、一切の摩尼寶峰金末香胎藏師子座雲海を以てし、一切の妙香寶鈴羅網普莊嚴日電藏師子座雲海を以てし、是の如く等の虛空際に滿じて住せるを、我等咸皆な一切諸佛菩薩衆海を供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。(二)復た一切如意摩尼寶王帳雲海を以てし、一切帝青寶華藥一切華莊嚴帳雲海を以てし、一切香摩尼帳雲海を以てし、一切寶燈焰形帳雲海を以てし、一切神力出聲摩尼寶王帳雲海を以てし、一切の華光焰寶帳雲海を以てし、一切妙鈴普徧出聲焰帳雲海を以てし、一切無邊色無垢妙摩尼臺蓮華焰帳雲海を以てし、一切金藥臺火光寶幢帳雲海を以てし、一切不思議莊嚴諸光瓔珞帳雲海を以てし、

(一)復た云々第七寶蓋雲海を明す。

(二)復た云々第八光明輪雲海を明す。

(三)復た云々第九光焰雲海を明す。

是の如く等の虚空際に滿じて住せるを我等咸皆な一切諸佛菩薩衆海を供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。(二)復た一切の雜妙摩尼寶蓋雲海を以てし、一切の無量光明莊嚴華蓋雲海を以てし、一切無邊色眞珠藏妙蓋雲海を以てし、一切諸佛菩薩慈門普摩尼玉蓋海を以てし、一切妙色寶焰華鬘妙蓋雲海を以てし、一切の寶光明莊嚴垂鈴羅網妙蓋雲海を以てし、一切摩尼樹枝瓔珞蓋雲海を以てし、一切の日照明徹焰摩尼王諸香煙蓋雲海を以てし、一切の旃檀末藏普徧蓋雲海を以てし、一切の廣博佛境界電光焰莊嚴普徧蓋雲海を以てし、是の如く等の虚空際に滿じて住せるを、我等咸皆一切諸佛菩薩衆海を供養し恭敬し、尊重し禮拜したまつる。(三)復た一切寶明輪雲海を以てし、一切無間寶焰光形輪雲海を以てし、一切華雲電光輪雲海を以てし、一切の寶光佛化寶光明輪雲海を以てし、一切の佛刹現入光輪雲海を以てし、一切の普門佛境界吼聲寶枝光輪雲海を以てし、一切の佛刹吠瑠璃寶性摩尼王光輪雲海を以てし、一切の無邊衆生色心刹那顯現光輪雲海を以てし、一切の佛願生放悅意聲光輪雲海を以てし、一切の所化衆生會妙音摩尼王光輪雲海を以てし、是の如く等の虚空際に滿じて住せるを我等咸皆一切諸佛菩薩衆海を供養し恭敬し、尊重し禮拜したてまつる。(四)復た、一切摩尼藏焰雲海を以てし、一切佛色聲香味觸光焰雲海を以てし、一切の寶焰雲海を以てし、一切佛法震聲徧滿焰雲海を以てし、一切佛刹莊嚴電光焰雲海を以てし、一切寶末光焰雲海を以てし、一切劫數佛出音聲敎化衆生光焰雲海を以てし、一切無盡寶華鬘示現衆生光焰雲海を以てし、一切諸座示現光焰雲海を以てし、是の如く等の虚空際に住せるを我等、咸皆一切諸佛菩薩衆海を供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。(五)復た、一切無邊色寶光雲海を以てし、一切普徧摩尼王寶光雲海を以てし、一切の廣博佛刹莊嚴電光雲海を以てし、一切香光雲海を以てし、一切莊嚴光雲海を以てし、一切佛化身光雲海を以てし、一切種種寶樹華鬘光雲海を以てし、一切衣服光雲海を以てし、一切無邊菩薩諸行名稱寶王光雲海を以てし、一切眞珠燈光雲海を以てし、是の如く等の虚空際に滿じて住せるを、我等咸皆一切諸佛菩薩衆海を供養し、恭敬し尊重し禮拜したてまつる。(六)復た、一切不可思議摩尼寶光輪雲海を以てし、一切寶焰蓮華光雲海を以てし、一切無邊色摩尼寶光輪雲海を以てし、一切摩尼眞珠色藏雲海を以てし、一切摩尼妙寶旃檀末香雲海を以てし、一切摩尼寶蓋雲海を以てし、一切清淨諸妙音聲悅可衆心寶王雲海を以てし、一切日光摩尼莊嚴雲海を以てし、一切無邊寶藏雲海を以てし、一切普賢色身雲

(一)復た云々第十光雲海を明す。

(二)復た云々諸供養を明す。

海を以てし、是の如く等の虚空際に滿じて住せるを我等咸皆な一切諸佛菩薩衆海に供養し恭敬し尊重し禮拜したてまつる。そのときに、諸の龍王等是の願を作し已て佛を遶ること三匝し、頭面に禮を作して、佛の聖旨を得、各各還りて次第に依て坐せり。そのときに、一龍王あり、無邊莊嚴海雲威德輪蓋と名く、三千大千世界の主なり。不退轉を得、願力に住するが故に、如來を供養し恭敬し、禮拜し、正法を聽受せんと欲せんがために、此の贍部洲に來る。時に、彼の龍王座より起ちて衣服を整理し、偏に右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著け、掌を合せ佛に向ひ、佛に白して言さく、世尊、我れ今少しく問ふことあらんと欲す。如來正徧知、惟だ願はくは聽許したまへ。そのときに、世尊、(一)無邊莊嚴海雲威德輪蓋龍王に告げて言はく、汝ぢ大龍王、若し疑あらば、恣に汝が問ふことを聽さん。吾れ當に汝がために分別し、解說して、汝が心をして喜ばしむべし。是の語を作し已りたまふ時に、無邊莊嚴海雲威德輪蓋龍王、即ち佛に白して言さく、唯然なり、世尊、云何んが能く諸の龍王等をして一切の苦を滅し、安樂を受くることを得せしめん。安樂を受け已て、又た、此の贍部洲において、時に甘雨を降して一切の樹木●叢林●藥草●苗稼●を生長し、皆な滋味を生せしめん。贍部洲

(一) 無邊莊嚴海雲威德輪蓋龍王是れは一切龍王の長なり。

(一) 慈を行ずる云々龍は瞋恚多きが故に慈悲の行を敎ふるなり。

の一切の人等をして悉く快樂を受けしめん。そのときに、世尊、是の語を聞きたまひ已て、即ち無邊莊嚴海雲威德輪蓋大龍王に告げて言はく、善いかな善いかな、汝ぢ今彼の諸の衆生等のために利益を作さんが故に、能く如來に是の如くの事を問ひたてまつる。汝ぢ大龍王、善く聽け、善く聽け、極めて善く聽け、汝ぢ當に作意すべし。我れ汝がために說かん。龍王、汝ぢ一法を成就せば、一切の諸龍をして諸の苦を除滅して、安樂を具足せしめん。何に者か一法なる。謂はゆる、慈を行ずるなり。汝ぢ大龍王、若し天人の大慈を行ずるものあらば、火も燒くこと能はず、刀も害すること能はず、水も漂はすこと能はず、毒も中ること能はず、內外の怨敵も侵擾すること能はず。安樂に睡眠し、安樂に覺寤して、自の福を以て、其の身を護持し、大福を以て威德を獲、他に陵されず、人天の中において、形貌端嚴にして、衆に愛敬せられ、所行の處に、一切無礙にして、諸の苦滅除して、心に歡喜を得て諸樂具足す。大慈力の故に、命終の後には梵世に生ずることを得べし。汝ぢ大龍王、若し天人ありて大慈の行を修せば是の福利を獲ん。是の故に、龍王、慈の身業を以て、慈の語業を以て、慈の意業を以て應當に修行すべし。復次に、龍王、陀羅尼あり、施一切衆生安樂と名く。汝ぢ龍王等當

に須らく讀誦して念を繼で受持して能く一切の諸龍の苦惱を滅してそれに安樂を與ふべし。彼の諸龍等既に樂を得已て贍部洲において即ち能く時に依て甘雨を降注して、一切の樹木●叢林●藥草●苗稼●皆な增長することを得せしめん。そのときに、龍王、復た、佛に白して言さく、何に者をか名けて一切樂陀羅尼句と爲る。その時に、世尊、即ち陀羅尼を說て曰はく。

怛儞也他、駄囉抳、駄囉抳、嗢跢囉、三鉢囉、底瑟恥跢、尾惹野、韈囉拏、薩底也、鉢囉、底枳孃、薩賀枳孃曩、嚩底、嗢荅播娜顎、尾嚧賀顎、阿鼻矚左顎、阿鼻弭也賀囉、輸婆嚩、底、阿惹麽、底、曀、禁婆路、底、嚩賀訶囉、訖禮餉度曩、播跛戊駄野、沫嶷顎哩賀迦、達摩曩、秣默路迦尾、底銘、囉賀囉惹索、耨佉拾麽曩、薩嚩母駄、嚩路迦曩、地瑟恥帝、鉢囉枳孃、曩霓、娑嚩賀。

佛、龍王に告げたまはく、此の陀羅尼句は一切の諸佛加持したまふ。汝等常に須らく受持讀誦して一切の義利を成じ、法門に入ることを得べし。是れを施一切樂の句と名く。復た次に龍王に、大雲所生の加持、莊嚴威德藏、變化智憧、降水輪吉祥金光、毗盧遮那の、一毛端より生じたまふ所の種姓の如來名號あり。汝等亦復た憶念受持すべし、彼の如來の名號を持てば、一切の諸龍の種姓族類、一切の龍王の眷屬徒衆、並びに、諸の龍女の龍宮に生ぜる者のあらゆる苦惱悉く皆な除滅して、それに安樂を與ふべし。此の故に龍王、應當に彼の如來の名號を稱すべし。

南無毗盧遮那藏大雲如來　南無性現出雲如來　南無持雲雨如來　南無吉祥雲威德如來　南無大興雲如來　南無大風輪雲如來　南無大雲閃電如來
南無大雲勇步如來　南無須彌善雲如來　南無大雲如來　南無大雲輪如來
南無大雲光如來　南無大雲師子座如來　南無大雲蓋如來　南無大善現雲如來　南無雲覆如來　南無大雲如來　南無行雲如來　南無光輪普徧照耀十方雷震聲起雲如來　南無大雲清涼雷聲深隱奮迅如來　南無布雲如來　南無虛空雨雲如來
南無疾行雲如來　南無雲垂出聲如來　南無雲示現如來　南無廣出雲如來
南無擊雲如來　南無雲支分如來　南無如著雲衣如來　南無雲苗稼增長如來　南無垂上雲如來　南無飛雲如來　南無雲名如來　南無散雲如來
南無大優鉢羅華雲如來　南無大香身雲如來　南無大涌雲如來　南無大自在雲如來　南無大光明雲如來　南無大雲施如來　南無大雲摩尼寶藏如來

南無雲聲藏如來　南無雲族如來　南無雲攝受如來　南無散壞非時雲雹如來　南無大雲空高響如來　南無大發聲雲如來　南無大降雨雲如來　南無族色力雲如來　南無大雲拜雨水如來　南無流水大雲如來　南無大雲滿海如來　南無陽焰旱時注雨雲如來　南無邊色雲如來　南無一切差別大雲示現贍部洲檀飛雲威德月光焰雲如來等應供正徧知、三藐三佛陀。

そのときに、世尊、是の如來の名を說き已て、無邊莊嚴海雲威德輪蓋龍王に告げて言はく、汝大龍王、此れ等の如來の名號を汝等一切の諸龍若し能く受持して名を稱して禮敬せば、一切の諸龍のあらゆる苦難皆な悉く解脫して普ねく安樂を獲しめん。安樂を得已んなば即ち能く此の贍部洲において甘雨を降注して、一切の藥草●叢林●樹木●苗稼●をして悉く皆な增長せしめよ。そのときに、三千大千世界の主、無邊莊嚴海雲威德輪蓋龍王、復た佛に白して言さく、世尊、我れ今ま如來を啓請して、陀羅尼句を說かしめたてまつりて、未來世の時において、贍部洲の亢旱して雨を降らさゞらん處において、此の陀羅尼を誦せしめん。即ち常に雨を降すべし、飢餓の惡世に、疾疫多饒く、非法に鬪諍し、人民恐怖し、妖星變怪わつて災害相續せん。是の如く等の無量の苦惱あらんを、佛の威神加持を以て皆な除滅することを得しめん。惟だ願はくは、世尊、大慈悲を以て、諸の衆生を愍みて、爲に陀羅尼句を說て諸龍を警覺して悉く受持せしめ、能く諸天をして歡喜し踊躍せしめ、能く一切の諸魔を摧て、衆生の災害逼惱を遮止し、能く息災吉祥の事を作し、能く妖星變怪を除き、如來の說きたまふ所の(一)五種の雨障も亦皆な消滅して、即ち此の贍部洲をして、雨澤時を以てせしめたまへ。惟だ願はくは我等がために說きたまへ。

(一)五種雨障　降雨に五種の障礙あると。起生經云一には當に雨を降らすときに羅睺阿修羅王雨手を以て雨雲を撮りて海中に擲ぐ。二には火生じて雨雲燒滅す。三には風起りて雲を掃ふ。四には諸の衆生放逸にして清淨の行を污すが爲めの故に天雨を降らさず。五には閻浮提の人慳貪嫉妬邪見顚倒あるが故に天則ち雨を降らさず（大意）云々。

國譯大雲輪請雨經卷上 終

國譯大雲輪請雨經卷下

唐の特進試鴻臚卿三藏沙門大廣智不空　詔を奉じて譯す

そのときに、世尊、此の無邊莊嚴海雲威徳輪蓋龍王の是の如くの請を聞き已て、讃して言はく、善いかな、善いかな、汝大龍王、能く如來一切有情を利益し安樂したまへと請す。是の故に、龍王、汝今聽け、善く聽け、極めて善く聽け、汝當に作意すべし、我れ汝がために說かん、此の陀羅尼をば名けて、大悲雲生震吼奮迅勇猛幢と爲す、一切如來威神を以て加持し、隨喜し、宣說して一切衆生を利益安樂したまふが故なり、未來世において、若し亢旱の時には、能く雨を降らさしめ、若し滯雨の時には、亦能く止めしめ、饑饉疾病あらば亦た能く除滅す、普ねく諸龍に告げて知聞せしめ、復た諸天をして歡喜踊躍し、能く諸魔を摧き、一切有情を安穩ならしめんがため、此の陀羅尼を說かん、曰はく、

怛尼也佗、摩賀枳孃曩、嚩婆娑顰、室利多、帝祖、洛乞史銘、涅呾茶、尾訖囉莫、嚩日囉僧伽多寧、鉢囉摩尾囉惹、涅摩羅、虞拏、計覩、素哩野、鉢囉陛、尾摩朗誐、拽瑟置、跛囉跛囉跛囉跛囉跓砧母跓砧母、賀曩賀曩、摩賀鉢囉陛、尾度多謨、輪馱迦𡃤、鉢囉枳孃、秫第跛哩布羅抳、毎怛𡃤毎怛𡃤、毎怛哩味囉、那莫塞訖哩帝、毎怛覽、母馱𡃤、惹攞若攞惹攬母馱𡃤、冐地孕誐、渠素銘娜捨麽黎、左咄吠舍囉儞曳、阿瑟吒娜舍吠抳迦、母馱達謎、輸婆麽底本寧野囉始、輸婆羯磨、三門尾帝儼避𡃤、尾囉惹娑計、尾補黎、尾勢灑、鉢囉跛帝、顰囉、室囉嚩達謎、薩嚩路迦、惹瑟姹、室𡃤瑟姹、嚩囉鉢囉嚩𡃤、阿努怛𡃤、阿僧霓、馱囉馱囉地哩地哩、度嚕度嚕扇多麽帝扇多播閉薩囉薩囉、左囉左囉唧哩唧哩、祖嚕祖嚕、跛囉麽、母馱拏麽帝、麽賀鉢囉枳孃播囉弭帝娑嚩賀、

南無智海毗盧遮那如來、南無一切諸佛菩薩摩訶衆。

我れ今一切諸龍を召請して贍部洲に于て、雨を降さんがための故に、一切の佛菩薩の誠實の眞言を以て、諸龍を誡敕して、五障を除滅せしむ。復た、佗囉尼を說て曰はく、

怛你也佗、薩囉薩囉、悉哩悉哩、素嚕素嚕、曩誐喃、惹嚩惹嚩、尒尾尒尾、祖舞祖舞、摩賀曩誐阿蘖攃𡀩母馱薩、底曳寧訶贍部你尾閉鉢囉韈殺陀鑁、左囉左囉、唧哩唧哩、祖嚕祖嚕、摩賀曩誐地跛底曩麽蘖攃他暴、摩賀曩誐、母馱薩底曳寧訶贍部儞尾閉鉢囉

韈殺陀鏤駄囉駄囉、地哩地哩、度嚕度嚕、母駄薩、底曳曩、薩嚩曩麽嚩訶以史夜銘、
毎怛囉喞帝曩迦嚕拏喞帝曩、母儞跢、喞帝曩、鄔閉乞灑、喞帝曩、薩嚩母駄、冐地薩
怛嚩、地瑟姹、寧曩、摩賀夜曩、捨曳曩、蘖摖侘、摩賀曩誐、地跛多野、娑麽囉多、
母駄南、母駄達磨喃、冐地薩怛嚩、虞拏南、跛囉跛囉・鼻哩鼻哩、部嚕部嚕、摩賀惹
攬謀謎伽、嚩哩駄哩抳摩賀部惹誐跛哩迦囉、毎怛囉喞帝曩、蘖摖多、娑麽囉多、嚩
囉舍娑難、舍娑覩覩伽、吒伽吒、岐致岐致、具誅具誅、鄔佗囉枲嚕駄、摩賀吠誐、路
攞介賀嚩、摩賀尾灑阿蘖摖多毎怛囉喞路、韈囉灑陀鏤、伊訶、贍部儞尾閉薩嚩怛佗蘖
多、薩底曳曩、娑嚩賀、怛吒怛吒、底致底致、咄跓咄跓、摩賀麽抳、麽枲吒、冐里駄
囉。試尾灑、嚧比拏、娑麽囉多、底哩、囉怛曩、地瑟姹難、嚩曰囉駄囉薩底曳曩、韈
囉灑多、伊訶贍部儞尾閉、娑嚩賀、迦攞迦攞、枳里枳里・枲魯枲魯麽護娜迦嚩悉諾、
摩賀勃囉枲吒夜曩、鼻夜以諾、阿蘖摖多、毎怛蘖、喞帝曩、伊訶贍部儞尾閉、韈囉灑
駄囉、母此呂惹多、怛佗蘖多、薩底曳曩、怛他蘖跢、地瑟姹寧曩、嚩曰囉播抳囉枳孃
跛野底、囉攞囉攞、哩里哩里、嚕魯嚕魯、尾誐多弭娜嚩、婆囉多、薩嚩部惹虐、怛哩
拽怛佗蘖多薩底曳曩、伽麽伽麽、祇弭祇弭、具母母、娑嚩賀阿嚩賀夜弭、薩嚩曩嚩、

毎怛囉喞帝曩、冐地喞多、布囉網誐謎曩、怛囉怛囉、底哩底哩、覩嚕覩嚕、娑嚩賀、
尾枲羝曩曩、尾訖哩多、試囉灑娑賀娑囉試囉灑囉訖跢乞灑、摩賀韈囉拏、摩賀摩護囉
誐曩、嚩訶夜弭、暴暴摩賀部惹虐娑麽囉多、摩賀迦嚕抳迦喃、薩嚩本孃帝惹娑、帝介
哆喃、輓多訖禮舍喃、怛佗誐哆曩麽、地瑟姹難、誐娜誐娜、儗儞儗儞、窶努窶努、
娑嚩賀、阿鉢囉、底訶多麽攞、跛囉訖囉謨、祖駄嚕韈囉灑駄嚕、鉢囉韈囉灑帝、訶贍
部儞尾閉捨囉捨囉始哩始哩、秫嚕秫嚕、娑嚩賀、暴暴、摩迦曩、虐娑嚩、枲攞、遇怛
囉麽努裟麽囉多、韈囉灑駄囉、嗢此哩惹帝、訶贍部儞尾閉、薩嚩禰嚩、薩底野、地瑟
姹寗曩、麽尾攬麽多、娑嚩賀、沒囉賀麽、薩底野、地瑟姹寗曩、鉢囉韈囉灑帝、訶、
贍部儞尾閉、娑嚩賀、爍訖囉薩底曳曩鉢囉韈囉灑多摩賀摎咄摩賀惹、薩底曳曩、鉢囉
韈囉灑帝、訶、贍部儞尾閉、娑嚩賀、阿瑟吒麽迦、薩底曳曩鉢囉韈囉灑多摩賀曩虐、
伊訶贍部儞尾閉娑嚩賀、鉢囉韈囉灑多、摩賀曩虐、素嚕多阿半曩、薩底曳曩、伊訶贍
部儞尾閉、娑嚩賀、鉢囉韈囉灑多、摩賀曩虐、娑訖哩那誐弭薩底曳曩、伊訶、贍部儞
尾閉、娑嚩賀鉢囉韈囉灑多、摩賀曩虐、阿曩誐弭、薩底曳曩、伊訶、贍部、儞尾閉、
娑嚩賀、鉢囉韈囉灑多、摩賀曩虐、阿囉恨薩底曳寗、訶、贍部儞尾閉、娑嚩賀、鉢囉

嚩囉灑多、摩賀曩虐鉢囉底曳迦、母馱薩底曳寗、訶、贍部儞尾閉、娑嚩賀鉢囉嚩囉灑
多、摩賀曩虐、薩嚩冐地薩怛嚩、薩底曳寗、訶、贍部儞尾閉、娑嚩賀、鉢囉嚩囉灑多、
摩賀曩虐、薩嚩怛佗蘗跢喃、薩底野地瑟姹寗曩、伊訶贍部你尾閉、娑嚩賀、薩嚩禰嚩
喃薩底曳曩、捨麼野多、薩冐鉢捺囉嚩抳、娑嚩賀、薩嚩曩誐喃、薩底曳曩、鉢囉嚩
囉灑帝、訶、摩賀畢哩體毘琰、娑嚩賀、薩嚩藥乞灑喃、薩底曳曩、囉乞灑多、薩嚩
薩怛嚩喃、娑嚩賀、薩嚩彥達嚩喃、薩底曳曩、跛賀囉多、薩冐播夜、素鉢捺囉嚩抳、
麼努灑喃、娑嚩賀、薩嚩阿素囉喃、薩底曳曩、尼顊嚩多野多、薩嚩尾灑麼、諾乞察怛
囉抳、娑嚩賀薩嚩誐嚕拏喃、薩底曳曩毎怛哩淫禦嚕多、薩嚩曩誐喃、野你訶、贍部
儞尾閉、摩賀嚩囉灑馱囉、隖此哩惹欲、娑嚩賀、薩嚩緊娜囉喃薩底曳曩、捨麼野多、
薩嚩播半、鉢囉賀攞娜野多、薩嚩薩怛鏤娑嚩賀、薩嚩麼護囉誐喃、薩底曳曩、尾補攞、
尾娑底囉拏、嚩囉灑馱囉、隖此哩惹多、散馱囉野多、半左嚩產、多囉伱抳、娑嚩賀、
薩嚩麼努灑喃、薩底曳曩、跛哩播攞野多、薩嚩麼努灑喃、娑嚩賀、迦囉迦囉枳哩枳哩、
矩嚕娜囉娜囉、儞哩儞哩、努嚕努嚕、曩吒曩吒、顊胝顊底、努跓努跓、試伽囉嚩呬顊
摩賀謎儉、謀馱嚇、謎祇謎祇、摩賀謎祇、摩賀謎祇、摩迦謎祇、謀馱嚇、謎具、儞庾

底帝、謎伽羯嚇謎伽羯嚇謎伽蘖惹寧、謎伽具史帝、謎伽冐里、謎伽麼邏達嚇、謎
伽尾步灑抳謎伽娑嚩寗、謎伽尾曩捨顊、謎伽蘖陛、謎伽惹𪘚、謎伽鉢囉陛、謎伽嚩
哩馱嚇、尾補攞謎伽、地庾史帝、謎伽野、枳跛尾帝、薩須跛賀嚇、儗哩建娜哩嚩帑顊
曩誐麼帝、娑誐嚩底勢麼賀謎祇室哩沫乳底、囉細試多、儈娑鉢勢、摩賀嚩多、曼拏囉
遇左嚇、摩賀曩誐、尾訖哩膩帝娑誐嚩底、報拏嚇、殺捺囉娑野曩、嚩哩馱哩抳、鉢囉
嚩灑、母馱薩底曳寗、訶、贍部儞尾閉娑嚩賀、伽囉伽囉祇哩祇哩具嚕具嚕、祇哩抳
祇哩抳、具麼具麼具麼、具麼哩具麼哩、曩誐試囉曬麼賀謎伽、麼里顊、尾儞、庾囉迦
邏跛、麼里顊薩嚩步惹誐、馱哩抳、謎伽跛吒、嚩娑怛囉馱囉抳、謎伽、尾數、虼囉過
左嚇、謎伽尾庾訶、嚩賀寧、蘖惹曩娜顊曩娜顊曩儞徵、麼賀謎伽、麼里顊、怛佗蘖多薩
底曳曩薩嚩曩誐嚩囉灑路、麼尾攬麼帝、訶、贍部儞尾閉、娑嚩賀、伽囉伽囉、祇哩、祇哩
具嚕具嚕祖嚕祖嚕、尒哩尒哩、惹囉惹囉、薩囉薩囉蘘拏蘘拏、蘖拏蘖拏、儗膩儗膩、
賀囉賀囉、呬里呬里、戶魯戶魯、怛攞怛攞、底里底里、覩魯覩魯、賀曩賀曩、諾賀諾
賀、鉢左鉢左、虼哩恨拏虼哩恨拏、沫娜沫娜、鉢囉沫娜、鉢囉沫娜、薩囉嚩囉灑、尾
覲南每怛嚇夜、枳孃跛野底、娑嚩賀、母第母第、母沒第母沒第、賀攞賀囉播半、薩嚩

薩怛嚩南、阿地瑟姹野、奔顎演、薩嚩母馱南、馱囉抳馱嚩、輸婆麼帝爨抳數、鉢囉跛抳、摩賀枳孃、怒勒計輸婆達謎薩底野鉢囉底枳寧摩賀夜曩儞庾史帝、路迦、惹瑟蘭婆誑嚩底母馱每怛嚩、阿布囉野、薩囉乞嚧怛囉抳束訖禮、濕吠擔鞳嚩半、拏囉嚩韋顎、度度嚩度度嚩、捨麼捨麼、扇多、麼曩細、薩嚩鞳囉灑尾覩南、尾色檢婆野、娑嚩賀、薩嚩怛羅拽陀嚩怛佗嚴多、薩底曳曩、每怛囉、唧怛多夜、迦嚕拏唧怛多夜、三藐沒囉多多布顎野麼唧多夜、麼賀曩誑囉、惹散租娜夜弭、娑嚩賀阿難多、跛哩迦囉、娑嚴囉迷伽尾庾訶帝租曼拏囉、擇怛囉、迦囉、囉殘、摩賀曩誑、地鉢底散租娜夜弭、鉢羅鞳囉灑帝訶贍部儒尾閉、娑嚩賀、難奴跛難奴、曩誑囉遺、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑諦訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、娑嚴啾、曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶贍部儒尾閉、娑嚩賀、阿曩嚩多跛單曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、麼曩娑尾難、曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、嚩嚕報曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、多乞灑犍、曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉娑嚩賀、地哩多囉瑟臨曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、母唧隣難、曩誑囉殘、散

租那夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部徐尾閉、娑嚩賀、愛囉嚩喃、曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝素緊、曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、報拏嚩曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、室哩帝惹珊、曩誑囉殘、散租娜夜弭鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、阿嚩婆曩矢棄難、曩誑囉殘、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝訶贍部儒尾閉、娑嚩賀、曀鑁、鉢囉目佉、薩嚩曩誑、囉惹、散租娜夜弭、鉢囉鞳囉灑帝、訶、贍部儒尾閉、娑嚩賀、曩霓曩霓、摩賀曩霓具囉麼曩細、曩誑紇哩乃曳、度麼渠黎、疙囉囉盧颯、鉢囉贊拏帝、惹、尾數疙嚩、阿試尾颯、阿咀具嚩、訖哩史拏、冰蘖嚴贊左黎、路攞尒賀吠、摩賀頗拏迦嚩、迦囉播勢、嘮捺囉嚩韋顎、跓跓謎、跛囉跛囉、畢哩畢哩、補嚕補嚕、尾娑普尒帝、咄嚕咄嚕、摩、賀暴霓、麼抳馱嚩、咽哩咽哩、戶嚕戶嚕、戶囉頗囉、嚩囉灑、嚩囉灑、惹攬母馱嚩、咎謀咎謀、囉邏賀計、但吒但吒、跓跓謀、跓跓謀、度度度度謎、謎伽鉢囉陛、謎伽嚩咽顎、茶迦茶迦、茶迦茶迦、跓跓謎、伽拏伽拏、矢棄顎、迦拏迦拏、誑拏誑拏、摩賀紇曩誑嚴抳、顎囉怛嚧母閉、惹囉得迦哩摩賀曩誑訖呾乃曳、具麼具麼、具麼跛夜娑底迦、葬儗哩、部葬誑謎尾迦吒、僧迦吒、具囉尾娑

普尒帝、尾紫稟婆寧、阿嚩賀夜弭、薩嚩曩嚩、薩嚩母馱、地瑟姹寧曩、薩嚩怛哩曳陀嚩怛陀嚴多、薩底曳曩、每怛囉唧帝曩、鉢囉韈囉灑帝、訶、贍部伺尼閉、娑嚩賀。

そのときに、三千大千世界の主たる無邊莊嚴海雲威德輪蓋大龍王、及び諸の龍王等並に龍の眷屬、佛の敎敕を聞て、皆な大に歡喜して信受し奉行しき。

天阿蘇羅樂叉等の　來て法を聽く者は至心に
佛法を擁護して長く存せしめ　各各に世尊の敎を勤行すべし
あらゆる聽徒の此に來至せるは　或は地上に在り、或は空に居して
常に人世において慈心を起し　日夜に自身法に依て住せり
願はくは諸の世界常に安穩にして　無邊の福智を以て群生を益し
あらゆる罪業並びに消除して　衆の苦を遠離して圓寂に歸せん
恒に戒香を用て體に塗り瑩き　常に定服を持して以て身を資け
菩提の妙華徧ねく莊嚴し　所住の處に隨て常に安樂ならん。

國譯大雲輪請雨經卷下 終

國譯仁王護國般若波羅蜜多經卷上

大興善寺三藏沙門不空　詔を奉じて譯す

仁王護國般若波羅蜜多經序品第一

是の如く我聞きき。一時、佛、王舍城の鷲峰山の中に住して、大比丘衆千八百人と俱なりき、皆阿羅漢にして諸漏已でに盡き、復た煩惱なし、心善く解脫し慧善く解脫し、九智と十智とありて、所作已でに辦じて、三假實の觀と三空門の觀と、有爲の功德と無爲の功德と、皆悉く成就せり。復た比丘尼衆八百人ありて俱なりき、皆阿羅漢なり。復た無量無數の菩薩摩訶薩あり、實智平等にして永く惑障を斷じて方便善巧あり、大行願を起し四攝の法を以て有情を饒益す、四無量心をもて普く一切を覆ふ、三明鑒達して五神通を得、無邊の菩提分法を修習して、工巧伎藝諸の世間を超え、深く緣生の空、無相、願に入り、滅定に出入して示現量り難し、魔怨を摧伏し雙べて二諦を照し、法眼普く見て衆生の根を知り、四無礙解ありて演說して畏れなし、十力妙智をもて雷のごとく法音を震ひ、無等等金剛三昧に近し。是の如くの功德皆悉く具足せり。

復た無量の優婆塞衆と優婆夷衆とあり、皆聖諦を見る。復た無量の七賢行の、念處と正勤と、神足と、根と力と、八勝處と十遍處と十六心行とを修して、諦現觀に趣くあり。復た十六大國王の波斯匿王等あり、各の若干千萬の眷屬と俱なりき。復た六欲天王の釋提桓因等あり、其の眷屬無量の天子と俱なりき。色の四靜慮の諸の大梵王も、亦た眷屬の無量の天子と俱なりき。諸趣の變化の、無量の有情の阿修羅等、若干の眷屬と俱なりき。復た十方の淨土を變現して、而も百億の師子の座を現じて、佛其の上に坐して、廣く法要を宣べ給へり。一一の座の前に各の一華を現ず、是の百億の華は衆寶をもて嚴飾せり、諸の華の上に於て、一一に復た無量の化佛と無量の菩薩あり、四衆と八部と悉く皆無量なり、其の中の諸佛は各各に般若波羅蜜多を、宣說し展轉して、十方恒沙の諸佛國土に流遍せり。是の如く等、諸來の大衆あり、各の佛足を禮して、退きて一面に坐せり。

爾の時に世尊、初年の月の八日に、大寂靜、妙三摩地に入り給ひ、身の諸の毛孔より大光明を放ち、普く十方恒沙の佛土を照し給ふ。是の時欲界の無量の諸天、衆の妙華を雨し、色界の諸天も亦た天華を雨す、衆色間錯して甚だ愛樂すべし、時に無色界、諸の香華を雨す、香は須彌の如く、華は車輪の如く雲の如くにして、而も下りて遍ねく大衆を覆へり、普く佛の世界、六種に震動す。

爾の時に大衆自ら相ひ謂て言く、六覺世尊、前に已でに我等がために、摩訶般若波羅蜜多と金剛般若波羅蜜多と、天王問般若波羅蜜多と、大品等の無量無數の般若波羅蜜多を說き給へり、今日如來大光明を放ち給ふは、斯れ何事を作し給はんとする。時に室羅筏國の波斯匿王、是の思惟を作す、今佛是の希有の相を現じ給ふは、必ず法雨を雨し、普く皆利樂し給はんと。即ち寶蓋と無垢稱と等の、諸の優婆塞と舍利弗と須菩提と等の諸大聲聞と、彌勒と師子吼と等の諸の菩薩摩訶薩とに問ふて言く、如來の現じ給ふ所は是れ何の瑞相ぞやと。時に諸の大衆能く答ふる者なし。波斯匿王等、佛の神力を承けて廣く音樂を作し、欲●色の諸天も各の無量の天の諸の伎樂を奏す、聲三千大千世界に遍せり。

爾の時に世尊、復た無量阿僧祇の光を放ち給ふ、其の明雜色なり、一一の光の中に寶蓮華を現ず、其の華に千葉あり、皆金色を作す、上に化佛有して法要を宣說し給ふ、是の佛の光明普く十方の恒河沙等の、諸佛の國土に於て、緣あれば斯に現ず、彼の他

方の佛の國の中に、東方の普光菩薩摩訶薩、東南方の蓮華手菩薩摩訶薩、南方の離憂菩薩摩訶薩、西南方の光明菩薩摩訶薩、西方の行慧菩薩摩訶薩、西北方の寶勝菩薩摩訶薩、北方の勝受菩薩摩訶薩、東北方の離塵菩薩摩訶薩、上方の喜受菩薩摩訶薩、下方の蓮華勝菩薩摩訶薩あり、各の無量の百千倶胝の菩薩摩訶薩と皆來りて此に至り、種種の香を持し種種の華を散し、無量の音樂を作して、如來を供養し佛足を頂禮し、默然として退き坐して、掌を合せて恭敬して、一心に佛を觀上つる。

仁王護國般若波羅蜜多經觀如來品第二

爾の時に世尊、三昧より起て師子の座に坐して、大衆に告げて言はく、吾れ十六の諸の國王等、咸な是の念を作すを知れり、世尊大慈普く皆我等諸王を利樂し給へり、云何してか國を護らんと。善男子、吾今先づ諸の菩薩摩訶薩のために、佛果を護り十地の行を護ることを說かん、汝等皆應さに諦かに聽き、諦かに聽きて、善く之を思念すべし。是の時に大衆波斯匿王等、佛の語を聞き已て、咸な共に讚じて言く、善い哉、善い哉と、即ち無量の諸の妙寶華を散じ、虛空の中に於て變じて寶蓋となる、諸の大衆を覆ふて周遍せざるなし。時に波斯匿王即ち座より起て佛足を頂禮して、掌を合せて長跪して、佛に白して言く、世尊、菩薩摩訶薩、云何んが佛果を護り、云何んが十地の行を護らん。

佛、波斯匿王に告げて言く、佛果を護るとは、諸の菩薩摩訶薩、應さに是の如く住すべし、一切の卵生と胎生と濕生と化生とを敎化して、色の相を觀ず、色の如を觀ず、受想行識と我人と知見と常樂我淨と、四攝と六度と、二諦と四諦と、力と無畏と等の一切の諸行と、乃至菩薩と如來とも亦た復た是の如く、相を觀ず如を觀ず、所以は何となれば、諸法の性即ち眞實なるを以ての故に、來なく去なく、生なく滅なく、眞除に同じ法性に等し、二なく別なく猶し虛空の如し、(一)蘊●處●界の相は我と我所となし、是を菩薩摩訶薩の、般若波羅蜜多を修行すとなす。

波斯匿王、佛に白して言さく、世尊、若し菩薩と衆生と性に二なくんば、菩薩は何の相を以て而も衆生を化するやと。佛の言はく、大王、色●想●行●識と常●樂●我●淨との法性、色に住せず非色に住せず、受想行識と常樂我淨とも、亦た淨に住せず非淨に住せず、何を以ての故に、諸法の性は悉く皆空なるを以ての故に、世諦に由るが故に、三假に由るが故に、一切有情と蘊●處●界の法と、造福と非福と、不動行等との因果皆

(一)蘊處界五蘊、十二處、十八界。

有なり、三乘の賢聖の修する所の諸行乃至佛果も、皆名けて有となす、六十二見も亦た名けて有となす。大王、若し名相に著して、諸法の六趣・四生と三乘の行果とを分別せば、即ち是れ諸法の實性を見ざるなり。波斯匿王、佛に白して言さく、諸法の實性は清淨平等にして、有にあらず無にあらずんば、智云何んが照さんと。佛の言はく、大王、智は實性は有にあらず無にあらずと照す、所以は何んとなれば、法性空なるが故に、是れ即ち色・受・想・行・識と、十二處と十八界と、士夫の六界と、十二因緣と二諦と四諦と、一切皆な空なり、是の諸法等は、生に即して即ち滅なり、有に即して即ち空なり、刹那刹那も亦た復た是の如し、何を以ての故に、一念の中に九十刹那あり、一刹那に九百の生滅を經る、諸の有爲の法は悉く皆空なるが故に、甚深の般若波羅蜜多を以て、諸法を照見するに一切皆な空なり、內も空なり外も空なり、內外も空なり空も空なり、大空なり勝義空なり、有爲も空なり無爲も空なり、無始も空なり、畢竟空なり、散空なり、本性空なり、自相空なり、一切法空なり、般若波羅蜜多も空なり、因も空なり、佛果も空なり、空を空するが故に空なり、諸の有爲の法は法、集るが故に有なり、受、集るが故に有なり、名、集るが故に有なり、因、集るが故に有なり、果、集るが故に有なり、六趣の故に有なり、十地の故に有なり、佛果の故に有なり、一切空の故に有なり、善男子、若し菩薩、法相に住せば我相と人相と有情と知見とあり、世間に住すとなす、即ち菩薩にあらず、所以は何となれば、一切の諸法は悉く皆な空なるが故に。若し諸法に於て而も動せず生せず、相もなく無相もなきを得ば、見を起すべからず、何を以ての故に、一切の法は皆な如なり、諸の佛法僧も亦た如なり、聖智現前する最初の一念に、八萬四千の波羅蜜多を具足するを歡喜地と名く、障盡さて解脫し運載するを乘と名く、動相滅する時を金剛定と名く、體相平等なるを一切智智と名く、大王、此の般若波羅蜜多の文字章句は、百佛と千佛と百千萬億の一切の諸佛と、而も共に同じく說き給へり、若し人ありて、恒河沙の三千大千世界に於て、中に滿つる七寶を以て、用つて大千世界の一切の有情に布施して、皆な阿羅漢果を得せしめむよりは、人ありて此の經の中に於て、乃至一念の淨信を起さむには如かじ、何に況や能く一句を受持し讀誦し、解するものあらんをや。所以は何んとなれば、文字の性離せり、文字の相なし、法にあらず非法にあらず、般若空なるが故に、菩薩も亦た空なり、何を以ての故に、十地の中に於て、地地に皆な始生と住生と及び終生とあり、此

の三十の生悉く皆な是れ空なり、一切智智も亦た復た空なり、大王、若し菩薩、境を見(み)、智を見、說を見、受を見るは即ち聖見にあらず、是れ愚夫の見なり、有情の果報と三界とは虛妄なり、欲界は分別の造る所の諸業あり、色の四靜慮は定の作(な)す所の業あり、無色の四空には定の起す所の業あり、三有の業果は一切皆な空なり、三界の根本たる無明も亦た空なり、聖位の諸地には無漏の生滅あり、三界の中に於て、餘の無明の習と變易の果報も亦た復た皆な空なり、等覺の菩薩は金剛定を得、二死の因果空なり、一切智も空なり、佛無上の覺と種智圓滿して、擇(チヤク)と非擇との滅と、眞淨法界なると性相平等なり、應用(オウユウ)も亦た空なり、善男子、若し般若波羅蜜多を修習することあらば、說く者も聽く者も、譬へば幻士の、說もなく聽もなきが如し、法は法性に同じ、猶し虛空の如し、一切の法皆な如(ニヨ)なり、大王、菩薩摩訶薩の、佛果を獲ること此の如しとなす。

爾の時に世尊、波斯匿王に告げて言はく(のたま)、汝何の相を以て而も如來を觀るやと。波斯匿王の言さく、身の實相を觀ず、佛を觀ずるも亦た然なり、前際なく後際なく中際なし、三際に住せず三際を離れず、五蘊に住せず五蘊を離れず、四大に住せず四大を離れず、六處に住せず六處を離れず、三界に住せず三界を離れず、方に住せず方を離れず、明と無明と等し、一にあらず異にあらず、此にあらず彼にあらず、淨にあらず穢にあらず、有爲にあらず無爲にあらず、自相なく他相なく、名なく相なく、强なく弱なく、示なく說なく、施にもあらず慳にもあらず、戒にあらず犯にあらず、忍にあらず恚にあらず、進にあらず、怠にあらず、定にあらず亂にあらず、智にあらず愚にあらず、來にあらず去にあらず、入にあらず出にあらず、福田にあらず不福田にあらず、相にあらず無相にあらず、取にあらず捨にあらず、大にあらず小にあらず、見にあらず聞にあらず、覺にあらず智にあらず、心行處滅し言語道斷し、眞際に同じ法性に等し、我れ此の相を以て而も如來を觀たてまつると。佛の言はく(のたま)、善男子、汝が說く所の如し、諸佛如來の、力・無畏・等の恒沙の功德と、諸の不共法と悉く皆な是の如し、般若波羅蜜多を修する者は、應さに是の如く觀ずべし、若し他觀の者は名けて邪觀となすと。是の法を說き給ふ時、無量の大衆法眼淨を得たり。

仁王護國般若波羅蜜多經菩薩行品第三

爾の時に波斯匿王、佛に白して言さく、世尊、十地の行を護る、菩薩摩訶薩は應さに

云何んが修行し、云何んが衆生を化せん、復た何の相を以て而も觀察に住すべきや。佛、大王に告げたまはく、諸の菩薩摩訶薩は、五忍の法に依りて以て修行をなす、謂ゆる伏忍と信忍と順忍と無生と、皆な上中下あり、寂滅忍に於て而も上下あり、名けて菩薩の般若波羅蜜多を修行すとなす、善男子、初の伏忍の位に習種性を起し十住の行を修す、初の發心の相に恒河沙の衆生あり、佛法僧を見て十信を發す、謂ゆる信心と念心と精進心と慧心と定心と不退心と戒心と願心と護法心と廻向心となり、此の十心を具して而も能く少分、諸の衆生を化して、二乘と一切善地を超過す、是れを菩薩の初の長養心となす、聖胎とするが故に。復た次に、性種性の菩薩は、十種の波羅蜜多を修行して十對治を起す、謂ゆる身と受と心と法との、不淨と諸苦と無常と無我とを觀察して、貪瞋癡の三不善根を治し、施と慈と惠との三種の善根を起す、三世を觀察す、過去の因忍と、現在の因果忍と、未來の果忍となり、此の位の菩薩は廣く衆生を利して、我見と人見と、衆生等の想と外道の倒想とを超過して、壞すること能はざる所なり。

復た次に、道種性の菩薩は、十廻向を修し十忍心を起す、謂ゆる五蘊の色●受●想●行●識を觀じて、戒忍と定忍と慧忍と解脫忍と解脫知見忍とを得、三界の因果を觀じて、空忍と無相忍と無願忍とを得、二諦の假實を觀じて諸法の無常に無常忍を得、一切法空に無生忍を得。此の位の菩薩は轉輪王となりて、能く廣く一切衆生を化利す。

復た次に、信忍の菩薩は、謂く歡喜地と離垢地と發光地となり、能く三障の色煩惱縛を斷じて、四攝法の布施と愛語と利行と同事とを行じ、四無量の慈無量心と悲無量心と喜無量心と捨無量心とを修し、四弘願を具して、諸の纏蓋を斷じて常に衆生を化して、佛知見を修して無上覺を成じ、三解脫門の空解脫門と無相解脫門と無願解脫門とに住す、此れは是れ菩薩摩訶薩初發心より、一切智に至るまでの諸法の根本なり、一切衆生を利益し安樂す。

復た次に順忍の菩薩は、謂く焰慧地と難勝地と現前地となり、能く三障の心煩惱縛を斷じて、能く一身に於て遍ねく十方の億佛の刹土に於て、不可說の神通と變化とを現じて、衆生を利樂す。

復た次に、無生忍の菩薩は、謂く遠行地と不動地と善慧地となり、能く三障の色心の習氣を斷じて、而も能く不可說の身を示現して、類に隨ひて一切の衆生を饒益す。

復た次に寂滅忍とは、佛と菩薩と同じく此の忍に依る、金剛喩定にして下忍の位に住するを、名けて菩薩とす、上忍に至るを一切智と名く、勝義諦を觀じて無明の相を斷ず、是れを等覺となす、一相無相にして平等無二なるを第十一の一切智地となす、有にあらず無にあらず、湛然清淨にして來なく去なく、常住不變にして眞際に同じく法性に等し、無緣の大悲をもて常に衆生を化して、一切智乘に乘じて來りて三界を化す。善男子、諸の衆生の類の、一切の煩惱と業と異熟果と二十二根は三界を出でず、諸佛の應化法身を示導し給ふも亦た此れを離れず、若し說いて三界の外に於て別に更に、一の衆生界ありと言ふ者あらば、即ち是れ外道の大有經の說なり、大王我れ常に諸の衆生に語ぐ、但だ三界の無明を斷じ盡す者を、即ち名けて佛となす、自性清淨なる本覺の性と名く、即ち是れ諸佛の一切智智なり、此れに由て衆生の本とすることを得。亦た是れ諸佛菩薩の行の本なり、是れを菩薩の、本修行する所の五忍法の中の十四忍となすなり。

佛の言はく、大王、汝先に問ふて言く、菩薩云何んが衆生を化せんとは。菩薩摩訶薩應さに是の如く化すべし、初の一地より後の一地に至るまで、自ら行ずる所の處、及び佛の行じ給ふ處、一切知見するが故に、若し菩薩摩訶薩、百の佛刹に住して、贍部州の轉輪聖王と作りて、百法明門を修して、檀波羅蜜多を以て平等心に住し、四天下の一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、千の佛刹に住して、忉利天の王と作りて千法明門を修して、十善道を說いて一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、萬の佛刹に住して夜摩天の王と作りて萬法明門を修して、四禪定に依て一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、億の佛刹に住して覩史多天の王と作り、億法明門を修し菩提分法を行じて、一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、百億の佛刹に住して、化樂天の王と作りて百億法明門を修し、二諦と四諦とをもて一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、千億の佛刹に住して、他化天の王と作りて千億法明門を修して、十二因緣の智をもて一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、萬億の佛刹に住して住して、初禪の梵王と作りて萬億法明門を修して、方便善巧智をもて一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、百萬微塵數の法明門を修して、雙照平等にして神通願智をもて一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、百萬億阿僧祇の微塵數の佛刹に住して、三禪の梵王と作りて、百萬億阿僧祇微塵數の法明門を修して、四無礙智を以て、一切衆生を化す、若し菩薩摩訶薩、不可說不可說の佛刹に住して、第四禪

の大梵天王と作りて、三界の主となりて、不可說不可說の法明門を修して、理盡三昧を得て、佛の行處に同じて、三界の原を盡して普く衆生を利すること、佛の境界の如し、是れを菩薩摩訶薩の諸王の身を現ずる、化導の事となす、十方の如來も亦た復た是の如く、無上覺を證して常に法界に遍して衆生を利樂す。爾の時に一切大衆、即ち座より起て不可說の華を散じ、不可說の香を焚いて如來を供養し、恭敬し稱讃したてまつる。時に波斯匿王即ち佛前に於て、偈を以て讃じて曰く、

世尊導師金剛の體　心行寂滅にして法輪を轉ず
八辯圓音をもて爲めに開演したまふ　時の衆、道を得ること百萬億なり
天人俱に出離の行を修して　能く一切の菩薩の道を習ふ
五忍功德妙法門を　十四の菩薩能く諦了したまふ
三賢十聖は忍中の行なり　唯だ佛のみ一人能く原を盡したまふ
佛・法・衆の海三尊の藏　無量の功德、中に於て攝す
十善の菩薩大心を發し　長く三界の苦輪海を別る
中下品の善は粟散王なり　上品の十善は鐵輪王なり
習種銅輪は二天下なり　銀輪は三天にして性種性なり
道種堅德の轉輪王は　七寶の金輪にして四天下なり
伏忍は聖胎にして三十人あり　十住と十行と十廻向とは
三世諸佛は中に於いて學ぶに　此の伏忍に由て生ぜざるはなし
一切の菩薩の行の根本なり　是の故に發心と信心とは難し
若し信心を得ば必ず退せずして　進みて無生初地の道に入り
自佗を化利して悉く平等なり　是れを菩薩の初發心と名く
歡喜菩薩は轉輪王なり　初めて二諦平等の理を照す
權りに有情を化して百國に遊び　檀施清淨にして群生を利す
入理の般若を名けて住となす　德行を住生するを名けて地となす
初住の一心に衆德を具ふ　勝義の中に於て而も動ぜず
離垢の菩薩は忉利の王なり　形を六趣と千の國土に現じて
戒足清淨にして悉く圓滿し　永く誤犯の諸の過失を離る
相なく緣なく眞實の性なり　體なく生なく二照なし

發光の菩薩は夜摩の王なり　形に應じて萬の諸佛の刹に往く
善く能く三摩地に通達して　隱顯自在にして三名を具す
歡喜と離垢と發光と　能く色縛の諸の煩惱を滅して
具さに一切の身口の業を觀じて　法性の清淨なるを照すこと皆な圓なり
焰慧の菩薩は大精進あり　覩史天王として億刹に遊ぶ
實智の寂滅と方便の智と　無生の理に達して空有を照す
難勝の菩薩は平等を得　化樂天王として百億の國なり
空空の諦觀二相なし　形を六趣に垂れて周ねからざることなし
現前の菩薩は自在の王なり　緣生の相に二なしと照見し
勝義の智光能く遍滿す　千億の土に往いて衆生を化す
焰慧と難勝と現前地と　能く三障の迷心の惑を斷じ
空慧寂然として緣覺なし　還て心空無量の境を照す
遠行の菩薩は初禪王なり　無相無生忍に通じて
方便善巧にして悉く平等なり　常に萬億の土に群生を化す

進みて不動法流地に入り　永く分段なくして諸有を超ゆ
常に勝義を觀じて照すこと無二なり　二十一生の空寂の行
順道法愛無明の習は　遠行の大士獨り能く斷ず
不動菩薩は二禪の王なり　變易身を得て常に自在なり
能く百萬微塵の刹に於て　其の形類に隨て衆生を化す
悉く三世無量の劫を知り　第一義に於て常に動せず
善慧の菩薩は三禪の王なり　能く千恒に於て一時に現ず
常に無爲の空寂の行にありて　恒沙の佛藏を一念に了す
法雲の菩薩は四禪の王なり　億恒の土に於て群生を化す
始めて金剛に入りて一切を了す　二十九生永く已に度す
寂滅忍の中下忍の觀　一轉すれば妙覺無等等なり
不動と善慧と法雲地と　前の所有る無明の習を除き
無明習相の識と俱に轉じて　二諦の理圓かにして盡さざることなし
正覺は無相にして法界に遍ず　三十生盡きて智圓明なり

寂照と無爲と眞解脫なり　大悲應現して與等なし　光明遍ねく照して照さざる所なし
湛然不動にして常に安隱なり　唯だ佛一人のみ淨土に居したまふ
三賢と十聖とは果報に住す　金剛の原に登りて常に動せず
一切有情は皆暫くの住なり　諸の衆生に隨て等しく憐愍したまふ
如來の三業德は無量なり　普く大衆を蔭ふて無量の光あり
法王は無上の人中の樹なり　心智寂滅して無緣にして照したまふ
口常に法を說いて義なきに非ず　甚深の句義を演說し給ふこと未だ曾つてあらず
人中の師子爲めに　大衆歡喜して皆益を蒙る
塵沙の刹土悉く震動す　是の故に我れ今頭面をもて禮したてまつる
世尊善く十四王を說き給ふ
爾の時に百萬億の恒河沙の大衆、佛世尊と及び、波斯匿王の、十四忍の無量の功德を說き給ふを聞きて大法利を獲、法を聞きて悟解して、無生忍を得て正位に入れり。
爾の時に世尊、大衆に告げて言はく、是の波斯匿王は已に過去十千劫に、龍光王佛の法の中に於て四地の菩薩たり、我れは八地の菩薩たり、今我が前に於て大いに師子吼す、是の如し是の如し、汝が說く所の如し、眞實の義を得たり思議すべからず、唯だ佛と佛とのみ乃ち斯の事を知り給ふ。善男子、此の十四忍は諸佛の法身なり、諸の菩薩の行なり思議すべからず、稱量すべからず、何を以ての故に、一切の諸佛は皆般若波羅蜜多の中に於て生じ、般若波羅蜜多の中に化し、般若波羅蜜多の中に滅す、而も實には諸佛は生も生ずる所なし、化も化する所なし、滅も滅する所なし、第一にして無二なり、相にあらず無相にあらず、自もなく他もなく、來もなく、去もなく、虛空の如くなるが故に。善男子、一切衆生の性は生滅なし、諸法の集るに由て幻と化とのごとくにして、而も(一)蘊と處と界との相あり、合もなく散もなし、法は法性に同じくして、寂然として空なるが故に、一切衆生は自性淸淨なり、作す所の諸行は縛もなく解もなし、因にあらず果にあらず、因果にあらざるにあらず、諸の苦と受行と、煩惱と所知と我相と人相と知見と受者と、一切皆空なるが故に、法の境界は空なり空なり無相なり無作なり、顚倒に順せず幻化に順せず、六趣の相なく四生の相なく、聖人の相なく三寶の相なし、虛空の如くなるが故に。善男子、甚深般若は知もなく見もなし、行せず緣せず捨せず受せず、正住して觀察するに而も照相なし、斯の道を行ずる者は

(一) 蘊云云　五蘊・十二處・十八界なること常の如し。